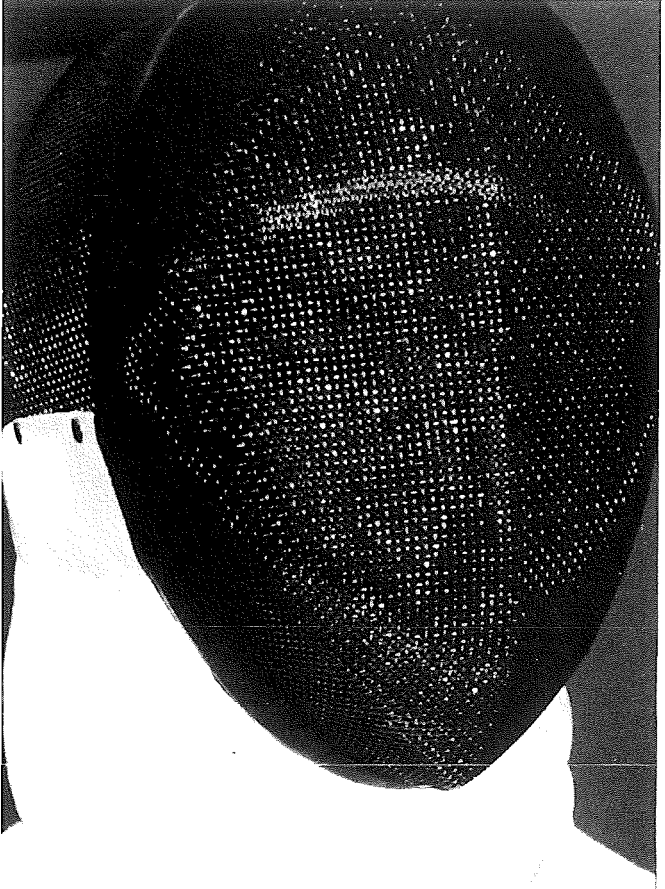
WASEDA FENCING DEPARTMENT 50th ANNIVERSARY
1996

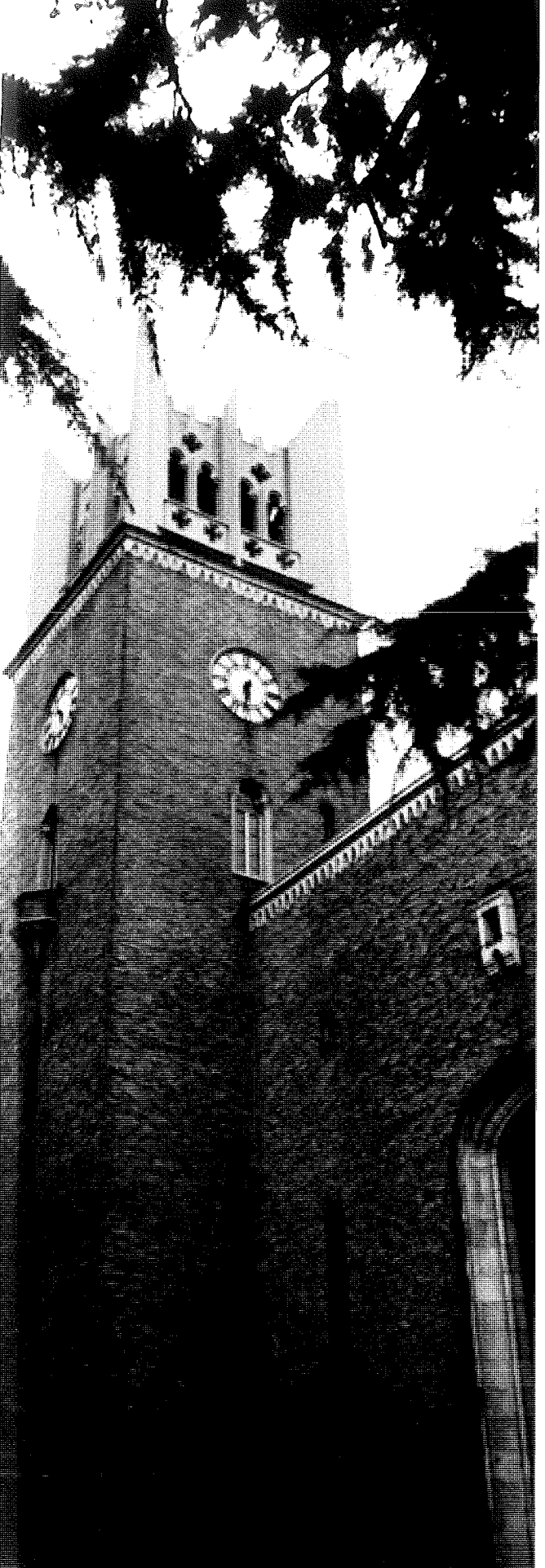
早稲田大学フェンシング部50年史

早稲田大学稲光会・早稲田大学フェンシング部



早稲田大学
フェンシング部50年史

早稲田大学稲光会・同フェンシング部

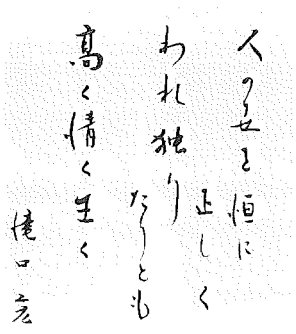


目　次　CONTENTS

創部のころ	滝口　宏	3
アルバム①	昭和21年～25年	4
	26年～27年	6
	28年～30年	8
座談会――創部時代を語る		10
草創期フェンシング部年表		13
会員寄稿	昭和21年度～30年度	14
アルバム②	昭和31年	20
	32年	22
	33年～34年	24
	35年～38年	26
会員寄稿	昭和31年度～38年度	28
アルバム③	昭和39年～44年	34
	44年～45年	36
	46年～49年	38
会員寄稿	昭和39年度～49年度	40
座談会――月曜会、集合！		47
稲光会幹事からのひと言		50
アルバム④	昭和50年度～54年度	52
	55年度～59年度	54
会員寄稿	昭和50年度～59年度	56
アルバム⑤	昭和60年～63年	62
	平成1年～3年	64
	4年～6年	66
	7年～8年	68
会員寄稿	昭和60年度～平成7年度	70
部長挨拶	戸谷　高明	76
監督挨拶	川名　宏美	76
会長挨拶	金子　誠	77
現役紹介		78
最新ルール解説		80
フェンシング部50年のデータ		82
稲光会会員名簿		86

創部のころ

滝口 宏
元体育局長・関東学連会長・初代部長（故人）



フェンシング部初代部長の滝口 宏先生（故人）

占領軍にとって恐ろしいものがいくつも日本にあった。われわれから見ればとり違えていると思うものまであったが、被占領下という状況ではやむを得ないともいえた。剣道は占領軍の恐ろしいものの一つであった。そこで学校から追放された。

やがて、竹刀が使われたが、剣道にいそしんだ学生の間から、思い切ってフェンシングをとり入れようという声があがった。フェンシングは既に戦前日本にはいっていた。私が知ったのは、かなり情緒的な姿のものであった。大正デモクラシーの名残りをそこに感じていた。もっとも、ダグラス・フェアバンクス全盛のあとであったから、そう勝手に感じたのであろう。

剣道の人たちが熱心にフェンシング部創設のため努力した。そのころ本部の教務部長であった佐々木八郎先生のところへ誰かが相談に行ったのであろう。佐々木先生から私に部の世話をしてみないか、との話しがあり、直ちにお受けした。

学生剣道の達人たちであるから順応性も高く、何より剣の道への執着からフェンシングをこなす力を十分もっていた。そのころ慶応でも同様に出発し、クラブを結成した。明治が一番早かったと思うし、法政もかたまった。中央も出発し、立教は少しあとだったかも知れないが順調にすべり出した。

早稲田での大学の承認は何ら支障がなかった。そこでクラブとして発足した慶応の部としての承認を得ることを期待し、こちらからも慶応にお願いしたりした。早慶第1回対抗戦は私の友人で慶応剣道部の主将をした吉田君に頼んで、たしか三井の運動場を選んで貰って開催した。秋の涼風の心地よい芝生の中の建物で、たのしかったことを思い出す。

やがて関東学連の発会を、この道の先輩校である明治で行った。駿河台の本館のてっぺんに部室があり、競技場があった。フェンシングをやる大学がふえ、それまで関東学連が主導権をもっていた学生フェンシング界も全日本学生連盟に成長し、関西学連の力が年毎に伸びてきた。

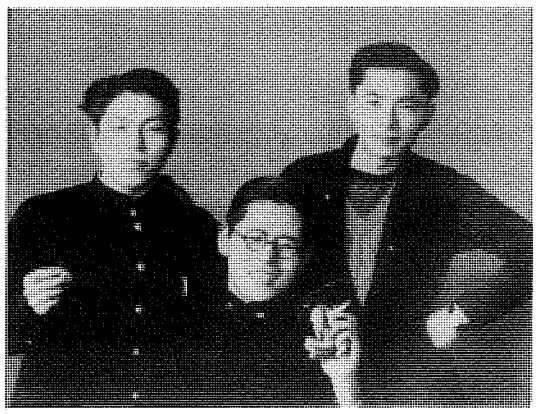
早稲田もはじめは強かった。明治の貫禄、中央の進歩と楽しい試合が多かった。部員諸君も気持の良い学生が多かった。よく遊びにも来てくれ、うちの娘などすっかりフェンシングにしたしんでいた。一人一人の名前をあげてはキリがないので失敬したほうがよいと思うが、古き良き日であった。教えを受けた方々も多いが、亡くなった森さんと早稲田でも教授をお願いした佐野さんの名をあげ、多くのお世話になった先輩にもお礼申し上げておきたい。

のちに、オリンピックを早稲田で開くことになり、このときは私が名前だけの強化委員長のようなものをつとめた。協会の事務所を野球の王君の新築したビルにおいたのも奇縁であった。3種目のうち一つは4位にくい込もうと考え、そのようになった。選手諸君の努力である。つづいてユニバーシアードも早稲田を使った。日学連の会長は、会場を関東関西交互で開くため、それに合わせて交替担当した。この年は関西の番であった。そのためであろうか、会場が早稲田なのに会長は関西であった。どこかに無理押しがあったのか知らないが、いまでも不思議に思っている。フェンシングは今でも好きでありフェンサー諸君には大いに興味を持っているが、組織には嫌気がさしてしまった。

忙しいので大学の部も親友・平先生にお願いして一歩退いた。今年で学連からも手を引くつもりでいる。早稲田の諸君が稲児会の支援激励の下にいっそう活発に部に没入して貰うことを願っている。部員諸君にとっては、青年時代に一つのことに全身全霊を投入することが、将来に大きな成果として戻ってくるものと思うし、部生活は、それに価するものと思う。

（この原稿は昭和51年発行の「フェンシング部30年史」より再録させていただきました）

昭和21年夏、稲門剣友会総会で部創設が認められ、フェンシング部が誕生！剣道の達人たちが、新しい剣の道を走り始めた。



22年のスナップ。左・中村、中・小藤の各氏

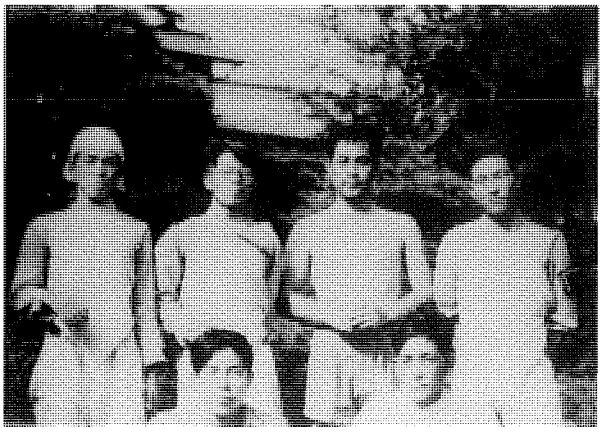
22年金沢国体。左から小藤、原、中村の各氏

22年金沢国体、兼六園でのスナップ

24年戦後合宿では、森寅雄先生から指導を受ける。写真は、森先生（向こう側）から、バラードのレッスンを受ける中村氏

基本に忠実な森寅雄先生のフォーム

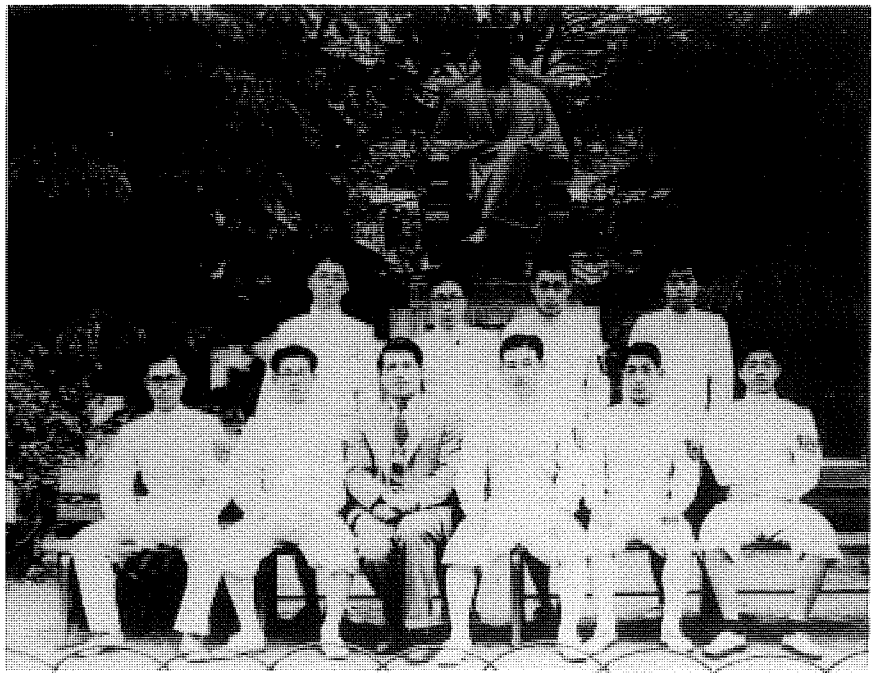
昭和21年～25年



24年の藪塚合宿。後列左から、森、斉藤、森先生、原。前列左から、中村、金子の諸氏

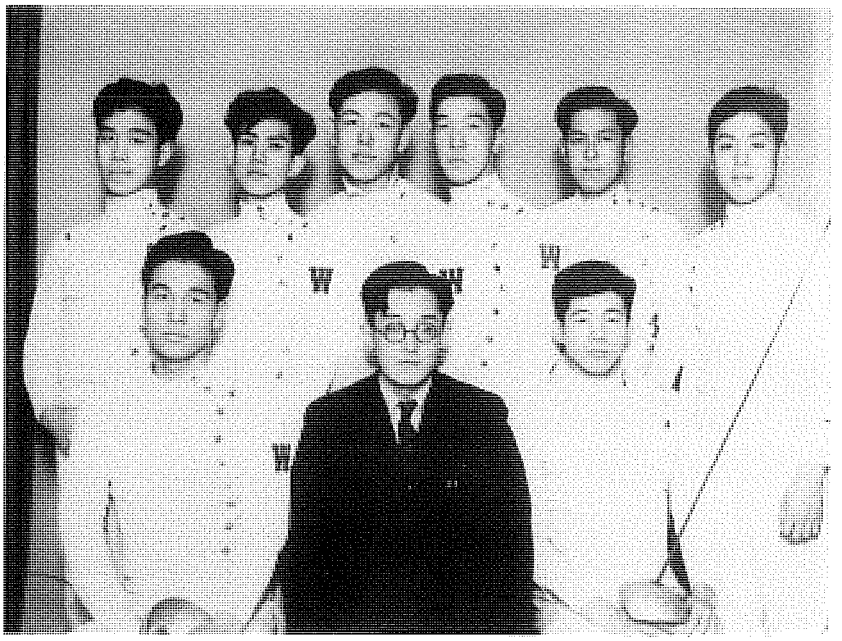
伸びやかでするどい森先生のアタック

24年、第２回早慶定期戦が早稲田道場で行われた。フルーレ、エペ、サーブルの３種目とも早稲田の勝利となり、２連勝する

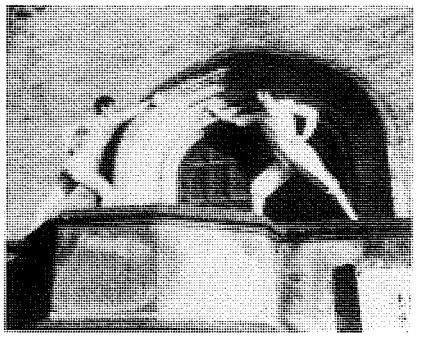


24年、滝口先生を囲んでの記念写真

草創期をへて、誰もが目標に向かって一直線に走り出した。フェンシング部としての新入部員も増えて、部活動も活発化する。



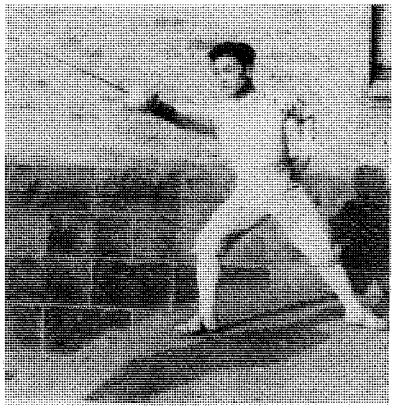
26年の記念写真



26年の政経祭で大隈講堂をバックにデモンストレーションをする左・石田、右・堀の両氏

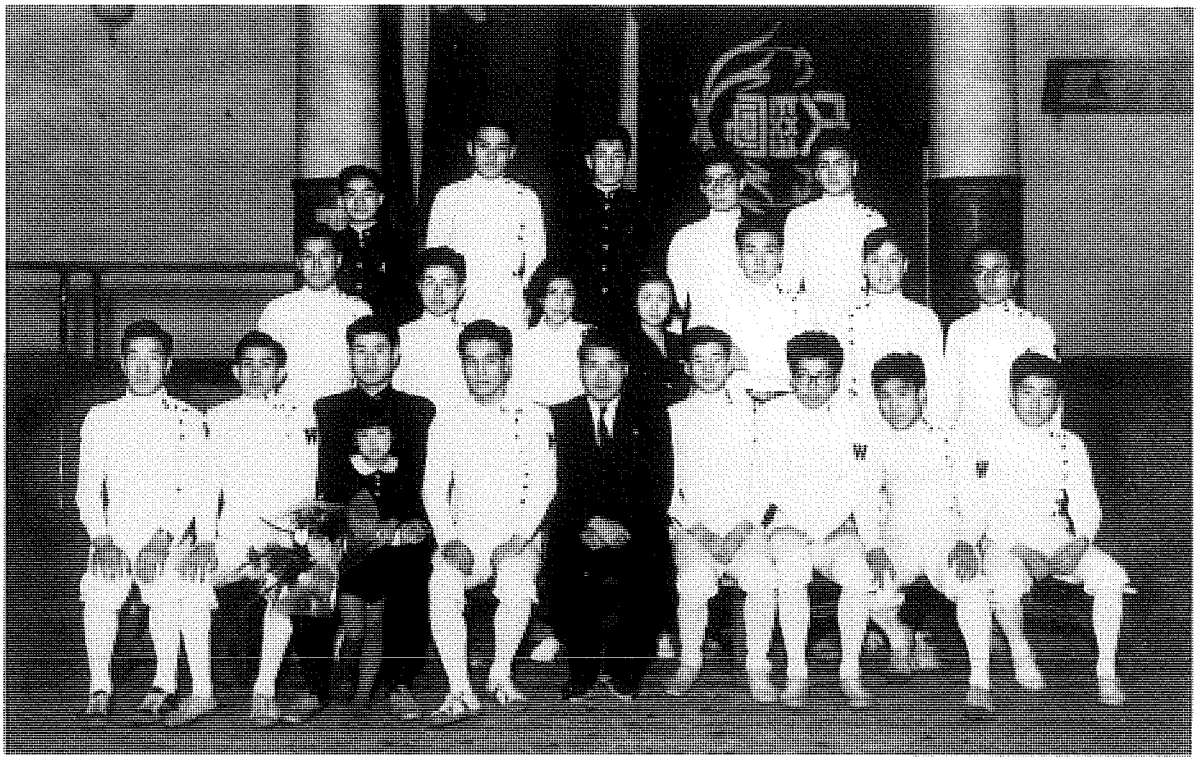
26年、政経祭。後列左・堀、右・佐藤、前列左より、梅渓、石田、島田の各氏

26年、夏のスナップ



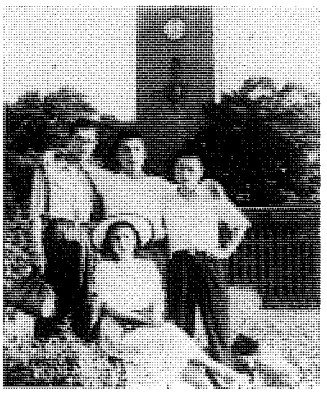
26年、佐藤主将キメのポーズ

昭和26年～27年

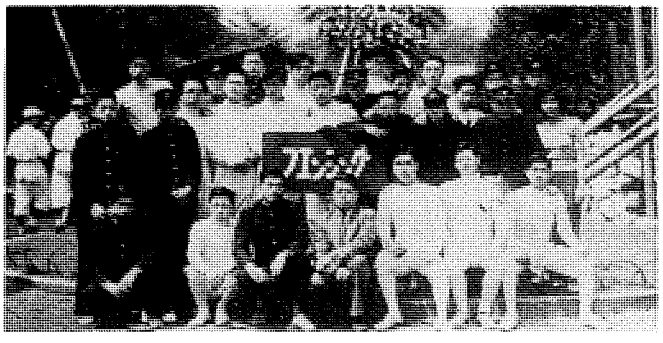


26年、第4回早慶戦は、前年に続き2連敗を喫す

27年、スキー場でのスナップ。左より、島田、佐藤、中村、岩田、堀の各氏



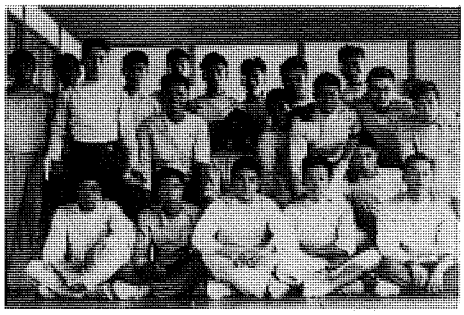
26年の早慶戦に敗れ、丸坊主になった左から、石田、佐藤、中村の各氏。前列は女子部員の横田さん



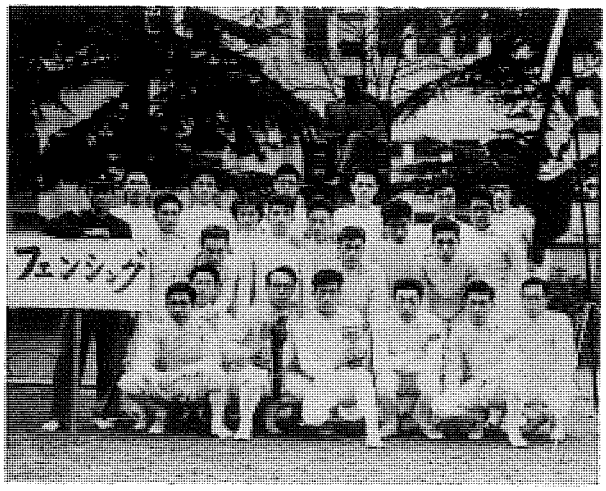
27年、体育祭。大隈公銅像前で滝口部長を囲んで

27年、卒業生送別会の記念写真。旧体育館前にて

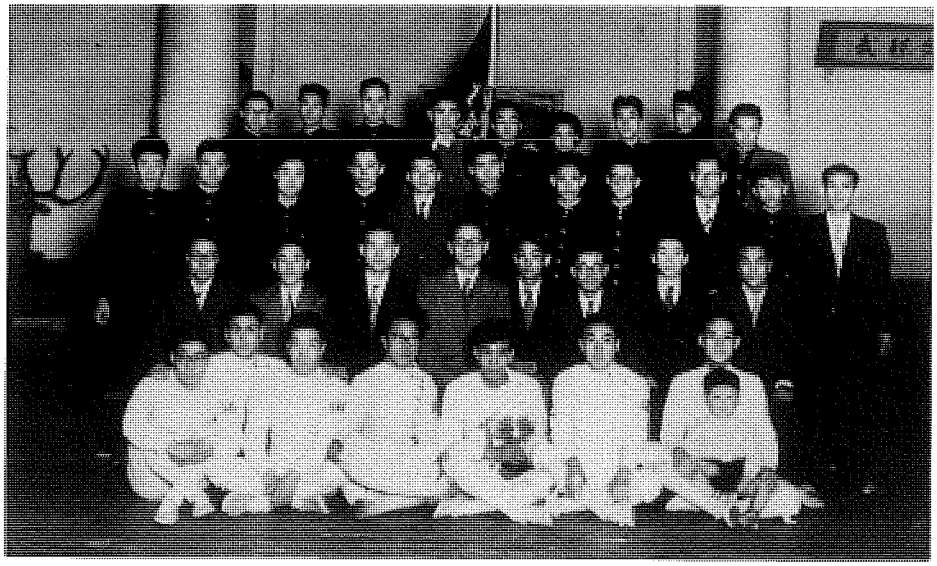
28年リーグ戦エペ優勝、29年竹村、全日本選手権エペ個人で優勝。30年リーグ戦フルーレ優勝、本道、ユニバーシアード出場！



28年、佐渡合宿でのスナップ



28年6月、リーグ戦エペ初優勝
この年10月の体育祭で名誉章を受ける



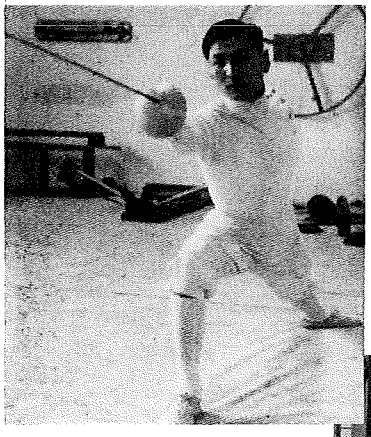
28年、早慶戦。3連敗のあと4年ぶりに勝利

28年、卒業式でのスナップ。旧体育館前にて

昭和28年～30年

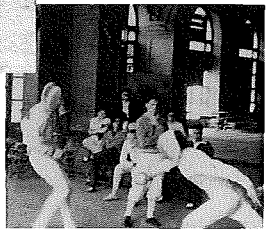
29年、滝口部長を囲んでの島田、梅渓両氏の卒業送別会スナップ

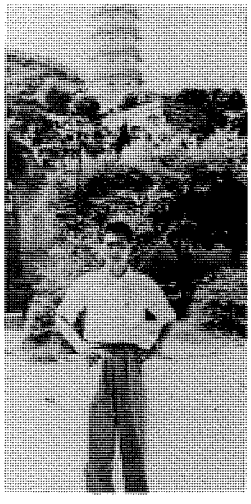
28年、全日本選手権で竹村選手がエペ個人優勝のカップ



本道主将のランジ

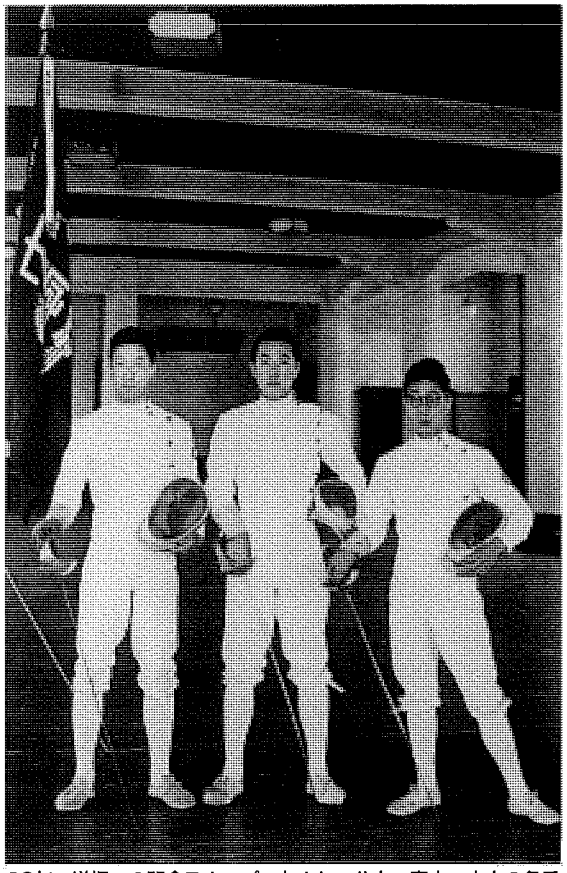
本道主将、香港で親善試合



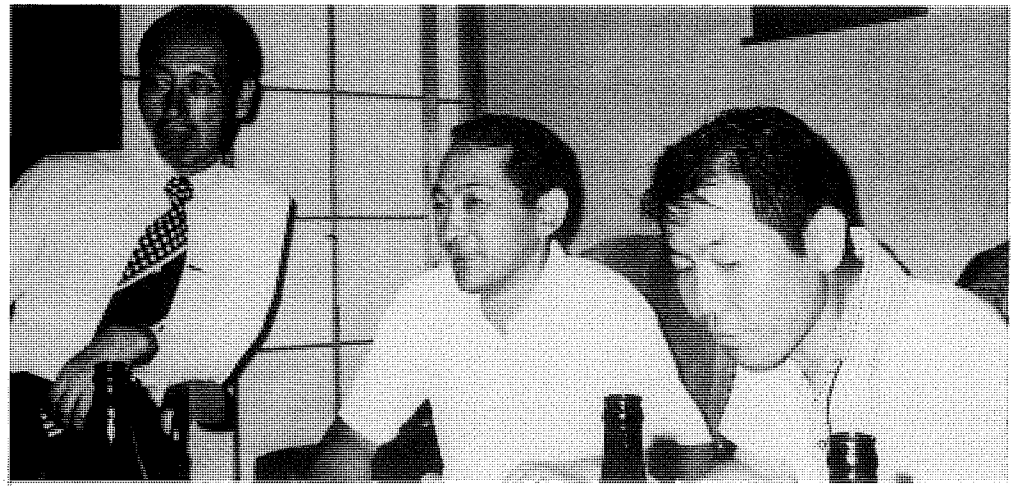


香港タイガーバゴダガーデンをバックの本道氏

30年、ユニバーシアードの本道氏スペイン選手、監督と



29年、道場での記念スナップ。左より、八木、青山、本木の各氏



右から、中村、金子、吉田の各氏

座談会●創部時代を語る

剣道有段者が「オン・ガード!」

出席者／吉田茂治、中村栄太郎、金子 誠、佐藤 武、越 茂樹
司　会／本道 博

この座談会は、昭和51年10月に発行されました「フェンシング部30年史」より再収録したものです。今はとき吉田茂治先輩、中村栄太郎先輩の創部当時を語る貴重なお話もあり、ぜひとも今後に伝えたいとの思いから、再掲載させていただきました。

※

金子　アレ！　珍しい人がいるね。

中村　だれだか分かりますか？

金子　越だろう。ずい分太ったね。

越　そんなに変わっていませんよ。十数年ぶりで東京に戻ってきました。すっかりご無沙汰続きで……。

吉田　今年の正月に新宿駅のホームで偶然見かけたんだ。「おい、越じゃないか」って声かけたら、やっこさんびっくりしてね。

越　世間は狭いものですね。

佐藤　われわれから逃れられない運命にあるんだよ、越さんは。（爆笑）

司会　のっけから稲光会らしい雰囲気が盛り上がりましたが、そろそろ本題に入りましょう。まず剣道部の人たちがなぜフェンシングを始めたのか、その辺のいきさつからお願いします。

中村　それはね、戦後すぐ「学校は剣道に関与すべからず」というマッカーサー指令が出たんだ。その結果、学校では剣道ができない。それで私なんかは、戸塚の警察道場へ行って稽古していた。

吉田　一番困ったのは、戦争で散り散りになった部員たちの消息がつかめないことだった。部室があればそこが連絡場所になるけど、「まかりならん」というご時世だからね。

中村　学徒動員にかり出された連中が続々と帰ってきましたね。ところが道場にはまだ罹災者が寝泊りしている。

金子　それで剣道をやりたい人たちは警察や関東配電、講堂館の道場などへ行って稽古していた。

吉田　そう。行く先々で先輩や同期生、後輩の消息を耳にする。それでいわゆるクチコミで部員が集まり、21年の夏には合宿をするほどになった。その頃に「フェンシング部を作って、とにかく部室を確保しよう」という声が高まってきた。

司会　具体的にフェンシングをやろうともちかけた人はだれですか？

中村　葦原さんだ。

吉田　21年の夏に大隈会館で稽古剣友会の総会を開き、その席で葦原さんが「剣道は無理だ。部費も出ない。部室もない。そこでフェンシング部を体育会の部として認めてもらい、剣道部はそれを隠れみのにしていかなければ存続できない」と事情を説明して先輩方の御了解をいただいたわけです。

越　そういういきさつでフェンシング部ができたわけですね。

中村　だからね、フェンシング部といっても、みんな剣道の稽古をやってる。学校側から文句が出ると「剣を振るのはフェンシングの基礎ですから、これでいいんです」なんていっちゃってね。

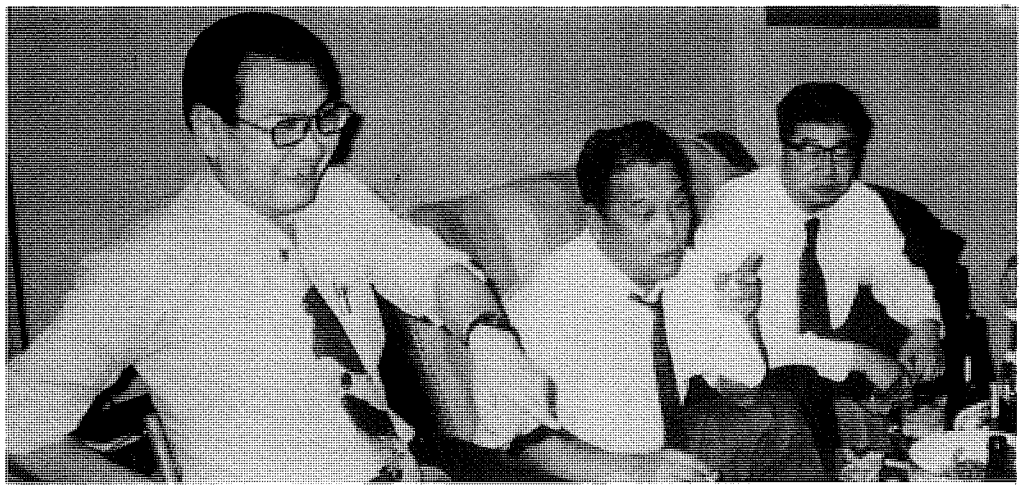
司会　すると、しばらくはだれもフェンシングをやらなかった？

中村　いや、そんなことはない。ちゃんと佐野さんのところへ習いに通った。

吉田　その前に森寅雄先生に会いに行ったんじゃなかったかな？

中村　あっ、そうですね。

佐藤　今の若い連中は知らないと思うから説明しておくと、森先生というのは天覧試合で優勝したこともある天才的な剣道家でね。戦前アメリカへ渡っ



右から、越、佐藤、本道の各氏

てフェンシングを習い、太平洋沿岸選手権のサーブル・チャンピオンになっている人。続いてフルーレにも優勝したはずだ。佐野雅之さんは、森先生の弟子で、フェンシング協会の理事長、今は体協の幹部になっている人。(当時)

中村 その森先生が帰国していると聞いてみんなで手分けして所在をつかもうと探し回った。やっとのことで桐生にいらっしゃるという事をつきとめ、会いに行ったわけだ。

吉田 22年の夏だったね。たしか私も一緒に行ったはずだ。

中村 そうだったですかね。すると吉田さん、黒田さん、私の三人で行ったことになる。昼ごろ桐生に着いて、商工会議所で昼食をご馳走になって、午後、森先生にお会いした。早稲田にもフェンシング部ができたことなど、いろいろお話をして、最後に森先生から「明治の三上隆彦君にマスク、フルーレをあずけてあるので、分けてもらいなさい」といわれた。

吉田 今度はそれを取りに行ったんだったね。それを持って佐野さんのところへ習いに行った。

中村 私の友人のお父さんが経営している会社の仕入課長が佐野さんだったのです。よく遊びに行っていたので、佐野さんとも面識があり、フェンシングをしていることも知っていた。

金子 で、フェンシング部ができたのだから、「中村、お前行ってこい」というわけか。

中村 そうそう。会社が須田町にあってね。黒田さん、吉田さん、斉藤さんらと一緒に夕方行って、佐野さんの仕事が終わるのを待っている。終わると「それっ」てんで、机やイスを片づけて即席の練習場をこしらえる。佐野さんは「おい、オレはまだメシも食ってないんだ」なんていうけど「いいから早く、早く」ってせかせて、9時頃まで練習する。習ったことを翌日、早稲田の道場で部員に教えるという繰り返しだった。

「部員第一号は越さん」

吉田 フェンシングの部員として入部した第一号はだれだった?

中村 越でしょう。

越 そんなもん、するつもりはなかったんです(笑)。学院から学部に入って、確か空手の練習かなんかで見物に行った。そうしたら、時間変更でフェンシングの練習になった。そのまま見てたら、話しかけてきた人がいた。

金子 だれだった?

越 小藤さんでした。

佐藤 そりゃ、えらい人につかまっちゃった。(爆笑)

越 「キミは、学院かね」というから「そうです」と答えると「まあちょっと来いや」と部室に引っぱって行かれた。それで「なかなかいい体格をしている」とかなんとかおだてられてね。(笑)「まあ、我々は本来剣道なんだが、こういうご時世だからフェンシングをやってる。これはこれでやってみると面白いもんだよ。キミもせっかく早稲田の人間になったのだから、ひとつ我々と一緒にやってみないか」などとうまいこと丸めこまれちゃった。(笑)

佐藤 弁がたつんだ、あの人は!

司会 佐藤さんも剣道をやっていたと聞いてますが……。

佐藤 やっと僕の出番が来た。(笑)僕は親父のすすめで小学校から剣道やっていたんです。ところが終戦になって、剣道をやる者がいなくなってしまった。情けなかったね。それで、よし、オレ一人になろうとも日本の剣道を絶やすようなことはしないぞと決意しましてね。

吉田 オーバーなんだよ、お前は。(一同爆笑)

佐藤 いや、本気でしたよ。早稲田へ入ってからも、ひまをみては戸塚署へ稽古に通っていた。

司会 すると剣道部員ではなかったんですね?

佐藤 個人的に続けていたんだ。ところがある日、僕の運命を大きく狂わせる人に出会った。この人にね(といって中村氏を指す)。

中村 バカヤロ、エヘヘ……。(爆笑)

佐藤 戸塚署の道場で中村さんから話しかけられたんだ。「キミは早稲田の学生で、これからも剣道を続けていくつもりなのか」というから「ハイ」と。すると、「大学にも部があるから、一度道場へ来い」って。それで、その日だったか、日を改めてだったかハッキリしないけど、道場へ顔を出したんだ。もちろん、すぐ入部しましたよね。

越 私が入部したすぐ後ぐらい。

佐藤 そう、越さんとは、だから同期になる。ところが入部してみると、剣道部員はみんなこれをやらなきゃならんのだから、お前もフェンシングをやれといわれてね。毎日々々フェンシングの練習だ。メチャクチャな話だと思

ったね。ところがある日、小藤さんに呼ばれてこういわれた。「お前も知っての通り、今の日本ではおおっぴらに剣道をやるわけにはいかない。だから5年間はガマンしてフェンシングをやれ。5年後に世界選手権で優勝しよう。そうすれば世界のフェンサー達が、なぜ日本人は短時間に強くなったかを研究するだろう。そこで剣道というものがあることを知る。剣道の素晴らしさが世界中の人々に認められることになるだろう。そうすれば我々は大手を振って剣道をできるようになる。だから、剣道をやりたかったらフェンシングをやれ」ってね。

金子 理路整然だ。(笑)

吉田 越を引き入れ、佐藤を口説き落としたわけだ。小藤さんの功績は大きいなぁ。(笑)

裸、ハダシでレッスン

司会 その頃の練習はどんな具合いだったんでしょうか。

佐藤 上半身は裸、ハダシ。

司会 エッ！ ウソでしょう。

佐藤 ホントだよ。プロテクターなんてつけると真剣味を欠く。裸のままアタックを受けろ、というんだ。

中村 用具もなかった。森先生から分けていただいたのが、確かフルーレ20本にマスク数個。それを法政、慶応、明治などの連中と分け合ったので、早稲田の取り分は剣が7～8本だったかな。もちろん当時はまだ剣なんて市販されていない。だから練習の時には口ぐちに「折るなよ」「折るなよ」ってね。(笑)

佐藤 あの頃、日本刀を作る鍛冶師が失業同然だった。そこに目をつけてフェンシングの剣を作らせに行ったものですよね。

中村 私と金子さんでかけ合いに行った。

金子 ところができあがったものは平べったくてね、日本刀と同じ。(爆笑)

中村 バランスも悪くてね。結局、使いものにならなかった。

佐藤 マスクが腐っていて、アタックをよけそこなったら突き抜けて剣が左目に刺さり気絶しちゃったなんてこともあった。

司会 うへー。(爆笑)

吉田 練習上の障害も多かったが、キャプテン問題にも頭を痛めたもんだ。

中村 剣道部との兼ね合いでね。

金子 フェンシング部の予算として学校から金をもらうのだけど、剣道の道具を買ったりして両派の対立意識がだんだん露骨になってきた。

吉田 戸塚球場下のひげの焼鳥屋で毎年キャプテン問題を相談するのだが、いつもモメにモメてね、参ったよ。

リーグ戦始まる

司会 その頃、ほかの大学ではどうだったんですか？

中村 前にもちょっと出たけど、法政、慶応、明治は戦前からやっていた。戦後いち早く体育会の部に認められたのは早稲田だったけど、中央、立教も間もなく始めた。

吉田 23年だったと思うけど、当時の先輩方、平沼さん、佐野さん（以上慶大OB）、二瓶さん、池内さん、進藤さん（以上法大OB）が集まり、それに早、慶、法から学生が出席して日本フェンシング協会を設立した。

中村 その翌年ですかね、学連を組織したのは。

金子 で、第1回のリーグ戦を早稲田の体育館で開催したわけですね。

佐藤 そのリーグ戦の開会式で挨拶した森貞雄さんの言葉は今も忘れませんよ。「諸君はまだ、フェンシングがどうのこうのいう段階ではない。だから基本を忠実に守ることに徹底してほしい。攻撃する時は腕を真っすぐ伸ばして正確に攻撃権を確立すること。アタックされたらパリー（パラード）しなさい」という内容だった。これは今でも通用する教えですよ。

司会 第1回リーグ戦の結果はどうだったんですか。

中村 優勝は明治だったかな。早稲田は確か3位だった。

佐藤 その後、中央の全盛時代が続くわけですが、あれはいち早く森先生を師範に迎えたからでしょう。

金子 中央は経済的に恵まれていたからね。早稲田の部費が10万だ15万だっていってる頃に、向こうはその三倍くらいあった。だからいい条件で迎えることができた。

中村 それもある。だけど、ホントは早稲田がそれより先にやるはずだったんです。でもキャプテン問題でゴタゴタしたりして中央に後れをとった。

佐藤 そうだ。早稲田がやるべきだったんだ。そうすれば、こんなに苦労しないですんだはずだ。(笑)

吉田 しかし、葦原さんたちが部を作られ、原、金子、斉藤、それに栄ちゃんや佐藤、越といった連中がフェンシング部らしい形をととのえた。本道、竹村、川名、成瀬といった名選手が誕生するのは、その直後のことだものなあ。

佐藤 そういう意味では、黄金時代の基礎工事を我々がやったんだという自負を持ってますよ。

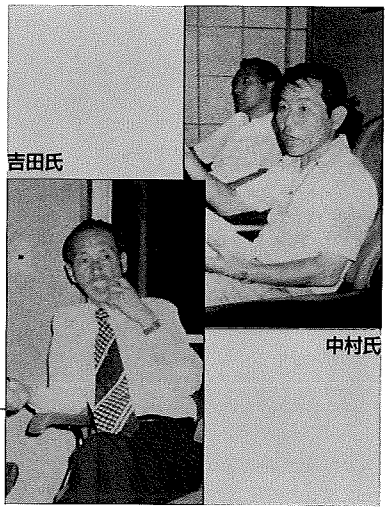
金子 あれから30年か。早いものだ。

中村 時代は大きく変っていくが、フェンシングの基本に変わりはないという事を、今の現役連中にしっかり認識してもらいたい。

越 腕を真っすぐ伸ばす……。

中村 そうそう。(笑)

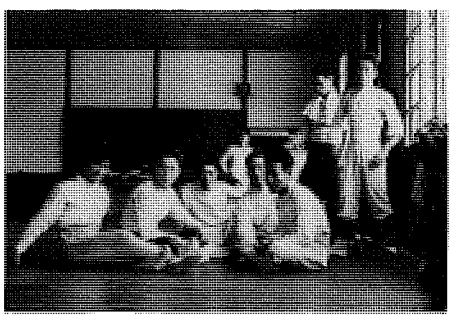
司会 いろいろと珍しいお話をうかがいました。不自由な時代に部の基盤を築いていただき感謝しております。本日はご多忙の中ありがとうございました。



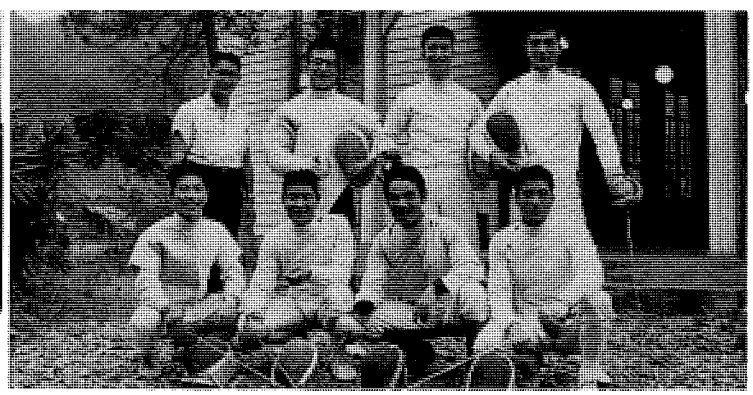
草創期の早稲田大学フェンシング部年表

この年表は「フェンシング部30年史」に掲載された原猛氏の原稿から、抜粋・転載したものです。

〔21年〕
10・29〜11・4　第一回国民大会（於京都西京極）原、競走部と出席
〔22年〕
5・13　小藤先輩と銀座へ。フェンシング部創立の打合わせ
5・24　小藤先輩と桐生へ。森寅雄氏を訪ねて
6・26　早慶交換稽古（剣道）
10・1　小藤先輩卒業送別会
10・31〜11・5　第二回国民体育大会（於金沢市）公会堂でオープン試合。森寅雄、牧真一氏を知る。また明治奈良氏も知る
11・15　関東配電本社（新橋）で剣道の試合、フェンシングの講習実施
11・18　深谷入部
12・1　フェンシング部合宿（於早大剣道場）約十名。米二升と一人三六〇円。中村栄太郎炊事当番
10　畑中入部
13　斉藤、畑中、深谷と会合し今後の部のあり方を検討す
16　森村学園（高輪）で平沼五郎氏、三上隆彦氏等と日本フェンシング協会について原打ち合わせに出席
20　慶応義塾と打ち合わせ
〔23年〕
1・20　剣の購入、ガード、ポンメルの製造方に着手（鉄工所仲村氏に依頼）
26　日本フェンシング協会理事会開催原出席す
1・30　滝口先生をお訪ねし早稲田大学フェンシング部長としてのご指導ご方針を聞く。また学連会長就任依頼
1・31　関東学生連盟発会式。滝口先生が会長就任。原学連副委員長となる
2・20　明治大学へ学連の打ち合わせ
4・1　早大フェンシング部主将となる
5・5　早大体育祭フェンシング部出場
5・8　日本フェンシング協会会議（日本橋小舟町三上事務所）
5・11　学連会議（三上事務所）
6・14〜18　合宿
18　関東リーグ戦始まる（五大学）
8・2〜9　桐生合宿。森寅雄氏指導
20　新潟県へ初めてフェンシングなるもの入る。理事長二上氏が指導
9・17　学連会議
10・3　リーグ戦開始（於関東配電）W18—K10。中央大学参加により六大学
12　フェンシング協会体協に加盟す
27　第三回国体出発（福岡）斉藤と国体開会式（平和台）
29　オープン試合
30　慶応で早慶戦打ち合わせ（慶応主将北原君と）
11・15　早慶戦打ち合わせ
12・3　第一回早慶定期戦（於三井クラブハウス）
4
〔24年〕
1・27　学連会議（於三上事務所）
2・26　学連のバッジ完成
中央大で講習会
4・1　早大フェンシング部主将となる（二年目）
5・5　早大体育祭
8　学連藪塚合宿
20　第一回京都遠征。同志社、立命館と定期戦を結ぶ
29　審判講習会
30　藪塚合宿
6・5〜26　リーグ戦
7・5　早大藪塚合宿
9・11　第四回国民体育大会東京予選（於森村高女）
25　関東学生選手権始まる
10・3　拓殖大学道場開き。フェンシング部創立される
5　森寅雄氏渡米送別会
8　原個人選手権通過
15　原フルーレ八位、エペ勝率一位
11・3　第四回国体（於東京）初めて電気審判器を見る。故障多し
12・10　早慶第二回定期戦（於早大）
13　納会
〔25年〕
3　卒業。後任を森、中村に依頼



昭和29年、軽井沢合宿にて



ローマ五輪代表チームの合宿練習。後左より、取材する川名、福田コーチ、小沢（中大OB）、田渕（同志社）、前左より、中村監督、藤巻（法政）、船水（中大OB）、大川（中大）

1946〜1955（昭和21年度〜30年度）

1

●小藤清己（22年度・主将）
必要性と正当性

私が初代主将として、最も頭を悩ませたのは、いかにして皆にフェンシングを積極的にやらせるかという事だった。部が出来たといっても、スムーズに進展したわけではない。

「フン、あんな西洋剣術などに手を出しおって……」

と顔をしかめる先輩もおいでだった。部員でありながらフェンシングにそっぽを向き、秘かに剣道の稽古ばかりをやる者もいた。そういう時に、私が主将を務めたのである。

部のリーダーとして、私が第一にやらなければならないことは、フェンシングをやることの必要性、正当性を確立し、それを部員に徹底させる事だった。フェンシングを、決していやいやながらやってはいけない。

その時頭にひらめいたのは、体操、レスリング、卓球などだ。いずれも戦後のスポーツ界では群を抜く存在だ。しかし、それらが日本で始められた当時は、

「体操、卓球がスポーツならば、蝶やトンボもスポーツのうち……」

などと陰口をたたかれたのを、私も見たり聞いたりしている。しかし斯界の先人たちはそれらのスポーツに独自の工夫をこらし、日本人の肉体的特徴をフルに取り入れ、見事に世界的なレベルにまで引き上げてしまったではないか。

フェンシングもそのひそみに習おう。さいわいなことに、われわれには剣道という基盤がある。その上にフェンシングの技術を組み立て、日本独自の、正しい方向づけのあるフェンシングを確立しよう。そしてオリンピック、世界選手権で優勝するのだ。

そうなれば、世界中の関係者は日本の存在に注目するだろう。

「日本はなぜ、短時日のうちにかくも強くなったのか？」

と考え、日本のフェンシングを研究するに違いない。そこで、基盤となっている剣道を知る。つまり剣道が全世界に認められる日が来るのだ。われわれは胸を張って剣道をする事ができる。剣道がやりたかったら、まずフェンシングに強くなれ！

こう考えをまとめ、部員たちにも機会あるたびにそれを伝え、徹底させるように努めたものだった。ありがたいことに、この考えは皆の賛同を得た。フェンシング部員としてまとまりのある練習が行われるようになったと記憶している。森寅雄先生の存在が、大きな心の支えだった。

卒業してからの想い出は、39年の東京オリンピックの時だ。あの時は母校の記念会堂がフェンシングの会場に当てられた。これに決まるまでもいろいろと曲折があった。ともあれ滝口先生を中心にして、稲光会の会員諸氏が何回も会合を重ね、一致団結して実現させた大事業であるといってよい。

55年は島根国体。私の生れ故郷である広瀬町がフェンシングの会場だ。奇しき縁だと思っている。

〈30年史より転載〉

●原　猛（23、24年度・主将）
ゴールデンエイジを遊ぶ

森村義行様は、早大フェンシング部創部当時、品川の森村学院の院長様で、日本フェンシング協会の会長をしておられました。

昭和43年（1968）、ユニバーシアードが早大体育館であり、その責任者でおいでございました（又、森村ごぜん様は東京ロータリークラブの国際委員長であられ、私もロータリークラブの一員でありましたのでメーキャップに帝国ホテルにつれて行かれたものです）。

東京ユニバーシアードは大浜総長、ラグビーの大西秘書課長の、お骨折で立派に開催され、日本は金銀銅を獲得することが出来ました。小生もあとで、森村会長からの墨蹟の禮状を頂き感謝したものであります。

故・滝口宏先生は、長年フェンシング部の部長をつとめられ、戦前から早大の錬成道場の指導者でありました。フェンシング部創部の際、文学部の佐々木教授に部長をお願いいたしましたところ、滝口先生を推薦され、部長になられました。又、先生は、会津八一のお弟子さんで、昭和31年会津先生がおなくなりになられました際、新潟においでになり私の家に三泊なされ、部のこと、考古学のこと、早稲田大学のことなど語り合ったものです（先生は旗本八万騎のうちの御家人の家柄で、下落合のお宅は会津先生のお世話で建てたものです）。

小生現在、71歳余になりました。杜甫いわく「人生七十古来稀なりは今は昔」。私は今やゴールデンエイジにさしかかったばかりの年で元気に遊んでおります。

一年後輩の斉藤上秋様がおなくなりになり、ガッカリ致しております。元気な御殿場の大人がなくなられ淋しくなりました。

入院も致しましたが、小生は元気に暮らしております。5月には、種々の旅行、6月には海外旅行、「アチラコチラ命がけ」で飛び廻っております。

●中村栄太郎（25年度・故人）
思いつくまま

雑事に追われ、いつしか、大切な時をうかうかと過し、早や三十余年、信じられぬ思いです。少年期に始めた剣

1946〜1955 出来事

1946年

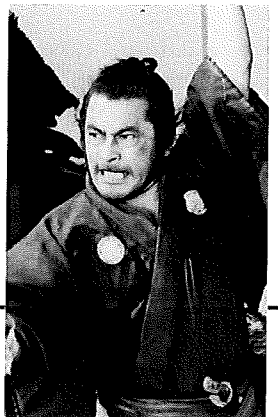
●イギリスのチャーチルが「鉄のカーテン」演説でソ連の対外政策を批判。翌年にはトルーマン米大統領も共産主義に対して「トルーマン・ドクトリン」を宣言、米ソの冷戦時代が始まる。

●アメリカのペンシルバニア大学で、真空管方式による最初の電子計算機「ENIAC」を開発。真空管1万8800本内蔵、重量30トンのシロモノだった。

●ハリウッドにスターや監督が続々と復帰し、活況を取り戻す。

●第1回カンヌ映画祭開催。ルネ・クレマンの「鉄路の闘い」がグランプリに。

●東宝が第1回目のニューフェイスを募集。合格したなかには、その後の大スター、三船敏郎や久我美子なども含まれていた。



●NHKラジオで「のど自慢素人音楽会」が放送開始される。

●甲子園の中等学校野球大会、東

道と、戦後のフェンシングとの両刀使い。在学中はただ夢中で、授業無視の稽古々々。剣道部の復活を夢見、フェンシング部の充実を願い、盲滅法、我意を通して過した日々。生活に追われる？　監督の職もいい加減にした懶惰に耐えない日々。今更恥ずかしく顔もしにくい思い出です。

しかしながら、終始念願していた事は、己の修練、あるいは後輩の指導に際して、故・森貴雄先生が子供に教える様に指導された「初心のうちは将来の大成を期して急がず、ゆっくりと、理論的な技術の基本を徹底的に体得し、あるいは体得させる努力をすべきであって、端末的な、シビアな技術は、その修練の過程において、その修練の積上げにより自然に構成され、熟成されて来るもので、あわてていたずらに高度の〝分不相応〟のテクニックにとらわれてはならない」という事を維持し実行したかった事でした。

残念ながら、その理想も理念も己自身の不甲斐なさから、実行も立証も出来ず「であろう」という空想に終った様でした。返す返すも残念でなりません。近年フェンシング関係者が対外的な接触も得られ、欧米の技術と風潮に馴じみ、解け込まれつつある事は大変嬉しく感じ思います。

私の関係した時代はその直前であり、真実を理解してはおりませんが、以前の様にただ形だけ、言語の直訳上の理解だけで、フェンシングの技術はこの様なものであるとの観念的技術論？　ではなく、今はより理論的に理解され、しかも実践的な指導と訓練を並行された練磨をより精力的に行っておられると思います。ただ残念ながらわが国からはフェンシングの大家？　いやプロとしてではなく技術的指導者として世界的に認められる人がまだ出てこないのは何故？　稽古が甘いから？……。

人の悪口、自分に出来ない事の要求はこのくらいにして、さてわれら早稲田人はどうしたの？

早稲田の人間は「やぼ」、ただ一心に猪突猛進、体得を理論で結ぶ、大変理想的な人種ではないか。今は？　弱い頭だけ？　いけませんね。若手の先輩達も最近は老骨に鞭打って稽古を始めたが、何ケ月になるかな？　初心にかえるつもりかな？　ちょっと無理じゃないかな？　いや無理ではないだろう。なにしろ一騎当千の強者揃い、先輩・後輩お互い未熟者同士が寄り集い、今一度初心にかえって、大変結構。

平部長、川名監督の努力に頭が下がります。見習わなくっちゃ……。

〈30年史より転載〉

●森　騰史（25年度・主将）
森先生のこと

早稲田大学フェンシング部が創立されてから、はやくも50周年を迎え、記念祝賀大会が開かれますことは、誠にご同慶に存するところであります。

当部には、いろいろな思い出があります。なかでも忘れ難い印象に残っていることは、剣道界で天才剣鬼児の誉れ高く、海外でも米国加州地区で、フェンシングチャンピオンの実績をお持ちの剣聖・森貴雄先生から、じかにご指導を仰ぐことが出来たことです。

部が発足した初期の段階におきましても、先輩方の血のにじむような努力のお陰で、それなりに、着実に成果は上がっておりましたが、桐生合宿を期に、ルールや技術面でも、疑問点が解明され、本部フェンシングのレベルアップに大いに役立ちました。

また、温厚篤実にして、包容力も、先見性もある原主将、進取の気性に富んだ金子先輩、斉藤先輩、名コーチ役の中村先輩のお陰で、越君、佐藤君、堀君等と共に、実のある合宿に参加させて頂きました。

ちなみに、当時における部のモットーは、

一、フェンシングと学問の両立
二、自主独立の部の運営と自発的研鑽
稽古は激しく、あとは健やかな仲間同志
三、卒業後も続けられるフェンシングと、学生各種大会勝利を目指しての集中力の養成

にあったかと存じます。

●越　茂樹（26年度）
50年の交流のなかから

50周年を記念して、思い出の数々のなかから伝えておきたいことを、そして最近あまり語られていない事等を物故された滝口先生や先輩の方々のお人柄等と私との関りを通じて述べさせて頂きたいと思います。

滝口先生のこと——。

何時もニコニコと悠揚迫らぬ風格のあるお方でした。何度かお訪したお住いも学者らしく書物等が積重ねられ質素で閑静な印象でした。此処に晩年迄度々お邪魔する機会を得、色々お教え頂く事が多かったのです。

学生時代、何か体育局からの書類を預かってお届けしたのが始まりでした。一家全員風邪で寝込んで居られたので書類を玄関先で渡すや帰りかけたのを呼止められ、家に招き入れられ先生の枕頭で部の現状を色々聞かれました。帰りは小一のお嬢様・瑞穂さんが奥様のお言いつけで大きな犬を連れて駅まで送って下さいました。

総じて先生は私達の世代のフェンシング部の連中が当時のスポーツ王国早稲田の強豪各部の中にあって、新参で実績は乏しく、部員も少ないなかを、それでも元気に明るく明日の栄光を信じて頑張っている姿を好感をもって見守って居られた様に思います。

後年、私が地方勤務の頃、上京してご挨拶に寄せて頂いた時等、最近の学生気質の変わって来ている事を学連の行事等を通じて色々話され、「君達の様な気持ちの良い若者が今は本当に少なくなったんだよ」と嘆いて居られました。

私事により恐縮ですが、私の結婚の時には諸種の事情から難航している事を聞かれ「よし、僕が仲人役をやって上げよう」と実にお気軽にお引受下さいました。後にそのいきさつを聞かれた吉田先輩が「偉い方だなあ。お前は何時迄もそのご好意を忘れてはいけないよ」と戒められました。

その他、私の妹が高校入学の時保証人になって下さり、又私の実に下手な水墨画にお願いした所一寸渋られまし

京六大学野球などが復活。国民体育大会が始まる。

1947年

●パキスタン、インドがイギリスから独立する。

●米空軍のチャック・イエーガーが「ベルX1」で世界初の超音速飛行に成功する。

●フランスのクリスチャン・ディオールが初めてのコレクションを発表、大好評を得る。

●アメリカでチャップリンの「殺人狂時代」がヒット、これに国粋主義者が上映反対運動を展開。

●「教育の機会均等」を原則とした6・3・3制の新学制発足。

1948年

●アメリカのベル研究所のウィリアム・ショックレーらが、トランジスタを発明する。

●本田宗一郎が本田技研工業を設立し、2輪車の製造を開始する。

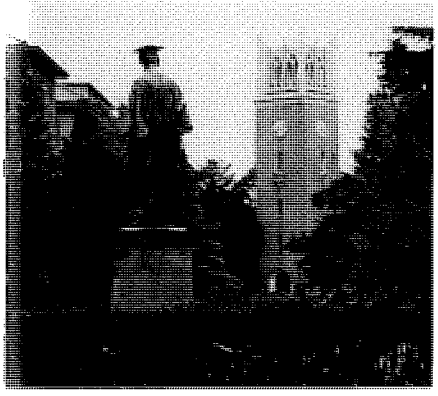
●戦後初のオリンピックがロンドンで開催されるが、日本は招待されず。

1949年

●国共内戦の結果、中華人民共和国が成立し、国民政府は台湾へ。

●下山事件、三鷹事件、松川事件が一カ月余の間に連続して発生。

●湯川秀樹が中間子論でノーベル



1946〜1955（昭和21年度〜30年度）2

たが、結局見事な達筆で賛を書いて下さいました。私の居間に掲げられ、私の日常生活を見下ろしています。

終戦直後から学生課長や学生部長として、常に過激な左翼学生等の活動から学園の平和と秩序を守る為に最前線で身を挺して職務を全うされ、たしかメーデー事件では負傷までされた強靭な先生。又一方ではささやかな時候の挨拶にも必ず丁重な礼状を下さり、年賀状には必ず近況を一言添えられるという細やかな心遣いをされた先生。江戸博物館の完了を最後迄楽しみにして居られた先生。私ばかりでなく多くの人に多大の感化を及ぼされた。巧まずして偉大な教育者であられた事を稲光会の各位に披露させて頂き、又先生同様多年ご交誼を頂いた奥様のご多幸とご長寿を祈念するものであります。

吉田先輩のこと——。

運動部の先輩というと誰でも多少なりとも怖いとか威圧感とかあるのですが、吉田先輩は少しもそうした様子がなく、私達はお若い頃から良く可愛がられ懐の乏しかった私達を色々な所に案内されご馳走して下さり激励されたものでした。お家へ押掛け、随分ご迷惑をお掛けしたのに奥様の美佐子夫人共々一度も小言らしい事を言われず大らかで優しい先輩でした。十数年に渉る私の転勤生活中、大阪までわざわざ私を会社迄訪ねて下さり、一夕歓談の一刻を持つ事が出来ました。和歌山の草原先輩を訪ねた帰りとの事でした。私が東京へ帰任した直後、新宿駅のホームの雑踏の中で私を偶然見つけられ、大声で私を呼び止められた。不思議にご縁の深い先輩でもありました。折しも30周年記念の年の1月の事でした。

中村先輩と佐藤君と四人で徹マンの思い出や稲光会結成の頃の事、本道君成瀬君を初めて海外へ送り出した時等数々の事が思い出されます。フェンシングの試合には一度も出られた事は無いのに大きな功績と感化を多年にわたってもたらされたお方でした。

中村先輩のこと——。

フェンシングの私の直接の師匠は中村先輩です。他にも勿論多勢の方からご指導を頂いたのですが、何といっても剣道の観念を折り込んだ独自の哲学を学生時代から堅持して居られ、多くの関係者の方々からある時は頼もしがられ、又ある時は煙たがられながらも戦後の我国フェンシング界に大きな存在感と共に多大の貢献をされたお方と認識して居ります。

又、戦後大学で剣道の活動が不可能だった時期、その存続に大きな役割りをされた一人でもあり、年少の頃小夫狗と言われた剣道の逸材であられたとも聞いて居ります。戦争と諸種の事情で志を充分に遂げられる機会を得られぬまま早逝された事を残念に思はずには居られません。

私の師匠と言いましたが、森さんや志村君が入部する迄は私一人だったので随分絞られたものです。その一方、公私ともに可愛がられました。「お前イクラ持っている」等と小遣いを出し合って二人で部屋で焼酎を呑んだりしました。病気で倒れられる直前迄、又入院後も外出可能の時によく見舞に行った私をつかまえては馴染みのお店を紹介がてら連れて行ってくれました。お元気の頃は良く夜朗しに近い程飲みかつ部の将来等を話し合ったものです。

少々気難しい所があったが、ことフェンシングに関する限りごく自然に話し合える先輩でした。「お前なんかと今頃まだ付き合っている様では俺もダメだなぁ」等と苦笑しながら、それでも楽しそうにあれこれ話題の尽きない間柄でした。

斉藤先輩のこと——。

過日先輩が急逝され、急遽告別式に馳けつけたのですが、名古屋から森さんがわざわざ朝一番で参列に来て居られました。式後久闊を叙しながら懇談の一刻をもちました。そして改めてある時期迄の稲光会やフェンシング部の陰のまとめ役としての吉田・斉藤・中村三先輩の働らきを聞かせて頂く事が出来ました。それは私の視点から見ても全く符節の合致することで、その確認が出来た感がしました。

斉藤先輩は現役時代は主将の原先輩を助けて、たしか副将がマネジャーを務めて居られたと記憶します。ただ申訳ないが後輩の私達は大変口喧しく小煩い先輩としての印象が強かったと思います。挨拶、言葉遣い、部室道場の掃除、整理整頓等、日常の部生活の基本に大層ウルサかったのです。後々には誠実で勤勉、その上大変親切なお人柄からだったと理解出来ましたが、当時はかなり閉口したものです。元気者の志村君等は少々反発して「サル国務長官」と陰で仇名を奉っていました。これは米国戦時中のハル国務長官をもじりその上矢礼にも先輩の風貌からの連想を含んだものと思います。私達も共感を覚え、首をすくめながらも同調したものでした。但し先輩の名誉の為もう一つ加えますと、大変勝負勘の勝れた方で技術は必ずしも秀でているとは思えなかったが、巧みな試合運びで勝率を稼いでチームの重鎮として立派に責任を果されていた事を記憶しております。

滝口先生の奥様同様、三先輩の奥様が未だご健在でおられます。お三方とも今後なおお幸せに長寿されます様併せて祈念させて頂きます。

初優勝のとき——。

初めて優勝したのは、創部8年目の昭和28年のリーグ戦でした。当時は関東学生リーグ戦の上の優勝戦は無かったので最高の地位とされたのです。

種目はエペでした。リーグ戦最終日、相手は当時無敵を誇る中央大学。私は此のDOBで唯一人ベンチに在って作戦指揮に当る光栄に恵まれました。監督は名目的には居られましたが、大概は若手OBや主将が練習や試合の指導をしたものです。主将の島田君がやっ

物理学賞を受賞。日本人初の受賞。

●お年玉つき年賀はがきが登場。1枚2円で特等はミシンだった。

●古橋広之進らが、全米水上選手権大会で自由形400、800、1500メートルの3種目で世界新記録を出す。古橋は以来、「フジヤマノトビウオ」と評される。

1950年

●朝鮮戦争勃発。以後3年にわたる戦いの火ブタが切られる。南進する北朝鮮軍に対して、アメリカ軍主体の国連軍が撃退して北に進攻、やがて中国人民義勇軍も参戦。

●米でマッカーシズム、日本でもレッドパージ旋風が吹き荒れる。

●警察予備隊が設置される。2年後には保安隊と改称、防衛庁の発足とともに自衛隊に発展する。

●日本のプロ野球が2リーグ制となって開幕する。

●黒沢明監督の「羅生門」がベネチア国際映画祭でグランプリを、翌年にはアカデミー外国映画賞を受賞して世界に注目される。

1951年

●サンフランシスコで対日講和条約、日米安全保障条約調印。

●戦後初の航空会社「日本航空」が設立される。

●パチンコが名古屋からブームとなり、全国的に広がる。

1952年

●イギリスでジョージ6世が逝去し、エリザベス王女が即位する。

●東京にトロリーバスが登場。

●フランスのルネ・クレマン監督の映画「禁じられた遊び」が世界的な話題作となる。

●石井義男がボクシングのフライ

て来て「メンバーをどうしますか」と独特の上目使いの表情で私に相談します。「当って砕けろだ、誰でも勝率の良い順に並べよう」。この年は9人紅白のやり方でした。作戦が当ったか先鋒から順調に勝ち進み、中央大学側は恐らくは「こんな筈では」との焦りもあったのか、結局実力を出し切れない形でたしか5勝一敗で我方の圧勝となりました。これで双方4勝一敗づつの同率優勝決定戦という事になりました。又メンバーの申告となりましたが「相手はブライドをもっている。必ず同じ体制で来るに違いない。此方も同じでいこう」とし、そして又々同様パターンでの圧勝で早稲田創部以来初の優勝となりました。武運に恵まれるとはこの事かと私達は狂喜し祝福し合いました。これは勿論当日の運不運ばかりではなく、創部以来真摯な部の運営や練習の積重ねの賜であり、更には当時の選手諸君のそれまでの練磨の成果であることは論をまたない所です。そして創部以来の苦労が一挙に実を結び大きくはばたいた一日でした。50年の中で最も強烈な忘れる事の出来ない日でした。

当日のメンバーは早逝された坂田君を除いて全員健在で、改めてその栄光をこの機会に祝福させて頂き度いと思います。又この日島田君を助け副将として活躍した梅渓君はその後、葛飾区の聞明寺という400年の名刹の住職となられ、又々私事で恐縮ですが私の家内葬儀に遇々宗員が同じ所から導師を努めて頂き改名を頂く等万端にわたりお世話になりました。

更に此の年は稲光会発会の年でもありました。小藤先輩から会の命名とその意味を説明され、賑やかに発会の催しが行われました。今日を続いた早稲田大学フェンシング部創設以来の代々各位の熱誠と努力の成果が花開き結実した年であったと思います。

最後に、後を継がれる諸君がこの50周年記念行事を自発的にして更に80周年、100周年を目指し、より輝かしい成果に向われるよう希望し前途の多幸を祈るものであります。

●佐藤　武（26年度・主将）
古き良き時代の早慶戦

今からずいぶん昔の事である。5年前に創設されたフェンシング部もようやく、その草生期から第二期黄金時代へと発展せんとする時期であった。早慶戦に備えての秋合宿は旧甘泉園で実施され猛練習も無事消化し、残るは楽しい納会のみとなった最終日の夕方の事であった。本日の野球の早慶戦において我が早稲田が敗れたとの情報が入った。今晩は慶応の諸君は銀座で気勢をあげるのかと思った時、合宿練習ですっかり消耗し尽したはずの身体に不思議な武者振いが走った。主将緊急命令「合宿納会は延期する。部員は銀座に急行せよ！」

当時穴八幡通りに早大学生用映画館全線座があった。休講の時には図書館もしくはそこへ行って時間つぶしをしたものである。この全線座の前に部員愛用の屋台が店を張っていた。堀部安兵衛気取り宜しく我々は鼻をつまんでカストリ焼酎を一杯、又一杯…。カラ元気を付け勇躍銀座へと進撃したのである。

いるわ、いるわ！　銀座の裏通りは慶応の丸帽の波であった。慶応々々の連呼。肩を組んで踊り廻る慶応にあらずんば人にあらずといわんばかりである。早稲田の角帽隊は敢然としてその渦中へ突進した。「ヨオーッ！　早稲田かぁー我等が友よ！」我々の肩を、頭を、ポンポン叩いての大歓迎である。ここまでは良かったが、その後が大変。我等が命より大切とする角帽をもぎとり天高く投げ上げる、髪の毛は引っぱる（こういう時、長髪は極めて不利である）学生服のボタンはもぎとる。もみくちゃにされてしまった。

勝利の美酒に意気上がる者と、合宿最終日、最悪のコンディションの者との差は如何とも出来ない。残念ながら退去命令を下さざるを得なかった。

ほうほうの態でやっと落ち延びたところは、新橋のさる酒場であった。ただしここも又超満員、我々早稲田勢に与えられる席はなかった。無念の形相すさまじく、こけたほおに目だけギョロつかせていると、ふと奥の席から我々を手招きしている人に気が付いた。「やっとここまで落ち延びたものの、武運つたなく今度は慶応の先輩につかまったか！」さにあらず我々を奥の席に招いてくれた老紳士曰く「好敵早大生諸君！　本日は慶応が勝利の栄冠に輝く事が出来た。さあ我々の祝杯を心行くまで受けてくれ給え！」

万才！　かくて26年秋合宿の納会は新橋においてロハで盛大に実施されたのであった。

そして当方の早慶戦である。残念ながらこれは歯が立たなかった。慶応は椎橋主将を筆頭に橋君、中島君といったそうそうたるベテランがそろい、早稲田としては善戦したのだが、2連勝のあとの2連敗を喫してしまった。

この頃から、学院生として本道、竹村といった優秀な部員が入り、彼らに夢を託して学園を去ったのである。

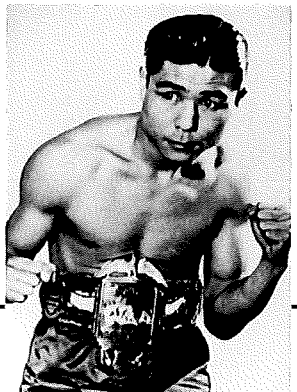
〈30年史より転載〉

●石田　侔（27年度）
50年史に寄せて…

28年卒業は、新制大学の第一回卒業生である。

潮田英彦（キャプテン）、堀猛（副将）、石田侔（プレーイング・マネジャー、執筆者）。ほか、青柳栄三郎、坂本正樹が同期である。中村栄太郎、佐藤武、越塚樹氏他の諸先輩には、直接、間接に大変お世話になり、深く感謝している。一部でエペ優勝した29年卒の島田友右、中村寿雄、梅渓秀文、30年卒の青山甲子郎、八木儀、本木茂雄。当時学院生であった竹村晃、清水敏男、田中一郎氏達と、一緒に汗を流した仲間たちを思い出す。

卒業年度は、一つの鎖の輪に連なる思い出が数々あるが、二～三取り上げると、島田キャプテンの時に、待望のエペ一部優勝したことが、印象深い。それから、何かというと、トレーニングとして「うさぎ跳び」をやったもの



●野間宏が「真空地帯」を発表、軍隊の非人間性を描き話題に。

1953年

●ソビエト首相のスターリン死去。後任はマレンコフ。その後、フルシチョフが第一書記となりスターリン批判を始める。

●NHK東京テレビ局が日本初のテレビ本放送を開始。半年後には初の民放日本テレビも放送開始。

●映画「ローマの休日」が大ヒットし、主演女優オードリー・ヘップバーンのヘアスタイルが大人気となる。

●イギリスの登山家エドモント・ヒラリーとシェルパのテンジン・ノルゲイが、エベレストに初登頂。

1954年

●アメリカがビキニ環礁で水爆実

級世界選手権を獲得。日本人初の世界チャンピオンとなる。

1946〜1955（昭和21年度〜30年度）

で、また今も使われている部章は、この年の卒業生が粒々検討の上、諸先輩にはかり決定作成したものである。（今では、「うさぎ跳び」はやらないようだが…）。

ある夏、諏訪湖畔、岡谷市での合宿は、何故か、「地獄の合宿」という言葉を付けられたが、夜、女性とデートした者もいて、「地獄の合宿」とはこれいかに（？）という意もある。

ここで個人的な思い出を述べると、ボクシングの白井義男氏と戦った元世界チャンピオンのダド・マリー氏がフェンシング部の上の早稲田大学リングに練習に来ていたことがある。その時に、彼のサインを、私の名刺の裏にもらったりした。又ある日、マーク・スミスというアメリカ人（テキサス）のフェンサーがあらわれ、早稲田大学で練習をしたが、ある日、島田が、レストラン「丹」へ連れて来て、フェンシング談義をしたことなども懐かしく思い出す。

マーク・スミス氏は、その後どうしただろうか。

新制大学になって、第一回の卒業であったことは前にも述べたが、なぜ、フェンシング部が出来たか、先輩の話によると、終戦後、剣道が出来なくなって、フェンシング部に姿を借りたという、いきさつがあるとのことである。在学中に、袋竹刀による復活により、その後剣道部が正式に、フェンシング部とは別に出来た。当時、伝説的な人物として、アメリカ西海岸で活躍した「森寅雄氏」は、剣道の達人でもあったと聞いている。

立命館大学との定期戦を開設した折に、京都へ乗り込む時、名古屋に森鷹史先輩を訪ね、大変お世話になった。当時、大学一年生に、本道博、荻野元平、坂田守正、岩野進一、川野幹雄氏等、将来の部を担う者がいて、同じ釜の飯を食った仲である。

最後になったが滝口先生、平先生が部長として、フェンシング部を育てて下さったことに、衷心より敬意と謝意を表する。

早稲田大学フェンシング部50年を祝し、稲光会々長・金子誠先輩、50年史担当の新井時男氏ほか担当各氏に深謝な謝意を表する。

●堀　猛（27年度）

フェンシング部と剣友会と私

フェンシング部30年史以降の後輩のために。私は神田の生れです。小学校は下町の竹町小学校です。剣道と水泳の盛んな学校で、区内では有名校です。フェンシング部には、過去中村栄太郎先輩、中村義雄、近藤征一郎、私と四人入部しました。中村栄太郎先輩は、私より二年うえの上級生で、一緒ではありませんが区内の剣道大会に、互に、よく出場し、常に上位に「ランク」されました。

私は別に水泳大会にも出場して居ました。昭和23年早稲田大学入学と同時に、水泳部に入部しましたが、剣道が忘れがたく一年間にて水泳部を退部し、フェンシング部と同時に、剣友会、のちの剣道部に入会しました。

旧制、新制合せて5年間の大学生活でした。

フェンシング部入部の時の部長は滝口先生、主将・原猛先輩、副将・斉藤正秋先輩、マネジャー・金子誠先輩でした。入部一年の時に、原先輩の下宿先と私の自宅が近くでしたので合宿の時は、一年間でしたが、先輩の「ナマズ」を担いで参加しました。

翌年度は、森先輩が主将になり、中村先輩が「サブ」として私達に稽古を付けてくれました。

次の主将は佐藤さんです。私は副将になりました。同期の桜の歌の文句ではないが、佐藤さんとは何故か気が合う仲で朝に部室で、午後に道場で、そして帰りまで一緒にと、在学中で最も親しい友でした。

一方剣友会はG・H・Qの指令により、昼間は稽古が出来ませんでしたが、昭和25年頃から剣道部の先輩が、夜間稽古においでになり、多い時には二十数人になりましたが、中村先輩の指図で佐藤さんと私と二人で部室に残り、先輩方の道具を準備し、御世話をしました。

稽古が終ったあと中村先輩は、先輩方と会合に出席されますので、道場の掃除は佐藤さんと私と二人で「モップ」をかけ直し、大変でしたが少しも苦とは、思いませんでした。

社会人になって、体育会運動部に在籍したことが、非常に懐しく、誇りに思って居る、今日です。折があったら、又次回に。

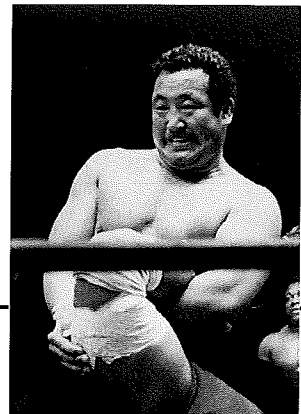
●梅渓秀文（28年度）

進取の精神に学ぶこと

還暦を迎えて既に5年が過ぎた今、この拙文を書くために40年余を振り返ると、今更ながらその時期が私の青春の正にひかり輝いたひとときであったことを痛感する次第である。

さて、フェンシング部生活4年間の最大の思い出は四年のリーグ戦でエペの種目で関東学生リーグに優勝、更に関西リーグの覇者同志社を下して全日本学生のタイトルを獲得したことであった。その年の春迄長い間一部校の悲哀をかこっていたのに、何故、突然の栄光がもたらされたのであろうか？

当時のリーグは中央・明治・立教・拓殖の一部リーグと早稲田・慶応・法政・日大の二部リーグで構成され、現在と同じ様に一部の最下位校と二部の優勝校とで入替戦が行われていたが一部二部の壁は誠に厚かった。私が三年の時の入替戦は、拓殖と慶応で争われ、



1955年

●NATOに対抗して、ソ連、東欧8カ国がワルシャワ条約に調印。

●トヨタ自動車がトヨペット・クラウンを発表。4年後に発売された日産自動車のダットサン・ブルーバードとともに、その後の人気車種となる。

●東京通信工業（のちのソニー）が日本初のトランジスタラジオを発売する。

●「エデンの東」「理由なき反抗」で一躍スターとなったジェームス・ディーンが自動車事故で劇的な死を遂げる。

●石原慎太郎の小説「太陽の季節」が話題を呼び、太陽族が流行語となる。翌年には映画化された。

験。マグロ漁船「第五福竜丸」が大量の死の灰を浴び、船員1名が死亡する。

●モスクワ近郊のオブニンスクで世界初の原子力発電所が稼働。

●世界初の原子力潜水艦ノーチラス号がアメリカ・コネチカット州グロトンのテームズ川で進水。

●日本初のプロレス国際試合が蔵前国技館で興行。力道山の空手チョップに街頭テレビは黒山の人だかりとなる。

下馬評では圧倒的に慶応が優勢で、久しぶりに入れ替えが実現すると予想されていた。当時の拓殖大は部員も少なくキャプテンいむた氏を除くと名前もあまり聞かない経験の少ない部員ばかりで、大勢の部員を抱えベテラン選手も多い慶応の圧勝を誰もが当然と考えた。

しかしながら当日の試合は、信じられない様な展開となった。キャプテンいむた氏を中心に新人同様の3人の選手が慶応のベテランを相手に正に死闘を演じ、遂に慶応の挑戦を退け母校の名誉を守ったのである。

この試合は各校の選手に大きな感動をあたえるとともに、一部二部の間に立ちはだかる壁の厚さを厭という程感じさせた。一部二部の固定化は二部の選手のみならず一部の選手にも何か閉塞感を感じさせていた。

こうした背景のなかで翌年の春、多くの選手に試合を出場する機会を与え大勢の相手と技術の交流をさせ、リーグ全体を活性化しリーグの向上発展を図ろうという主旨で、リーグ戦の形式を二部制4人プール方式から、一部制8校総当たり9人紅白戦方式へ変更しようという提案があり、一部校の反対もなくその年から実施された。

当時は中央大の一人天下で部員数も多く、新人戦のメンバーが他校のレギュラーといい勝負といった感じで、中央大と他校の力の差は圧倒的なものがありその年のリーグも中央の3種目制覇を疑う者は無かった。しかし4人制プールなら1人で4勝出来るが一人では1勝しか挙げられない紅白戦の方式が中央大の足を引っ張った。さらに圧倒的な力をもつ者の陥る罠、我々は絶対に負ける筈は無いという自信が油断を生んだ。その油断は紅白戦の選手の出場順をリーグ戦期間中、基本的に1度も変更することなく戦った姿勢に現れた。その順番は野球と同じで3、4、5番をクリーンナップとして編成したもので、彼等にすればどういう順番で戦っても負ける筈はないから野球の打順と同じで行こうという、誠におおらかな横綱相撲の感覚であった。

我々の当然の戦術として、不動の相手の布陣に対して捨てるべき試合は捨て、自由に対戦相手を選び勝ちを一つ一つ拾っていった。結果としてフルーレで中央大に対し5対4まで追い上げ、遂にエペでリーグ優勝を勝ち取ることとなったのである。

この紅白戦の形式はいろいろ問題があって、現在はまたプール制に戻っているが、当時一部制となって早稲田が中央の牙城を打ち崩して優勝したことは、早稲田をはじめとするそれまでの二部校の選手に自信と明るさを与えリーグ全体に新鮮な活力を生んだことだけは間違いない。

現在のリーグの部制の存在は仕方がないとしても、その固定化は好ましいことではない。上下の交流が活発になる様な仕組みの実現のため現役の諸君の知恵を出し合う時が来ているのかもしれない。

●青山甲子郎（29年度・主将）
名誉章の思い出

フェンシング部の創部50周年、誠に御同慶の至りです。私ごともっぱら、このスポーツを始めた動機は、学院同窓の現・青島都知事に対する意地からでした。当時の部室は旧体育館の二階で剣道部との同居で、陽の当らぬ臭い所での、肩身のせまい思いをしたものです。

1953年から、それまでの4人プールの一、二部制であった関東8大学リーグ戦が、一部制9名の紅白戦に代りました。それまで絶対に強かった中央大以外は、全てこの方式に賛成し、同じ水準のメンバーを多数そろえた大学が有利となるとして学連でも相当モメた大改革となりました。

この年初めて、ワセダはフルーレ3位、エペ優勝、総合で中央、立教、法政に次いで4位に入り、当時の故・滝口部長と全部員二十数名で共に歓喜に浸ったのも忘れ得ぬこと。続いて行われた7月の王座決定戦で、当時の関西の雄・同志社を16―8で破り、エペの王座を得ました。

1954年5月のワセダの体育祭で、当時の全運動部35部が集う中、旧戸塚野球場で、部旗に初めて輝やく「名誉章」を頂いた感激は、昔の昔の思い出です。

●本道　博（30年度・主将）
超OBの戯言

月日の経つのは早いもので、ついこの間30周年記念をやったと思っていたら、我がフェンシング部が今年でもう創立50周年を迎えるという。そして、実行委員の方から「50年史」を出すから、何か一筆書けと言う。書け書けと言われても、どういう本を出そうとしているのか解らないので何を書こうかと迷ってしまう。30周年以後の者は、現役時代の思い出やその当時の状態などを書けばよいが、超OBの部類に入る我々のような者は、そのような事は、既に「30年史」に詳しく書いてしまっているので、いまさら同じような過去のことをダブって書いても仕方がないような気がする。

何かと言えば、人生50年、戦後50年、会社創立50周年とか騒いでいるところをみると50年というのは、おめでたく、そして意義のある事であるらしい。皆がこれ程まで50年にこだわるのは、今まで経てきた50年を振り返って、良いことは残し、悪いことは切り捨て、新しい目標を立てて、次の60周年、70周年……100周年への新しいステップにすると言うところに意義を見出しているからではないかと思う。そこで、今回は、そのような視点から、「OBの戯言（たわごと）」を書いてみようと思う。

今までの50年を振り返ってみると、敗戦後、無い無いづくしの創世期にあっては、いかにして組織を作るのか、いかにして指導者を見つけるか、いかにして用具を調達するか、いかにして新しい技術や情報を導入するか等々を超先輩方が「無」から「有」を生じさせるのに苦心惨憺していた。次に、経済状態も回復した成長期に入ると、どうしたらよりよい指導者を得られるか、どうしたらより良い器具が揃えられるか、どうしたらより高度のテクニックを修得できるか、どうしたらより国際的に発展できるか等々の問題が多数先輩方のなみなみならぬ熱意と努力で成果も上がり、この時期で、すべての点が一応の水準に達したのではないかと思います。

そして現在は、部長、監督の努力の成果で部員数も増え、女子部も充実して、発展期・成熟期に入りつつある予感が感じられます。

しかし、ここ数年、大学の運動部にも、世相が反映して、功利主義・合理主義が浸透し、「衣食足りても知り得ぬ礼節」の風潮が蔓延してきているが、我が部もその影響を少なからず被っている様に思われる。

大学における運動部は、単なるスポーツ団体と違って単に運動だけ強ければ良いというものではないと思います。必要とする技術の習得、練磨は、もちろんですが、そのほか、部という小社会の中ではあるが、将来、社会人となって、本当の活躍が出来る人物の人間的基礎固めの場―人間関係の習得と人格の形成の場―でもなければならないと思います。

理想的人間とは、知育、徳育、体育を兼ね備えた人だと言われています。数多くある運動競技の中にあって、礼節を重んずる騎士道・武士道に根ざしたフェンシングや剣道は、まさに、この徳育を強く含んでいる種目であると思います。

21世紀に向かって発展する我がフェンシング部としては、理念を持ち、組織を強化し、これからは、体育面の充実だけでなく、徳育の面も重視して、知・徳・体、三育そろった人物を造り上げる理想的な体育部として発展していってもらいたいものだ。

リーグ戦初優勝！フルーレ、サーブルで圧倒的強さを誇る。全日本学生王座決定戦でも同志社を破り、大学日本一となる。

31年7月、全日本学生王座決定戦。対同志社、右・竹村

31年、数々の優勝カップを前に。後ろ・清水副将、前・竹村主将

31年、竹村主将

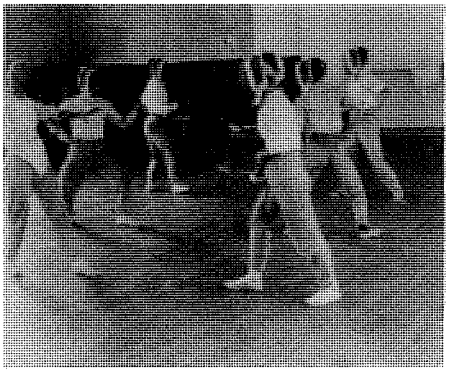
リーグ戦優勝の旗を授与される

31年6月、関東学生リーグ優勝。滝口先生より授与される

31年、学生王座の祝勝会。左から川名、成瀬、石黒

31年7月、全日本学生王座フルーレ、エペ優勝

昭和31年



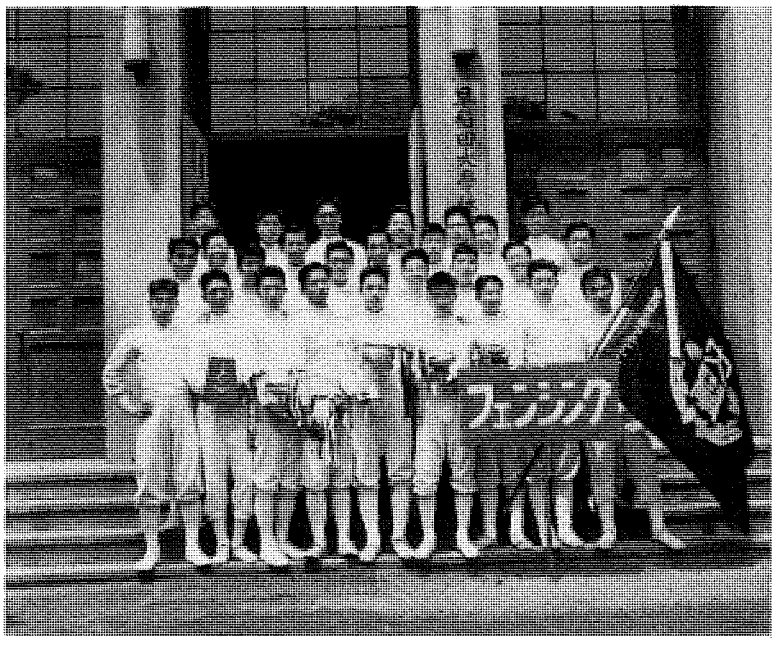
31年、柏崎合宿のサーブル練習

31年、新潟県柏崎合宿。左から小暮、高松、京極、成瀬、塚本、川名、田高、清水の各氏

31年、柏崎で同期５人。後左より京極、田中、前左より竹村、清水、塚本の各氏

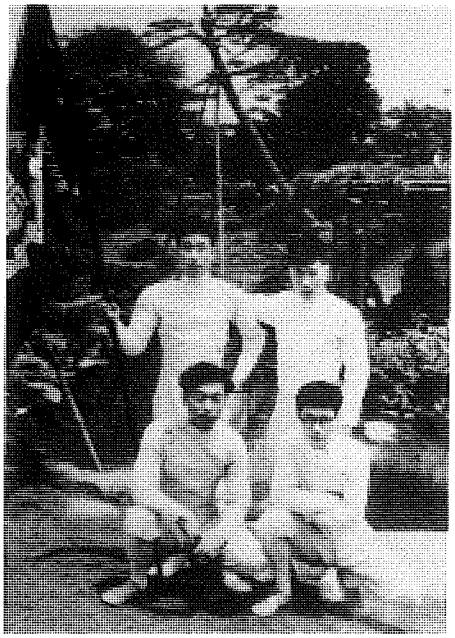
31年、これも柏崎合宿のひとコマ

31年10月、第11回国体東京都代表となった竹村、成瀬の両氏と高校の部代表の北原氏



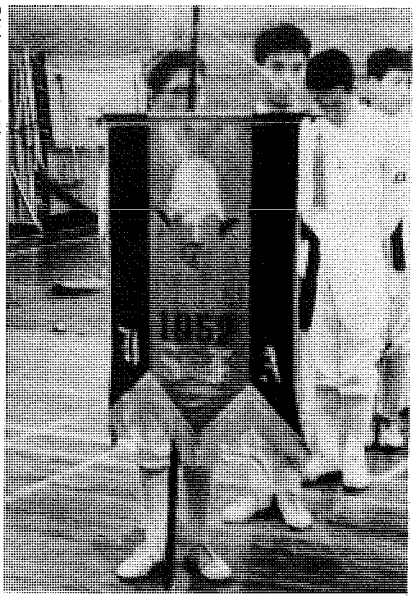
31年５月、早大体育祭で名誉章に輝く

32年リーグ戦二連覇！フルーレ、サーブルに敵なし。川名、成瀬パリ・ユニバーシアード出場！



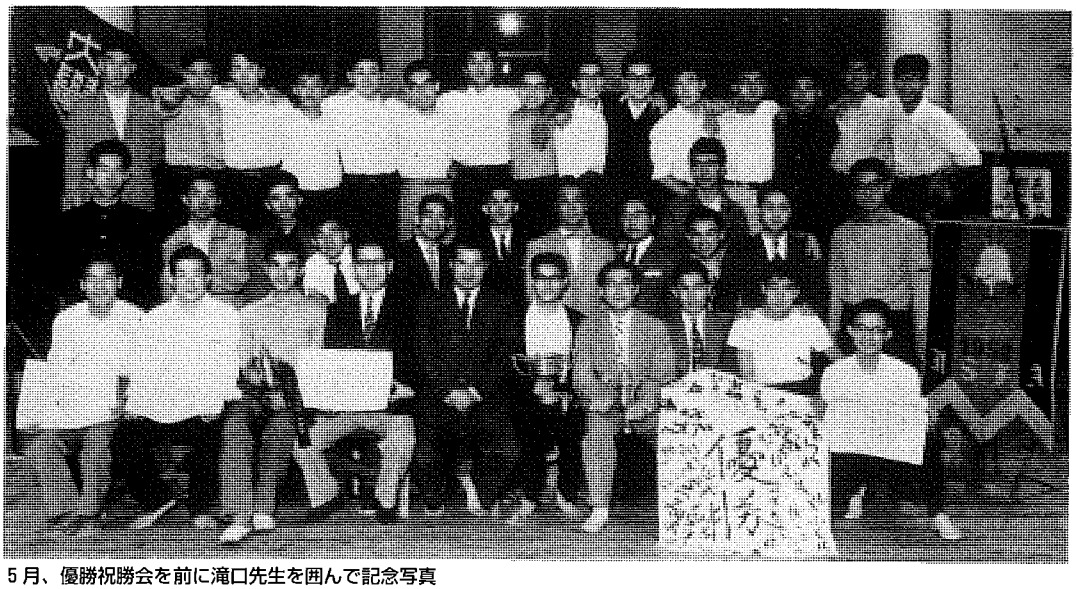
32年5月、早大体育祭で名誉章を受ける

32年4月、立命定期戦でのスナップ



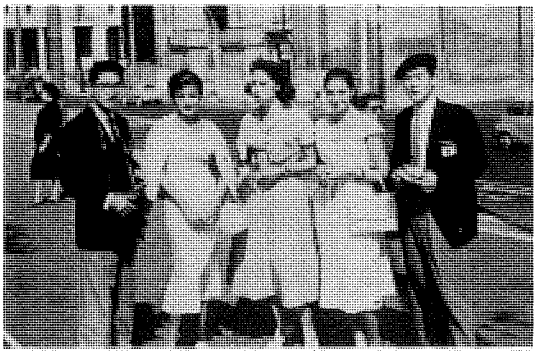
32年、リーグ戦2連覇の快挙

獲得した数々のカップ

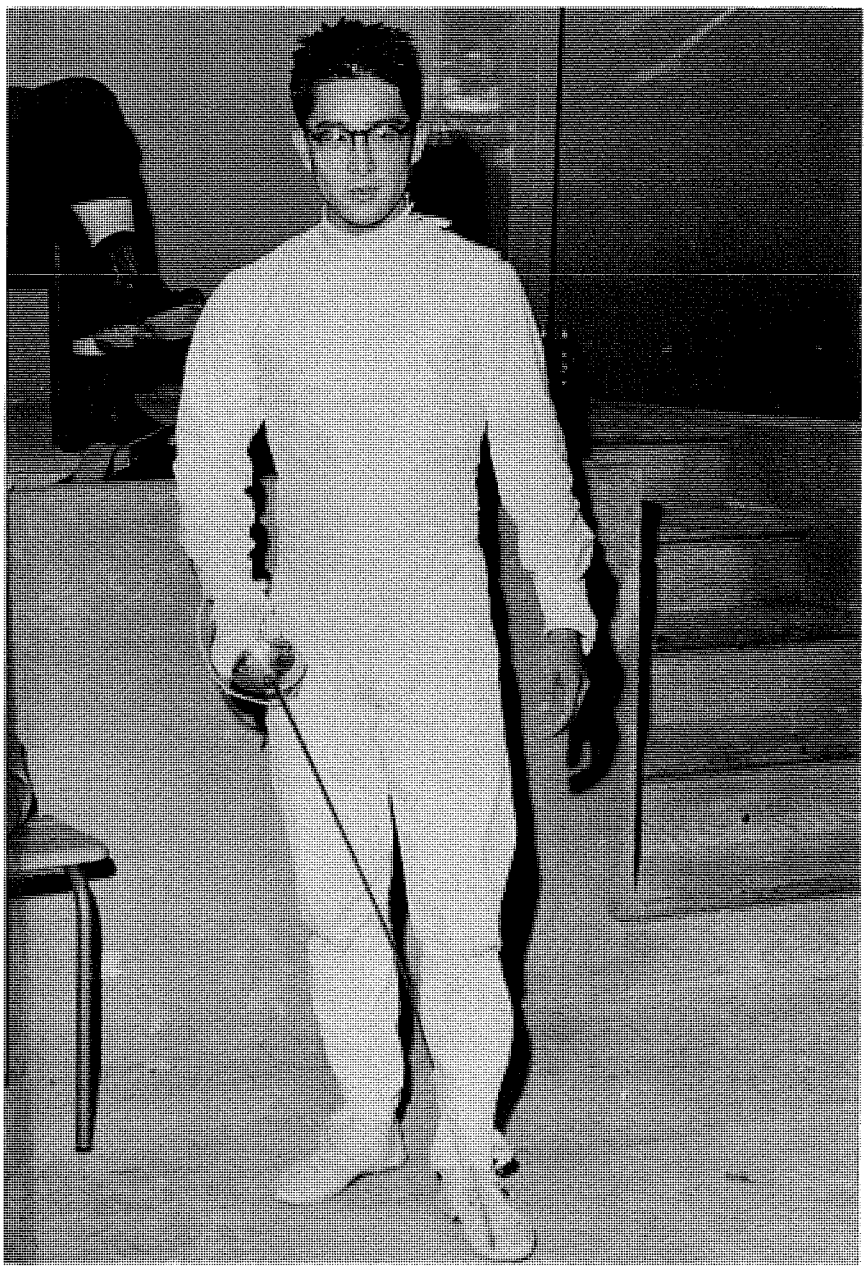


5月、優勝祝勝会を前に滝口先生を囲んで記念写真

昭和32年



ローマでも女学生にモテモテ



パリ・ユニバーシアードで初めて電気フルーレを握る川名選手

ローマのコロシアムにて

羽田にて帰国第一声

33年二部リーグへ転落、34年一部リーグ復帰！天国と地獄のドラマチックな2年間。

33年、伊豆土肥で合宿。ホテルのタエ子さんと

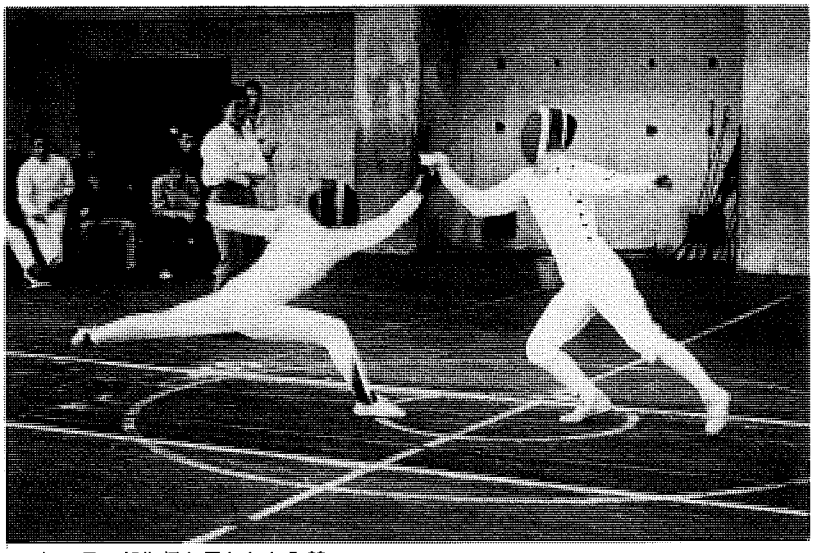
33年夏合宿のひとコマ。二部落ちのため馬場近くに宿泊

33年、記念会堂でのつらかった練習

姿を見ただけで、暑さも伝わってくる

34年8月、秋田県敬愛学園での夏期合宿

昭和33年～34年

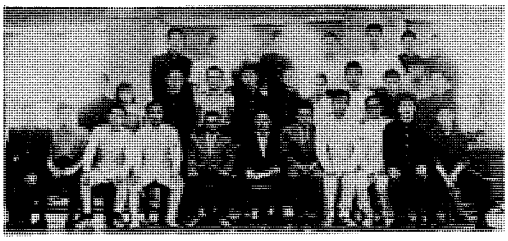


34年7月一部復帰を果たした入替戦。対拓大。右・辻村

34年リーグ戦での中村監督

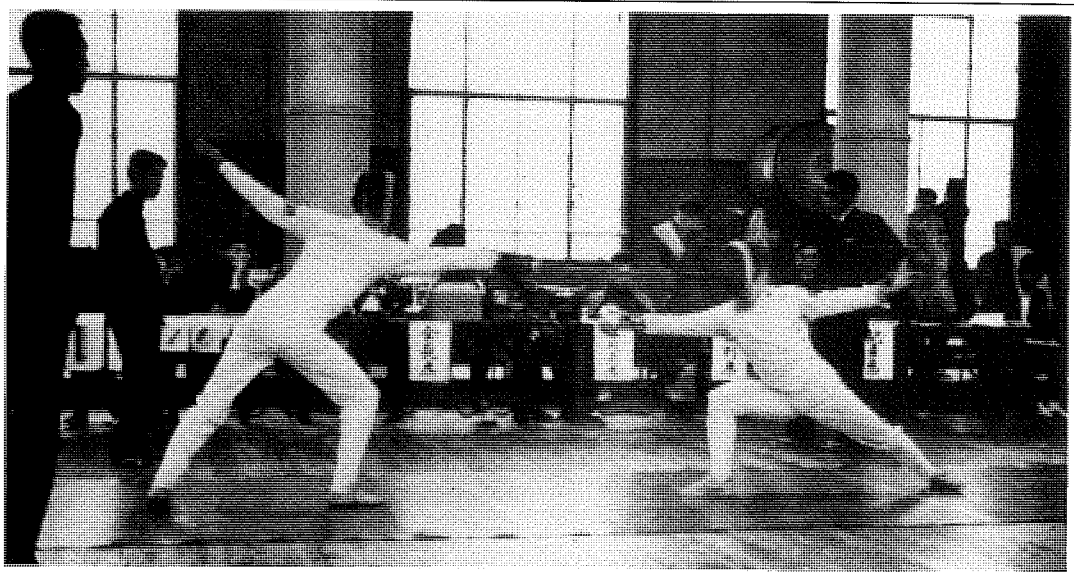
昨年とは立場が反対となった入替戦。連勝でチームの表情も明るい

34年4月、立命定期戦のために京都御所前にて



一部復帰に一同ホッとした表情。明大体育館にて

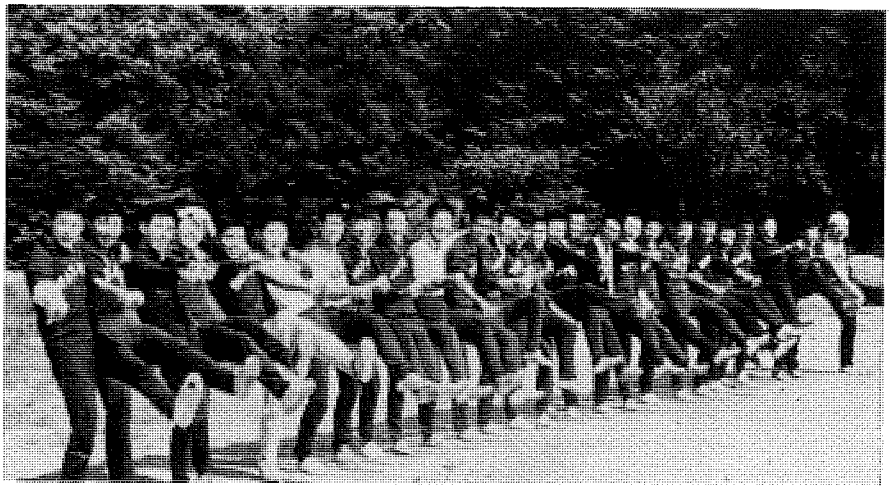
一部リーグAクラスを目指して、合宿、特訓の日々。忘れがたいエピソードの数もいろいろと…。



35年早慶戦。１勝１敗で迎えたエペ最終戦で北原主将（左）のひと突きがマスクに決まって勝利する

35年早慶戦サーブル。北原主将

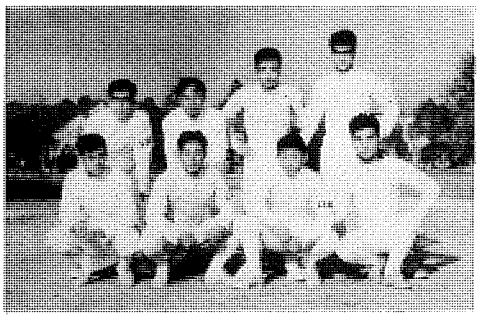
35年、記念会堂での練習風景

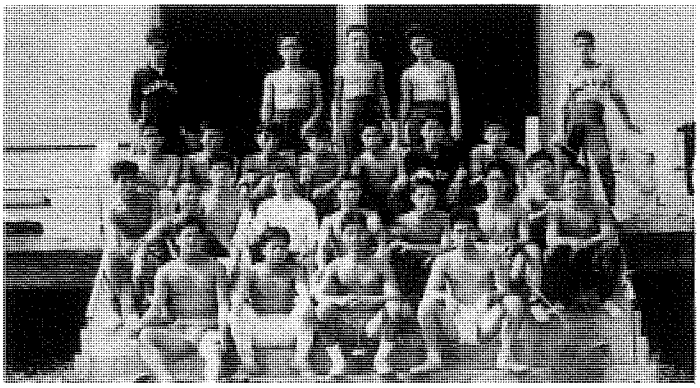


35年、信州別所温泉での夏合宿で最終日にラインダンスが登場

昭和35年～38年

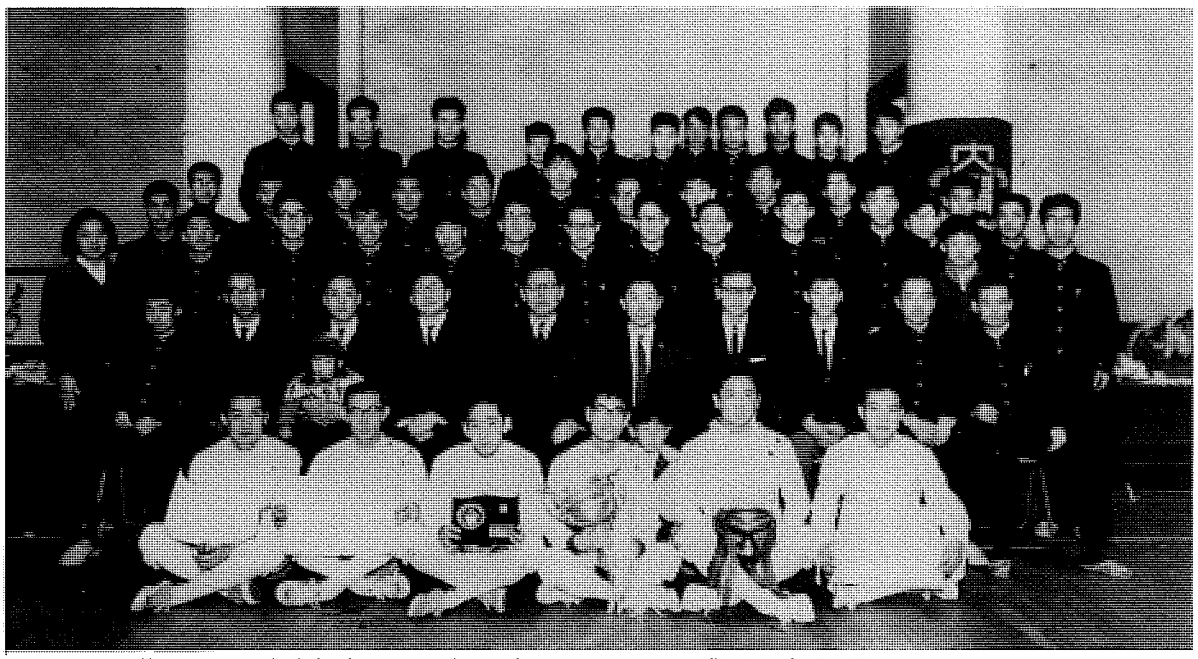
36年春の立命定期戦





36年、秋田県ニッ井での夏合宿

37年のスナップ。一部リーグ優勝を目指して、日々練習に打ち込んでいたころ



37年11月早慶戦。それまで4年連続で負けていたが、この年はフルーレ、エペに勝ちカップを取り戻した

1956〜1963（昭和31年度〜38年度）

●竹村　晃（31年度・主将）
再び黄金時代の到来を！

私が四年生の時、関東学生リーグ戦で我部は総合優勝を果たしたが、その祝勝会のあと同僚の清水君（副将）と共に故・吉田茂治先輩のお宅に泊めていただいたことがある。吉田先輩は美佐子夫人と結婚されたのがその前年であり、お子様は未だ赤ちゃんの時、大変歓待された揚句我々二人は酔っぱらいそのままダウン、朝起きて見たら先輩御夫妻の間に寝ていたようだ、一事が万事吉田先輩御夫妻には大変お世話になった。もう亡くなられてから20年の歳月が流れる、お元気ならこの日をどれだけお喜びになったことだろう。

もう一人、故・中村栄太郎先輩のこと、我々の時代の監督でもあった先輩が試合に来られなかった時は試合が終ると必ずその結果を田中君（マネジャー）と共に報告に参上した。大概お酒をごちそうになったのでお酒が強くなったのは中村先輩のお陰かもしれない。厳しいことを随分と教えられたが私には親父の様な存在だった。

私がフェンシングを始めた時に中村、佐藤両先輩から教わったのは基本に忠実であること、あたりまえのことだが難しいことであった。しかし私にとっては両先輩の教えがピッタリだったのだと思う。不器用な私には複雑なテクニックは無理であり、シンプルな技を基本に練習したため、スピードは自分でもかなりあったように思える。

昭和31年関東学生リーグ戦は10校の総当り制で行われた。試合形式は各校7人ずつの対抗戦でありメンバーの組合せが重要なポイントとなった。早稲田も優勝候補の一つに挙げられていた。結果は二種目を制覇した我部が創部以来初めて総合優勝することが出来た。後日、北原君（現・稲光会幹事長）から「メンバーの組合せが全部的中しましたね」といわれたことを覚えている。然し私は一つだけミスを犯していた。フルーレで優勝した時、唯一中央大学に負けた時だ。私は責任上中央の小沢主将との対戦を選んだが私は負け、試合も負けてしまった。それからは我を捨て相手校のメンバーを予測し、我部が勝つ為の組合せをマッチさせたことが総合優勝へとつながったものと思う。

その後、全日本学生王座を同志社大学と戦い、これにも勝つことが出来た。

残るは早慶戦だけだった。リーグ戦、全日本学生と勝ってきたが、早慶戦に負けては元も子もない。その早慶戦が始まった。実力が伯仲していたため大接戦となりフルーレ、エペ共最終戦へともつれこんだ。いずれも慶応の北原主将と私との主将対決となったが、運良く両方とも勝ち我部は勝った。これで諸先輩には勿論のこと一諸に戦った仲間に対し恩返しが出来たと思うと、胸にこみあげるものが去来した。

翌昭和32年も川名（現・監督）、成瀬、石黒君らを中心とするメンバーで2年連続の制覇が成し遂げられ、早稲田の黄金時代がつくられた。

その時から早や40年が経過したのかと思うと誠に感慨無量である。

50周年を境に早稲田が再び黄金時代を迎えることを、心から期待して居ります。

●花の32年組7人のナイト（32年度）
永遠なれワセダ&フェンシング部

俺達の入部は昭和29年の春で、大体受験の戦後一番の難関だった様な気がする。一方、平和の実感を肌で感じ日本中が前向きに転じ、活気溢れる様相が出始める時だった。その時の入部に応じ20名のフェンサーを夢みる素人ばかりが集まって来た。4年たつと、川名、成瀬、石黒、伊藤、田高、漆間、小暮がのこり、32年関東学生リーグ戦からは、国際試合と同じ、4人プールとなり、それまでの紅白戦にとって代わった（この4人プールへの変更は早稲田がとなえ、川名が関東学連を、成瀬が日学連を説きふせ、又各校OB連合の反対をも誠意をもって説き実現して世界レベルにて試合をする事になった）。このため一、二部制になり、この年は立教大学が二部に落ち、翌年は早稲田が落ち、共に非連を味わったが、やってよかったと信じ、今日の五部リーグまでの礎を作った同志の7人である。

この年から遡ること5年、先輩達の稽古に明けくれる毎日のきびしさから、1種目ずつもぎ取り、もぎ取り、ついに我々の時代に完全優勝（エペのみ2位）は出来なかったが、2種目制覇し総合優勝した。これは先輩達が、素人集団の我々を手とり足とり教え期待し、自信をつけ、育ててくれたおかげで、我々は60歳をこした今でも、幸せをくれた先輩達に感謝している。

当時の早稲田の体育局は、野球でいえば立教の長嶋、杉浦、本屋敷の時代で刃が立たず、あらゆる部が低迷の時一人気をはいていたのが我がフェンシング部で、全日本・王座決定なにするものぞの勢いで、向うところ敵なしの快進撃だった。

川名、成瀬、石黒、伊藤はレギュラーで、田高は石黒がレギュラーのためマネジメント一切を、小暮は池袋食堂の若旦那であったため、みなの栄養源を支え、かつ唯一の左利きで左対策の練習台を自ら買って出て裏方に徹してくれた（今、小暮の消息不明が気になり、なんとしても会いたい）。漆間は頭がよかったので、皆の苦手な教室の方でフル活動してくれ、情報や試験の手引きを担当し、大いに助けてもらった。

今、川名は監督として50年の総仕上げに力を入れていることはもちろんの事、全日本のリーダーとして、又オリ

1956〜1963 出来事

1956年

●エジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化を宣言。これを機に英、仏、イスラエルが戦闘に加わってスエズ動乱に発展する。

●売春防止法が公布され、翌年に施行される。赤線の灯が消える。

●第7回冬季オリンピック・コルティナダンペッツォ大会で、猪谷千春が回転で冬季五輪日本初の銀メダルに輝く。

●第16回メルボルンオリンピック開催。日本は鉄棒で小野喬が体操初の金メダルを獲得。

●第一次南極観測隊が、砕氷船の宗谷で東京を出港。翌年には、昭和基地の建設が行われる。

1957年

●ソビエトが最初の大陸間弾道ミサイル（ICBM）の開発に成功する。これにより、米ソの戦略ミサイル開発競争に一層拍車がかかる。

●ソニー研究所の江崎玲於奈博士がエサキ・ダイオードを発明。'73年にはこの発明と研究によりノーベル賞を受賞する。

●ソビエトが人類初の人工衛星・スプートニク1号を打ち上げ。翌年にはアメリカがエクスプローラー1号の打ち上げに成功する。

●ブロードウェイ・ミュージカルで「ウエスト・サイド物語」が初

ンピック選手を育てる名伯楽として活躍している。成瀬は青雲の頃我が部のスポンサーになる約束をまだ果たせず、果たすことを夢みてミニカンパニーを動かしている。石黒は独立して得意の衣料部門にて、大商社を相手に活躍し、これも大スポンサーになる気配あり。田島は稲光会の幹事として北原幹事長を助け、北原が今あるのは俺が教えたからだと、伊藤はこのところ、ご無沙汰だが元気な様子なので安心し、添間もちょっと遠いが、頭のよい男なので第二の人生も計画通り歩んでいる。気になる小春が50周年を機に出て来てくれることを。

祝フェンシング部50周年。

永遠なれワセダ、そしてフェンシング部。

●高松清浩（33年度・主将）
還暦を前にアウトドアを満喫

稲光会創設50周年誠にお目出度うございます。34年卒はたったの2名、私と矢野哲郎君です。卒業以来37年、その間に一度しか部を覗いていない不肖の卒業生で、紙面を借りて、先輩や後輩には、おわび申し上げます。

その間仕事のみをしていた訳ではありません。近畿地区を中心に西は九州、東は東京と転勤も多く、高度経済成長の波に乗って多忙な毎日を送っていたのですが、ちょうど東京勤務の頃（昭和54年）日本野鳥の会に入るキッカケがあって、自然に浸る機会を得たのですが、その後の人生（余暇）のすごし方を、大きく変える事となりました。

始めの頃は、会の行事に参加をし、河原や野山を、野鳥を求めて、双眼鏡を片手にうろうろしておったのですが、いつしかドップリはまりこみ、プロミナーや写真撮影と進み、撮影の為に（鳥に近づく為）テントを張る様になり、いつしか夜営をする事となりました。キャンプ撮影を始めると今度はキャンプの為の山登りへ変って参りまして、山登りを始めると渓流釣がしたくなる、山菜取りがしたくなる音取りを始める、等々、一年中、山野を駆け巡る事となりました。

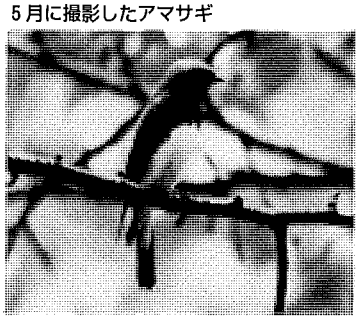
今ではいっぱしの自然愛好家であります。今年稲光会が50周年でありますが、私自身、来年一月一日で満60歳、還暦を迎える事となり、来年の今頃は、〝サンデー毎日〟の生活を送る事になる予定であり、今、一つの計画を立てておりますので、最後にその計画を語らせていただきます。三重県一志郡美杉村字池の平、これは奈良県と三重県の県境となっている黒留尊山（標高1039メートル）の山頂より、三重県側へおりた所にある、高原であり、この高原は標高550メートルであります。

この地に昨年、少しばかりの土地を購入し、来年春の完成を目指して、ログハウスを建てるべく計画を進行させている所なのです。完成のあかつきには、是非、皆様のおいでをお待ちいたします。黒留尊山は奈良県側は有名な曽爾高原であり、秋のすすきの大草原であり、春は山菜（タラの芽、山ウド、フキ、ワラビ、ゼンマイ、山イモ）等々、夏は川遊びと、東海自然歩道に面した場所であります。

しかし、冬は寒さと淋しさのみの場所であり、ストーブを暖めて、皆様のおいでをお待ちいたします。自然以外は何もない所ですが夜空は天下一品、ピンポン玉の様な星が降って参りますし、水は山の地下水、ただ、少し不便なところでありますので、宿泊の予定でお越し下さい。

大峰山系稲村ヶ岳にて

高松氏撮影のオオルリと
5月に撮影したアマサギ

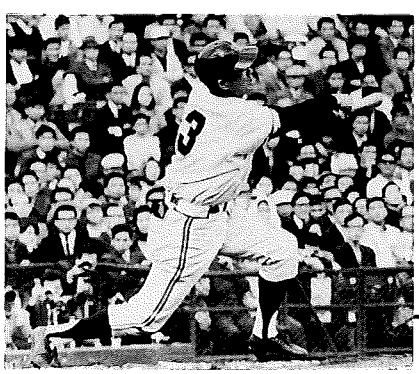


●34年度一同（34年度）
40年間の思い出を語ろう

平成8年4月某日、都内某所にてフェンシング部創部50周年記念誌の原稿をまとめる為に、同期生9名（途中退部の2名も交え）が顔を揃えた。

＊

捧「本日は雨模様の中、一杯呑みながらとなったら全員が揃ってくれた。創部50周年記念誌に我々の事を載せるので、酔っ払う前に学生時代のことを話そう。今年の新人は畳高校時代からの



演され、大好評を博す。

●大江健三郎が「死者の奢り」を開高健が「裸の王様」をひっさげて文壇に登場、注目を集める。

1958年

●アメリカのテキサス・インスツメンツ社のジャック・キルビーが集積回路（IC）と呼ばれる、超小型の電子回路を発明する。この後、製品の小型高性能化が進み大容量集積回路（LSI）へと発展していく。

●東京タワーが完成する。333メートルの高さは世界一のテレビ塔となる。

●アメリカ・カリフォルニア州のオモチャメーカーが、オーストラリアの体操授業で使われる竹の輪をヒントにフラフープを製造。たちまち全米で3000万個のブームとなる。半年後に日本に上陸。

●ブラジルのペレがワールドカップ世界サッカーで国際舞台にデビュー、ブラジルを優勝に導く。

●読売巨人軍の長嶋茂雄が新人王に輝く。

1956〜1963（昭和31年度〜38年度）2

優秀な選手ばかりだが、我々の時代はどうだったろうか。我々は昭和31年入学で当時はまだ学生が腹を空かせていた時代だったけれど、なぜフェンシング部に入ったのかね」

酒井「学院フェンシング部の主将だったから。当時は学部と一緒にレッスンをしていた。だから川名、成瀬両先輩が入部してこられたときには、僕のほうが先にやっていたんだ」

辻村「高校時代、関学やYMCAでレッスンをしていた。当時の朝日グラフの表紙に明治の飯田先輩夫妻の結婚式の写真が出たのを見たり、映画もいろいろ見たけど、格好が良かったね」

捧「高校時代は西洋チャンバラ映画全盛時代だった。怪傑ゾロ、三銃士、スカラムーシュ、ゼンダ城の虜、花咲ける騎士道……」

小野田「中学の時に『ダルタニアン物語』（講談社版全20巻）を読破した。実技でフェンシングを選択したら助手をしていた竹村先輩から同じギッチョなので入部を勧められたんだが、あまり強くならなくて、竹村さんには申し訳なかったな」

栂井「本当は初めにヨット部へ行ったんだ。ところが、早慶戦で部室は空。旧体育館の3階から2階へ下りたら、フェンシング部の扉が開いていた」

池田「映画も見てたし、フェンシング部は少人数で個人的に親しみを感じた。お陰様で米国留学時代も現地でフェンシングをやれたし、同期生が34年度、35年度卒と2年分になった」

峯「部は卒業できなかったけど、映画を見たことが大きいね。ただ、水泳部とどちらかと迷ったすえ、皆の仲間になって良かったと思ってる」

松山「ジェラール・フィリップ演ずるチューリップ・ファンファン、花咲ける騎士道、これが決め手！」

石毛「俺も皆と同じようなもんだよ。映画も見たし」

＊

この後、入部して初めてのレッスンで初心者は皆足が痛くなり、歩くのに苦労した話だの、一年二年の時は竹村、川名、成瀬先輩たちの活躍で、リーグ戦等で優勝し感激したことだとか、春夏の合宿等の思い出話になった。

＊

一年夏：柏崎：小野田風邪ひきで到着早々即刻帰京となり、皆で羨ましがったこと。松山に毎日彼女から手紙が来たこと

二年春：館山：酒井のマンポーター事件

二年夏：佐渡：捧　着いた日の昼飯の時に、味噌汁の鍋を背中に浴びカチカチ山、合宿終了時に一度治ったこと

三年夏：二部に落ちた為、記念会室の合宿となり、この時の故・中村監督の太鼓によるフットワークのきつかったこと

四年：リーグ戦を三・四年生中心に頑張り、3種目優勝し一部復帰を果たしたこと。サーベルで某学院に32－0で勝ったこと

などの話が、呑みながら食べながら続いた。

石毛「我々は学生時代から今まで40年、卒業する時に確か辻村の命名による『堅貞会』としてつき合ってきたけれど、それは止めてくれ」

小野田「そんな奴がいるか？　酒井が悪い冗談言うからだろ。それこそ『表へ出ろ！』だ」

一同「アアマア」

峯「学生時代ほとんど毎日部室に入り浸ってた。多くの友人を得たことは何ものにも代え難い」

松山「僕は剣貞会だと思ってた」

池田「辻村、堅貞会の意味は何だったっけ？」

辻村「清く正しく生きる（何だ宝塚か？　の声あり）という意味で漢詩の一節からとった」

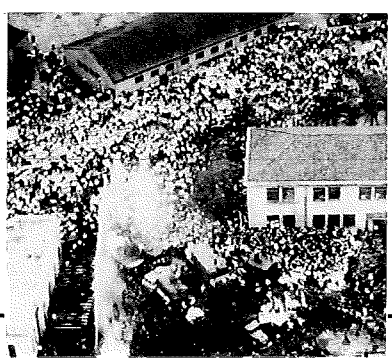
捧「分かった。ここらで予定の時間がきたので、締めくくりとして、今後共フェンシング部が75周年、100周年と時代を重ねて行く中で、技の向上を目指すと共に、多彩な人材が輩出し、益々発展していくことを全員で祈ってお開きにしよう。ご苦労さまでした」

●鈴木義孝（35年度）我が「心の様相」

「入学式。大隈講堂。少々遅刻。満席。立席で暫く参加。そこそこにして、運動部探しに出る。フェンシング。見るのは初めてだが、これならやれそうだ。即入部する。箱根駅伝はあきらめよう。……しかし臭い部室だ。……」

昭和32年4月、古い日記の一部である。生意気にも大変な即断をしたものだ。丸坊主頭に詰襟の学生服、全くの世間知らずの人間が、それからの4年間、早稲田大学フェンシング部に籍を置くことになった。見るもの聞くもの、新しいことばかりであり、練習にはついて行くのがやっとであったが、諸先輩、同輩、後輩を通じ広い世間の一端を教育して貰えた、と今でも感謝している。

過ぐる2月（平成8年）、仲間の一人が還暦を迎えたのを機に、数年振り同期が集まった。北原キャプテン以下8



●松本清張の「点と線」で推理小説ブームが起きる。

1959年

●キューバ革命政府が成立。カストロは腐敗と抑圧のバチスタ政権を倒し、アメリカに最も近い社会主義国が誕生する。

●伊勢湾台風来襲。死者、行方不明者5041人、家屋全半壊15万戸、被災者153万人にのぼる。

●日本レコード大賞が制定され、第一回大賞には、水原弘の「黒い花びら」が選考される。

●「少年マガジン」「少年サンデー」「朝日ジャーナル」「週刊文春」「週刊平凡」などが創刊され週刊誌ブームが起きる。

1960年

●ワシントンでの日米新安保条約の批准をめぐって、国内の反対運動が高まる。安保反対の大衆運動の波が国会にも押し寄せ、樺美智子さん圧死の悲劇も起こる。

●アメリカの物理学者T・H・メイマンがレーザー光線を発明。

●世界初の原子力空母、米海軍のエンタープライズ号が進水する。

名。一堂に会すると卒業後35年間の時を超えて当時の仲間になっている。兄貴風の落ち着きがあった志村、割り切りと度胸のいい出浦、ねばりと頑張り屋の村尾、スマートで柔軟な田中、しっかり者で着実な笹沢、陽気な冗談屋の林、芭男人でありさわやかなリーダーシップを発揮する北原（見るからに豪快な岩波、けっこう世慣れていた亀井の二人が参加出来なかったのが残念）。

それぞれの個性は歳月に色褪せず。既に人生の三分の二を生き抜いてきた仲間達が、フェンシング部に在籍できたことを心の中で誇りに思い、お互いの生き様を再認識できたひと時であった。

この折、北原より「創部50周年」の話があった。時の流れの速さに驚かされると共に半世紀に亘る部の歴史の中に一時期、身を置いていたことに感慨深い思いである。

当時は、終戦後10年以上経ち朝鮮景気のあと世の中も少しずつ成長への道を歩み始めているとは言え、未だ全体は貧しい時代であった。ラーメン一杯が50円位の頃、フルーレの剣一本が500円もした。練習で折れたりすると糸で縛り絆創膏で巻き剣先をつなぎ合せ使用した。ユニフォームもつぎあてだらけが当り前であった。それでも練習には支障なく、恐い先輩連にしごかれる日々であった。

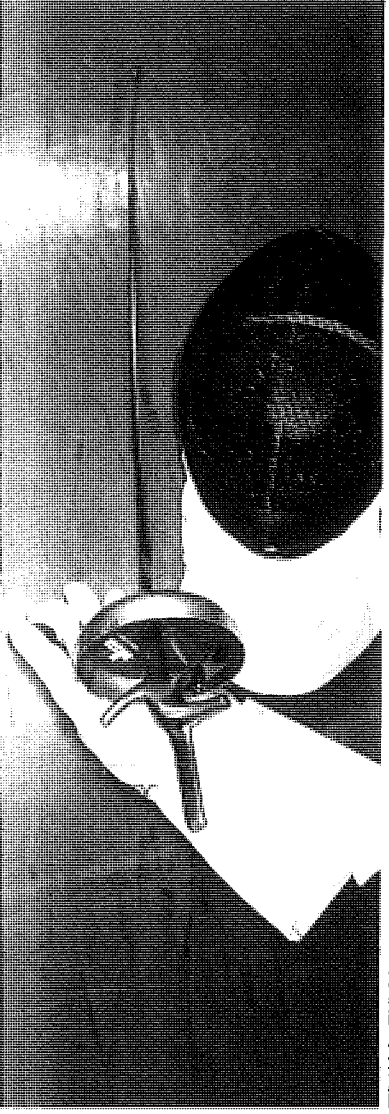
そんな頃、先輩がメタルジャケットを持ち込み海外では電気式判定器が使われ、日本も徐々にとり入れられると聞かされた。又用語の方は金がかからない為か早くも「レディ?」「ファイト!!」から「フレ?」「アレ!!」のフランス語に変っていった。

機器が試合に使われるのは少し先のことで、相変らず、相手のユニフォームにひっかかりやすい様にエペの剣先の三ツ又をヤスリで一生懸命研いでいる状態であった。振り返れば、フェンシングも変化していく時代であり、気づかず、その流れの中に身を置いていたのであろう。

世間は、高度経済成長への活動の枠組が作られようとしている時であり、安保闘争（60年安保）で騒がしい時、部外の友に「日本が大変な岐路にある。ノンポリ、お前はそれでいいのか!!」など、詰め寄られたことも再三であった。が、部の活動、仲間との交流の魅力に抗し切れず部室通いを続けたものである。

なにせ何も知らなかった男が、いっぱし大人ぶり、たばこ、酒、麻雀などの手ほどきを受け、喫茶店や酒場、質屋への出入り、果てはウラソフトまでも教示戴いた大事な教室でもあったのだから。

「青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ」の詩をしっかりと納得してしまう年代となっている自分の、正に「心の様相」の原点が「早稲田大学フェンシング部」にあると言ったら大仰だろうか。



●近藤征一郎（36年度・主将）
フェンシング部と私

創部50周年、卒業してから34年が過ぎたのだと実感させられました。自分にとってフェンシング部とは何であったのか、改めて考えました。学院一年、回りには岩波先輩、小島一太君、面倒見の良い仲間でした。

幾人かが部を去る中、小生も留年ということもあり退部を考えましたが、何となく去り難く当時それが何であったのか判りませんでした。

その後7年間、自分にはフェンシングしか財産はないと自覚し我武者羅に進みました。当時OBからも「一般学生は卒業すると校内のベンチに座るしかないが、我々は行くべき処がある」と言われたが、これは当時感動して聞きました。現在、この実感を感謝をもって味わっています。

なぜこの中庸で、百姓仕事といわれたフェンシングに、足の短い小生が耐えられたのか不思議でなりません。足の短いのは大学二年、ユニフォームをフレンチから長ズボンに換えた時に判明しました。

以後、このハンデをスピードをもって前に出るしかないと考え、攻撃あるのみのフェンシングになりました。

学院一年、おじさんの様な大学四年生からフェンシングの手解きを受け、またレッスン書を見せられ、これをマスターするのは大変なことだと思いました。しかし、小生は大学四年まで後7年間ある、時間で勝負できると考えました。これが大きな間違いと反省したのが大学三年でした。これでは大成しない。

社会に出て34年、フェンシング部出身が小生の全てであります。身をもって体得したものが小生の人格となっています。それは今はっきりと判りますが、表面的にはのんきな顔（これは生れ付き）ですが、培われたものは、意外と攻撃的で、時間をかけて（良く云えば忍耐強く）、絶対に諦めず目的に向うタイプ、良くも悪くもこれが自分です。

創部50周年に当り、私事に終始しましたが、改めて、早稲田大学フェンシング部に育てられたと実感し、感謝しています。

●ソニーが世界初のトランジスタテレビ（8インチ）を発売する。
●アメリカ大統領選挙で民主党のJ・F・ケネディが当選、国際政治に新風を巻き起こす。
●日本では池田内閣が「所得倍増計画」を発表し、高度経済成長政策を打ち出す。
●社会党の浅沼稲次郎委員長が日比谷公会堂で演説中に右翼少年に刺殺される。
●フラフープブームに続いて、だっこちゃん人形が大ブームに。
●第17回ローマオリンピックが開催される。84カ国、5396人が参加し、日本は体操で男子団体総合など、4つの金メダルを獲得。
●映画界のヌーベルバーグに注目が集まる。イタリアのフェリーニ、アントニオーニ、日本では大島渚や吉田喜重などが台頭する。

1961年

●アメリカの生化学者、M・ニーレンバーグとS・オチョアがDNAの遺伝情報を解読する。
●ソビエトの宇宙飛行士ガガーリン少佐が宇宙船「ボストーク1号」に乗り、人類初の軌道飛行に成功し、地球を1周して帰還する。
●日本の国内線に初のジェット旅客機が登場する。日本航空のコンベア880Mが羽田・札幌間に就行し、プロペラ機に比べ飛行時間を半分に短縮する。
●東ドイツが西ドイツへの亡命者を阻止するために、東西ベルリンの境界線に「壁」を構築する。これによりベルリン市民は肉親の絆を絶たれ、多くの悲劇を生む。
●ニューヨークのグリニッジビレ

●福生　武（37年度）

遥か昔の懐かしき青春

社会へ出て、出版社に入り雑誌で働き、一通りマスコミの何たるかを仕込まれて、ほどよい頃に会社から飛び出して以来、フリーの編集者、ライター、カメラマンとして、身すぎ世すぎをしてきたので、速げりゃ良い、売れれば良い、の結果おうらいの世界に、ど、ど、ど、と流されて、いまだに息せきりつつ、あえいでいる毎日。そんな苦界に身を曝されているゆえ、わ、わっ、とネタをインプットし、終わるとメモリーから抹消してしまうのが、習い性となっているわが身。

それが、突然40年にもなろうという遠い昔のことを思い出すのだから、ぼうーとかすんだ水のとき汁の中をかき回すような、たよりなさ。それでも、ワープロ叩いていると、指先に何やら引っ掛かってくるから、無責任にも、恥さらしにも、我関知せず、並べて晒してごろうじろです。

＊

入学した時代は、今では伝説の疾風怒濤の時代。看板も石ころも竹竿も頭上をかすめていった安保反対闘争の激烈なさなか。わがワセダも学生運動の拠点校となっていて、クラスでは授業をボイコットして、討論会だ、街頭デモだと、夜も日もないありさま。入学したてで意気軒昂だったから、血の気に振り回されてクラスメートとスクラム組んで機動隊にジグザグ突撃などという毎日ではありました。

ところが、ぐあいが悪いことは、わが部の部長の滝口先生が、大学の学生部長の重職におられ、ピケだ、デモだ、と無茶苦茶やる革命的学生を押さえる立場におられました。よくキャンパスで学生にとり囲まれて、懸命に説得している姿を思い出します。

そんな状況でクラスで気勢を上げて、わっしょいわっしょいと飛び出した矢先に、滝口先生にぶつかるのは、なんともはや、人波みにまぎれこむことしか策はなかったというわけです。おかげでフェンシングと同じくデモ隊としても中途半端で消化不良のままとなり、機動隊にとっ捕まって留置場にぶちこまれることもなく、平穏かつ平凡な学生生活を終えました。

＊

少し部について思い出してきました。入部した頃はまったくの貧乏で、道具は最低限のものしか持てませんでした。

もっとも私だけでなく、ほとんどの学生は貧乏が普通の時代でもありました。フルーレなんかは折れると捨てずに、他の折れたのとつないで繰り返し使ったのが、妙に今でも懐かしくなります。糸をきりきりと巻いてテープでさらに巻き固めるあの無形文化財的技術は、まだ細々とでも伝えられているのでしょうか。

参考までにエペとサーブルは、バランスや強度の点で使いものになりませんでした。

＊

合宿の何回目の何処だったか記憶に無い。ある日、中村栄太郎監督が指導にこられた。この日からピンポン玉との闘いがはじまった。パン食い競走のアンパンのかわりに、糸につるしたピンポン玉が、横一線にぶら下がっている。これをフルーレで突くというわけである。ポイントの正確さを鍛えるわけ。

こんなものにあたるはずが、と思ったが、やっているうちに正確にピンポン玉の中心をコーンと突ける。するとアドバンス・ランジでやれということになる。これも間もなく10回に5回は突ける。トワイス・アドバンス・ランジで……これも突ける……、ついに監督は突こうとするときに吊ってある糸をポーンと叩く始末。さすがにこれはどうにもならなかった。この新式トレーニングは以後の在部中やった記憶がない。

やればやれるもんだ、という記憶があるけれど、その後やった後輩はいるのだろうか、などと悩む記憶ではあるのです。

＊

合宿をもう一つ。秋田の記憶はごっちゃになって、何回目の時のことだか断片がくっついたり離れたりして定かでない。

だが、全体の記憶を乱暴にドグマチックに言えば、女難の相がある方角だったようでした。青春時代に突入したばかりの我々にとっては、秋田美人がひしめくこの合宿先が、極彩天然色のめくるめくトワイライトゾーンでありました。合同練習の毎日と熱い歓迎に、青春の血はさわいだのです。

その後の離合集散は世のならい、さまざまな熱き思い出を、当時の部員はそれぞれに抱きて帰京したようです。幸か不幸か私はもてぬ学生でありましたから、なんの思い出も血のさわぐこともなく、青春の花も咲かさずに、ここでもまた不燃焼の部員生活、いや青春時代を終えたのでありました。

＊

二年目か三年目かやっぱり記憶がない。体育実技の講師助手をわりと長い期間やっていました。講師はわが部監督の中村栄太郎先輩でした。ある年、私の割り当てられていた実技クラスに、とてつもない美人女子学生が受講してきました。聞くところでは日系ロシアの血をひくとか、いわれていました。後にファッションモデルかなにかでグラビアをにぎわしていたような記憶があります。

毎週早朝からの実技授業が、楽しみでした。特に監督が遅れて来る時とか来られない時は格別でした。私の近くを通り過ぎていった女性では、文句無し最高の美女でした。でも、一週間の実技講座の時間の中で、諸先輩後輩の皆さんが臨時助手として出席のよいのも、この時間に集中していたのは、わたしのひがめだったでしょうか。

＊

机の引き出しの奥に壊れて動かなくなった腕時計が一個眠っています。長

ッジの喫茶店で歌い始めたボブ・ディランが、カーネギーホールでリサイタルを開く。やがてボブ・ディランの歌は公民権運動や学生運動のテーマソングとなり、フォークソング・ブームへの重要な役割を果たすこととなる。

●柔道の世界選手権でオランダのアントン・ヘーシンクが日本を破ってチャンピオンとなる。

1959年

●キューバ危機が発生する。キューバにソ連のミサイル基地が建設されたことから、アメリカが空と海の封鎖を声明、米ソ開戦の一歩手前まで緊張感が高まる。

●アメリカ最初の有人宇宙船「フレンドシップ7号」が宇宙飛行士ジョン・グレン中佐を乗せて、軌道飛行に成功する。

●戦後初の国産旅客機「YS11」が初飛行に成功する。

●堀江謙一が日本人として初めて小型ヨット「マーメイド号」で太平洋を単独で横断し、サンフランシスコに到着する。

●アメリカでジュースや食料品などの容器として、アルミニウムの缶が使われ始める。

●東京が世界初の1000万都市となる。一方、住宅難はいっそう深刻化し、公団住宅の競争率は52・5倍にも達する。

●日本国内の女子大生が急増。この年には文学部における女子学生の比率が全国で37%となる。

1963年

●アメリカで公民権運動が盛り上がり、ワシントンでは20万人以上が参加する空前のデモが行われ、

い浪人生活を終えて入学した時に、祝いで貰ったものです。当時で一万円近くした高価なものでした。高田の馬場駅のホームの眼下に、ホイットマンの下手くそな肖像画を看板にかかげている質屋がありました。なんでも、利子の取りかたが博愛主義なので、自由博愛をうたったホイットマンの名をいただいたというのが、この質屋のどこかに書いてあるのを目にしたような気がしています。

閑話休題。机の腕時計は、しばしばこのホイットマン主義質店の曖簾をくぐりました。授業料も払えないわが貧乏学生時代で、後輩たちに一杯おごったりするときには、随分とお世話になったので、いまだにすてられずに、引き出しの隅に終のすみかをあたえています。

授業料といえば、卒業式の後、証書が私の分だけくれませんでした。あわてて事務方に行ったら、最後のが未納のためと、すげない返事。あわてて時計を持ってホイットマンの博愛にすがりました。

＊

麻雀は入部してからおぼえさせられました。こってりと月謝を払わされたんですが、社会に出てから十分元をとりました。というのは、入社してそんなにたたない頃、会社の上役からメンバー補充員で引っ張りだされました。上役と囲んだ卓にはなんと白髪の専務がいるのです。2000人を擁する会社に天下ってきたナンバー2と言われるじいさまなのです。

でも、これがワセダ出身で、妙にひきたててくれました。そしてこのとき、国士無双で営業支所長を直撃してしまいました。専務は大喜びで、支所長にたいして「見ろ。おまえのように器量が小さい奴は、仕事もでかくやれんのだ」と、面罵する始末。仕事とは関係のない事でこき下ろされる支所長こそいい面の皮。それまではエレベーターでも一緒は遠慮する雲上人だが、以後はどういうわけか、目をかけられて、おともを連れてロビーなんかを歩いているのに出くわすと「こんちわ」なんて挨拶を送り、ヤと手を上げてくれる。中間管理職たちのけげんな顔が、こっちをにらむ。その後ちょくちょく専務から声がかかって、学生時代の借りを返してもらうことができました。でも、専務は間もなく他界し、私の出世の糸もプッツン。世間の並の新入社員にもどったのでありました。

＊

いもづる式にあれこれと記憶をたぐってきましたが、どうしても思い出せないのが、入部した時の仔細。誰が何処でとりこんで下さったのだろうかと、数日考えあぐねましたが、手掛かり無し。なにか都合が悪い事があるので、記憶を消してしまったものと推理して、そっとしておきます。クリック。

●植竹　清（38年度・主将）
フェンシングの思い出

創部50周年おめでとうございます。50年史に寄稿するにあたって、いつの間に部を卒業してから早や30余年経ったんだなと実感が沸いてきました。当時のことを思いつくままに書きます。

思えば昭和32年学院に入学し、最初は野球部に入る予定でしたが入学早々の4月に父が急に亡くなり、野球部に入るタイミングを逸しました。しかし何かスポーツをしたいと思っていましたが、たまたま伊藤と同じクラスで彼の剣が教室の壁掛にあるのを見て、子供の時からチャンバラが好きだったし、フェンシングならマイナースポーツで、もしかしたらオリンピックまたは海外遠征が出来るかもしれないとの思いから、確か7月頃フェンシング部に入部しました。この為、忘れもしない土肥の夏の合宿では皆に追い付く為に、北原先輩にマンツーマンで基本をミッチリ教えこまれました。その時以来今日まで39年間北原先輩にはあらゆる面でご指導いただいております。しかし話が横道にそれますが、ゴルフになると立場が逆になり、北原先輩を私が色々とアドバイスしております。昨年、北原、近藤、慶田先輩とゴルフをしました。フェンシングでは華麗なフォームであった先輩がゴルフでは全く違うということが良くわかりました。でも楽しい一日を過ごさせていただき、来年もぜひこのメンバーでプレーしようと約束しました。はたして誰が一番上達するか見物です。

昭和33年大学の合宿は一部に落ちた為、地方に行かず、体育館で行なわれ、練習（当時は稽古とよく言っていた）は大変厳しいもので今思い出しても一番キツイ合宿だったと思います。しかしあのキツイ練習に耐えられたことが心の糧になり、その後のフェンシング生活の支えになったと信じています。

昭和34年三年生の時、国体の東京代表になりました。その時のメンバーは中大OBの沢田、中原、船水、小沢先輩それに一世を風靡した竹内さんでしたが、残念ながら優勝出来ず、大学では必ず負けた連中に勝とうと決心しました。

昭和35年大学に入り、目標は①学問とフェンシングを両立させる②リーグ戦で優勝する③東京オリンピックに出場する④海外遠征をすることでした。

目標を実現させるために、ポイントになる授業には必ず出席し、通常の練習以外にも中大にも練習に行ったり、部内にライバルを決め、ライバルに負けないよう頑張りました。

結果は①両立出来た②リーグ戦は2位③エペ最終選考会であと1勝に泣き④卒業後、カンボジアで開催されたガネフォ大会に出場し、フルーレ団体、エペ団体、個人銀メダルを獲得しました。

夢を抱き、目標を定めて全エネルギーを燃焼し尽くす——。青春の一時期にそういう体験をしたことが、私の人生にとって大変に貴重でありました。

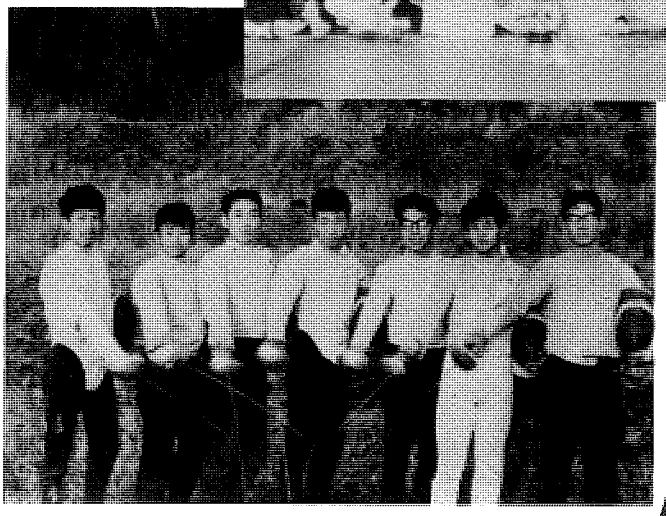
長々と自分のことばかり書いてきましたが同期の仲間は11人で、韋駄天の久布白が自動車事故で急逝しましたが、早稲田気違いで2人の息子を早稲田に入学させた平田をはじめ、皆な元気に暮らしています。

しかし50代半ばになると殆ど会社を変わったりしていますが、私も今年6月に移籍しました。サラリーマン生活も僅か6年余となりましたが、もう一度フェンシングをしていた青春時代に気持ちを戻し、元気良く仕事をし、剣をクラブに持ち替え、好きなゴルフをしたいと考えている今日この頃です。

公民権法が成立する。
●J・F・ケネディ大統領がダラスで狙撃され暗殺される。この事件に関しては、ナゾも多く未だに真実は不明でもある。
●日本のカメラ生産量が、ドイツを抜いて世界第1位となる。
●ソ連が世界初の女性宇宙飛行士テレシコワが乗る「ボストーク6号」の打ち上げに成功する。
●イギリスの港町リバプール出身のグループ「ビートルズ」が「シー・ラブズ・ユー」「抱きしめたい」などの爆発的ヒットを飛ばし、ビートルズ旋風が世界的な規模で巻き起こる。

39年、アジアで初の第18回東京オリンピック。スポーツ熱が高まるなかで——。

39年11月早慶戦優勝。リーグ戦では敗れた慶応だが、定期戦では快勝。エペの好調は続き大学対抗でも優勝する



39年、千葉県鴨山での春合宿

40年5月、大学対抗エペ優勝で体育局表彰される。左から西沢、平野、橋本、吉田の各氏

39年の東京オリンピックは日本全国をスポーツブームに巻き込んだ

昭和39年～44年

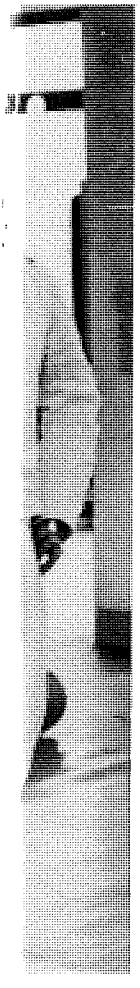
42年8月、新潟県高田市での夏合宿。苦しかった時代のひとコマ

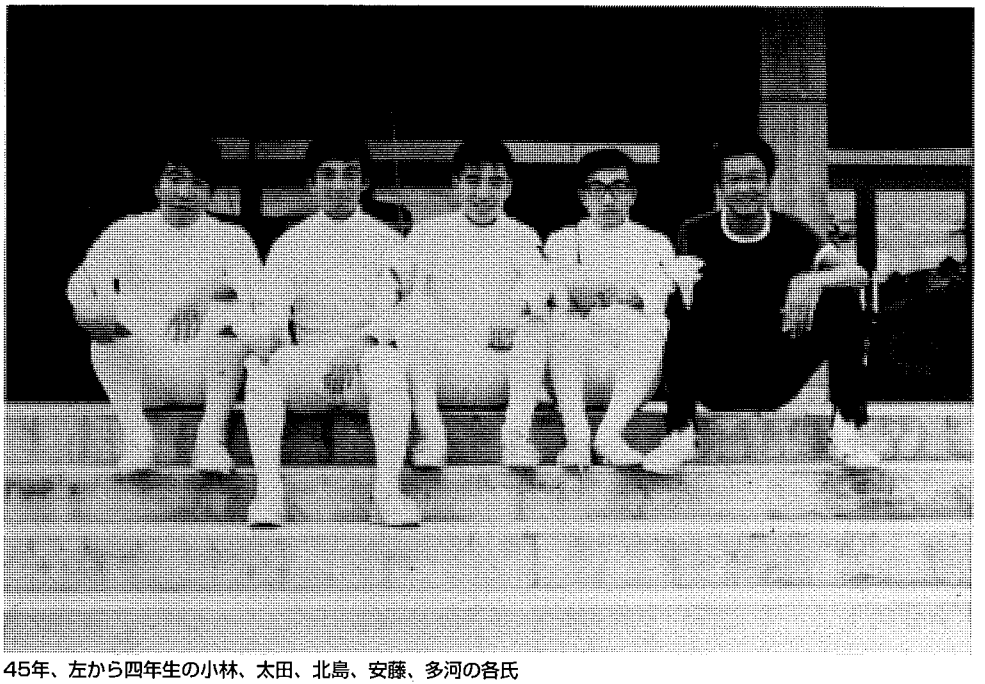
44年、立命定期戦でのスナップ写真。後ろから、窪田、木下、丹羽、藤田の四年生と二年生の森居氏

44年、ユニバーシアード役員の四年生。右から丹羽、木下、窪田、藤田の各氏

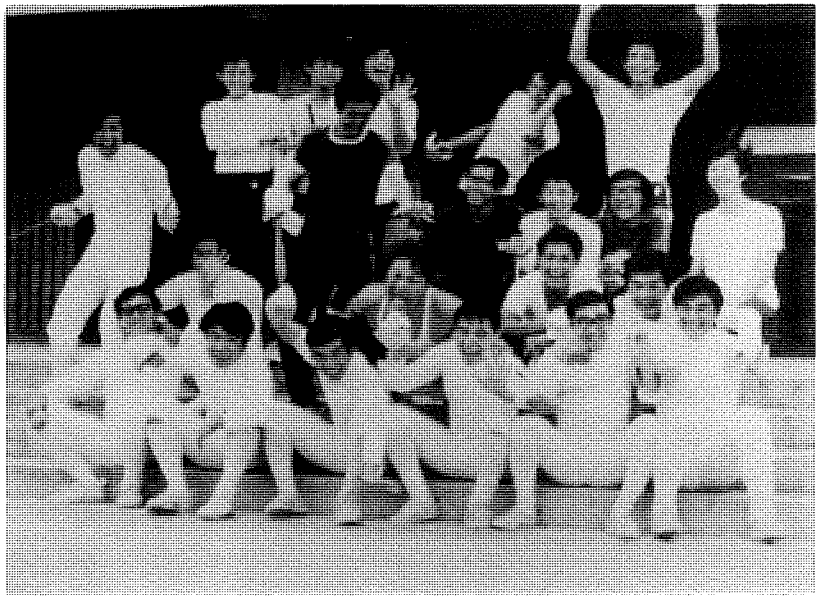
エスカレートする大学紛争、ノンポリ派を横目に、ひたすら一部復帰を目標に練習に明け暮れる。

一部を目指して、練習あるのみの毎日。体育局４階ホール

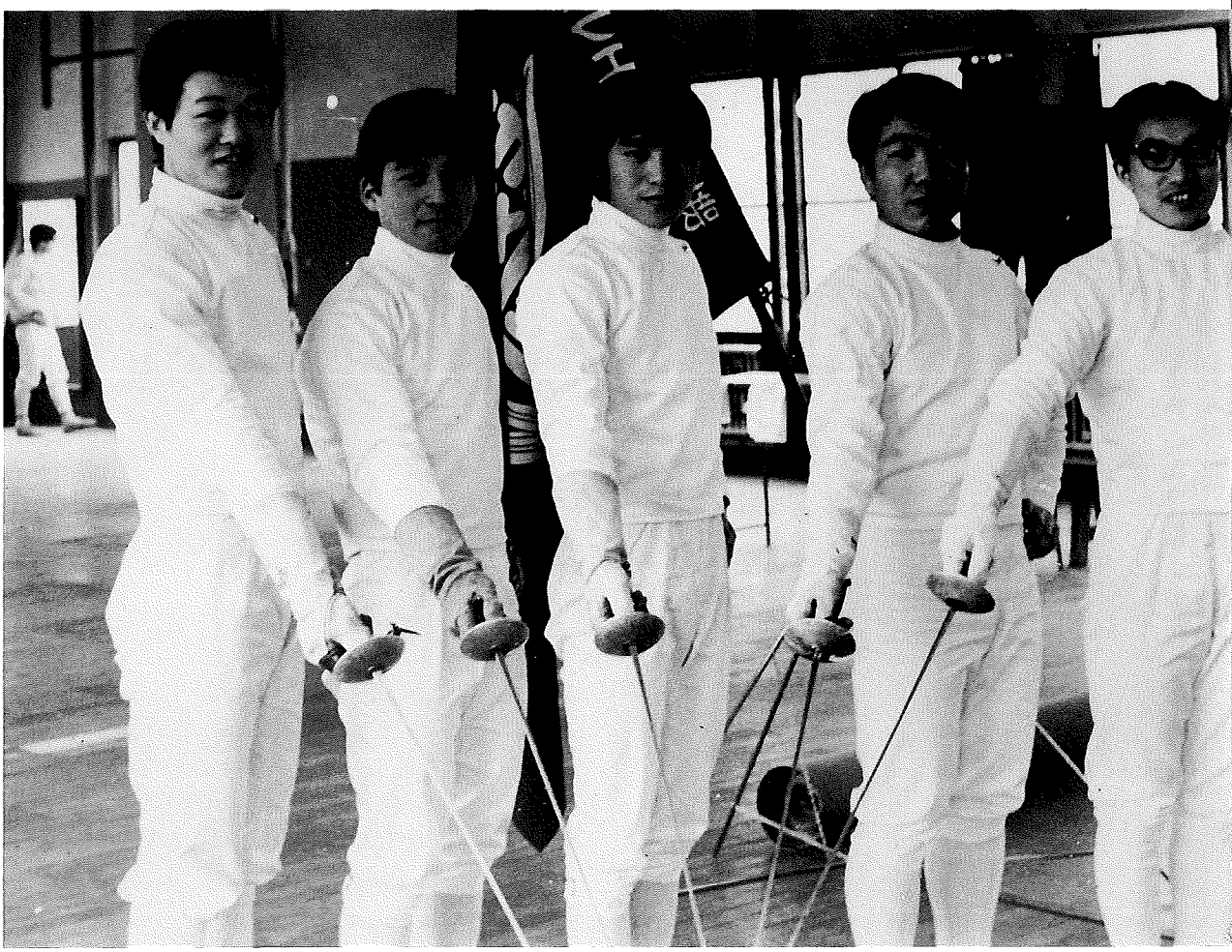




45年、左から四年生の小林、太田、北島、安藤、多河の各氏

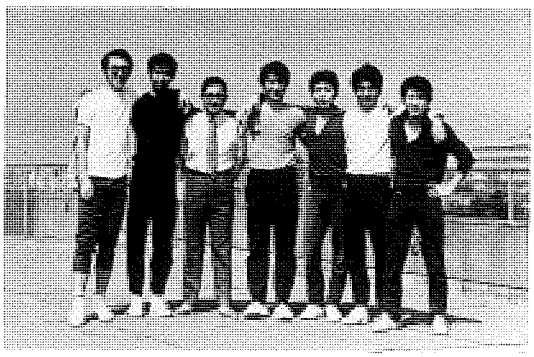


45年の一ノ関夏合宿



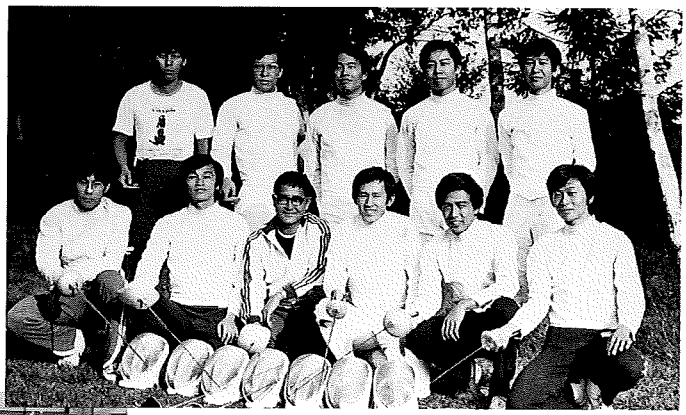
悲願の一部復帰を果たした、45年度最上級生５名。左より多河、太田、北島、小林、安藤の各氏

一部リーグ復帰と同時に、部長、監督が交替。1970年代に入り、新たな闘いが始まった！

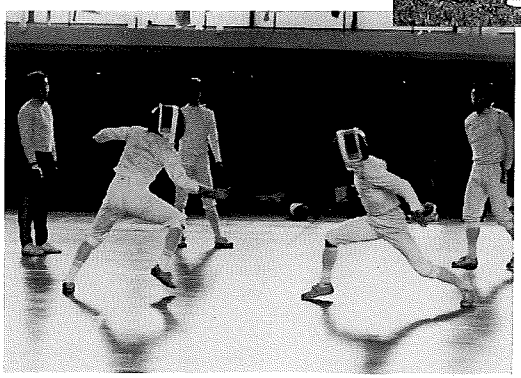


46年、体育局４階ホール屋上で。左より坂本、森居、川名、佐藤（勧）、高橋、佐藤（令史）、佐藤（光良）の各氏

48年11月の早慶戦。早稲田初の４連勝達成



48年９月、菅平の文部省体育研究所で夏合宿



48年、菅平合宿での左・三戸vs右・佐藤（光良）の両氏

48年、合宿中日に近くのスキー場を歩く

昭和46年～49年

49年、越後中里での夏合宿。恒例の中日の山歩き

48年12月インカレ。宮原選手サーブル個人で優勝

49年、越後中里合宿へ本道先輩を迎えて

48年、インカレ大学対抗で対拓大と

49年11月、早慶戦。残念ながら連勝はならず

1964〜1974（昭和39年度〜49年度）

1

●丸山公一（39年度・主将）

中国広東省にて…

創部50周年、まことにおめでとうございます。

卒業以来、部にはあまり顔を出したこともなく、御無沙汰で申し訳なく思っています。今回のことも新井先輩よりご催促頂くような有様で、誠に申し訳ございません。

卒業して30年も経つと学生時代の思いでも遠くなる一方ですが、お世話になった先輩方や、気が置けない仲間達、苦しかった入替戦や合宿等が懐かしく思い出されます。部生活で得られたものは、縦と横の人間のつながり、単に大学の卒業者名簿に名前が載っているだけでなく、30年過ぎても声を懸けてくれる人が居ることや、早稲田にはフェンシング部という拠り所があることだと思います。

私は、昨年2月から中国広東省東莞市に来ています。50歳過ぎて初めての海外生活で単身赴任である事や、言葉や食事やら色々問題はありますが、何とかやっています。香港にも会社があるため、月に数度の香港との往復や、何と言ってもここは中国で、税関や政府との交渉事や、新しい工場なので社内の整備もしなければならないことが多く、結構忙しく過ごしております。

ここは東莞市のはずれで、市内へは一時間半、香港へは二時間かかります。元々は何もない山村で、急に工業団地を増設して工場誘致をした所なので、出稼ぎの外省人が大部分で治安が悪く、外国人である我々の行動範囲も限られてしまい、窮屈な思いをしています。日本ではあまり経験できないようなことが頻繁に起きて、当初は精神的に参りましたが、この頃は慣れて来てあまり動じなくなりました。この1年ばかりの間に随分色々なことを勉強させられた思いがします。

香港の中国への返還は、来年の7月1日です。この歴史的な出来事が、目前に迫っていて、どんな変化が起きるのか興味深いところです。中国国内の変化はあまり無いと思われますが、既に香港では工場が中国へ行ってしまったため、ワーカーの失業者が多くなったとか、ホワイトカラーにも中国人の進出が増えているとか、政治的な問題も含めて香港人の不安は大きいようです。

帰国まであと2年ぐらいはここに居るつもりですので、当分の間御無沙汰が続くと思いますが、ご勘弁下さい。またの日、皆様方の元気なお顔を拝見できます事を楽しみにしています。

●堀越明夫（39年度）

卒業30年の思い出

50年の記念史を作る事は前から聞いてはいたが、当時の主将の丸山が代表して書くだろうと思っていた。しかし丸山が仕事で中華人民共和国に赴任していて原稿を書いていない事、39年卒の我々の年代だけが抜けている事を同期の河野から連絡を受け、あわてて札幌から30年ぶりに東京に帰ってきた吉本を交えて新宿の焼鳥屋に集まり打ち合わせを行った。

＊

3人集まれば、記憶が蘇るであろうとの発想であった。卒業後30年も経過すると記憶があやふやになりインカレエペ優勝の時の決勝戦の相手が法政だったか日大だったか定かでなくなっていた。昭和39年は東京オリンピックの年であり、記念盛宴で撮影した河野と私の姿がオリンピックの宣伝映画にでたという話を聞いてびっくりした。私の記憶から完全に欠落していたからである。

河野は卒業以来、東京にいながらほとんど稲光会にも顔を出していないというけしからん男（?）であり、吉本は30年間札幌におり、私は日本全国を転勤で飛び回り、4年前やっと東京に戻ってきた関係で思い出すのもひと苦労であった。

とにかく記憶をたどり何とか原稿を書き上げようという事になった。

とりあえず30年史を引っ張りだした。30年史では丸山は入替戦で辛うじて一部に残った事、インカレではエペで優勝した事を書いていた。

同じことを書いてもしようがないと思いつつ記憶はひとつしかなくまた同じことを書く事になる。

39年度の四年生は4人でいずれもフェンシングは大学に入ってから始めたものばかりで、三年までは3種目を練習していたが、勝つためには1種目に専念したほうがよいという事になり、わたしはサーブル専門となったことを思い出す。

プレオリンピックではオリンピック候補選手とけっこうよい試合をしたりして、立命館との定期戦では全勝するなど、けっこう行けるという感触を得ていたが、リーグ戦では期待を裏切り5勝15敗と惨めな結果に終わった。

エペ専門の島松は15勝5敗で東西対抗の東軍の大将だった事を考えると、大変申し訳がない結果となった。リーグ戦は島松の活躍と博打に強い河野の踏ん張りでとにかく一部に残留し、最後はインカレエペ優勝で有終の美を飾り、正に涙と汗と感動の4年間でもあった。

昭和40年前後は学生運動がはなやかなりしころで、早稲田大学内外も安保騒動で騒々しかったが、ひたすらフェンシングに打ち込めた良き時代でもあったと思う。

思えば早稲田を卒業後はや30年を過ぎ定年まで6年となった。我が人生に悔いなしとは言わないが、4年間のフェンシング部生活は我が青春のまぎれもない1ページであった。

1964〜1974 出来事

1964年

●米海軍駆逐艦がトンキン湾で北ベトナムに魚雷攻撃されたとして米軍機が北ベトナム海軍基地を攻撃。これを機にベトナム戦争激化。

●東海道新幹線が開通。東京―大阪間を4時間で走り、従来の特急の6時間30分を大幅に短縮する。

●第18回東京オリンピック開催。日本は男子体操、レスリング、女子バレーで金メダルを取り大活躍。

●イタリア製の西部劇マカロニ・ウエスタンが製作されはじめ、世界の映画市場へ輸出される。

1965年

●ミニスカートが大流行する。ロンドンからはじまったこの流行はたちまち世界中に広まった。

●イギリスのロックグループ、ローリング・ストーンズの「サティ

●西澤民夫（40年度・主将）
フェンシング部50周年にあたって

三銃士に憧れ、昭和34年（1959年）に早稲田大学高等学院フェンシング部に入部、昭和41年（66年）3月に早稲田大学フェンシング部を卒業して、早いもので既に30年も経過した。30年間にはいろいろあったが、フェンシング部での稽古（当時はそう言った）の苦しかったことを考えると、その後に起こったことは何でも喜歌交じりにできた。現につい最近（96年5月）、早稲田精神昂揚会主催の第34回100kmハイクに初出場し、昭和51年（76年）前後生まれの学生達に混ざって100kmを完歩できた。これもフェンシング部で培った精神力のお陰ではないかと思っている。

私がフェンシング部に籍を置いた時代は、旧来の日本的な精神主義の稽古（稽古中は水も飲んではいけない）から、グローバルで合理的な練習へと大変革の始まりの時代であった。形は真似ることができても、稽古の考え方、進め方等に確信が持てず、私を含め皆がこのギャップになかなか順応できず悩んだものであった。

また、フェンシングはスポーツとしてマイナーなため、就職に有利な別のことを始めようかとか真剣に悩んだこともあった。あえて年寄りじみて言うと、若いときはいろいろ悩むものであるし、またいろいろ悩んだことが良いと、今では思っている。

早稲田大学フェンシング部には、平野、橋本、吉田、宮下、北原、柴田、重盛（物故）、田辺、高橋（女性）等10名以上の仲間と共に入部した。高校時代からフェンシングをやっていたのは、私のほか北原、高橋の3名であったが、皆揃って新人係の原田先輩の猛烈なシゴキの下、心を一つに頑張ったものであった。稽古は長距離をランニングした後、膝の屈伸1000回以上、腕立て伏せ100回、腹筋200回、フットワーク（アドバンス、リトリート、エクステンション・ジ・アーム、ランジ、フラッシュ等―多分最近の人は良く分からないかと思うが）30分以上、組み稽古その他とかなりきつかった。しかし、原田先輩は我々新人をポケットマネーでしばしば奢ってくれたものであった。ビールと焼き肉は当時贅沢品であったが、稽古が終わってからの我々の楽しみの一つであった。我々に奢ってくれた原田先輩は小遣いが不足気味で、カセットテープレコーダー等をよく質屋へ持っていったものであった。我々は今でも大変感謝している。

その他の楽しみは（苦しみは？）、麻雀であった。いつも宮下にやられていた。彼はいつも新しいトレーニングウエア、靴を持っており、「この袖は西澤から、この靴の右側は橋本から」などと言っては見せびらかしていたものであった。

夏期合宿、冬期稽古、春期合宿、リーグ戦、入替戦、早慶戦、立命戦（いつも桜がきれいであった）、全日本学生選手権、東西対抗戦等の思い出は今でも甘く、ほろ苦く記憶の底から浮かび上がってくる。

●北原勝彦（40年度）

今から36年前の、桜の春4月。高校の薄暗い部室で、初めて、フェンシングの剣を持たせてもらった時の事を、今でも鮮明に憶えている。しかし、当時流行の、「三銃士」の格好の良さとは大違い。運動の不得意な小生には、辛い毎日が待っていた。それでも、主将になり、さらに大学まで7年間、フェンシングを続けられたのは、やはり、同期の良き友人がいたからに他ならない。大卒後、30年経った今でも、強く感じている。

●平野正宏（40年度）

西澤、橋本から50周年史投稿依頼の電話を貰った。10年来会っていないがすぐそれとわかり、きのうまで一緒だった気がする。嬉しいことだ。悦び至極である。

合宿の稽古の合間に当時流行していた「思い出のサンフランシスコ」を誰かが歌っていた。

「疲れたら休め、彼等も遠くへは行くまい」がしこたれた時の合言葉だった。

これらについては前回の投稿の際も書いた気がする。心のふるさとの思い出はいつになっても変わらない。ふと学生時代を思い出した。今、娘達が青春真只中だ。

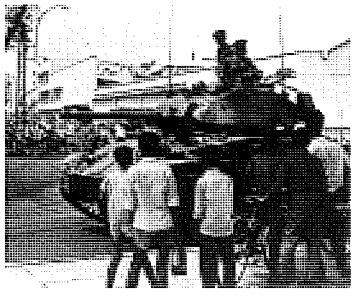
●橋本純樹（40年度）

4年間の部生活を回想すれば、皆それぞれいろいろの思い出がある。私は早稲田大学で初めて運動部に入部し、剣を持ち、足腰が立たない程の練習にへどを吐き退部も考えたが、同期に励まされ、なんとか4年間の部生活を送れた。嬉しかった事は、二年時に全国大学選手権エペの部で優勝した事。悲しかった事は、四年時、入替戦で日大に敗れ二部に転落した事。先輩ならびに後輩には誠に申し訳ない気持だった。

20年程前だと思うが、吉田から電話があり、文学部横体育館4階の道場で、現役と共に練習を始めた。今も邪魔にならないよう新道場で週一回、月曜日に汗を流している。健康管理、ストレス解消、稽古の後の一杯のビールの旨さに魅せられて現在に至る。専用道場はゆったりとした広さで、冷暖房完備、湯船の下まで見えるきれいな風呂と至れり尽くせりの設備です。稲光会会員の皆様、是非剣を持ちましょう、気持だけは学生時代の昔にかえります。

●吉田友久（40年度）

30周年を機に始まったOBの練習（月曜会）の帰途に立ち寄っていた居酒屋「ボロ馬車」（幌馬車ではない）の女主人が、平成7年11月23日に亡くなった。約5年に渉る闘病生活であった。汗を掻いた後で飲むビールの旨さ、味



スファクション」が大ヒット。
●アメリカ軍が北ベトナムのドンホイを爆撃。北爆が開始される。これによりベトナム戦争はドロ沼化していく。

1966年
●この年の下期から70年下期にかけて「いざなぎ景気」といわれる好景気が到来する。
●東洋工業がロータリーエンジンを搭載した日本初の乗用車「マツダ・コスモ」を発売する。
●日本の人口が1億人を突破する。平均寿命は男67・2歳、女72・9歳。
●バッティングセンターが流行し、プロ野球ファンの格好のレジャーとなる。
●中国で文化大革命が始まる。「毛沢東語録」が出版され熱狂的な学生たちにより、文革のバイブルとなる。

1967年
●第3次中東戦争が勃発。アラブ諸国に対してイスラエルが奇襲攻撃、6日で勝利を手にする。
●東京都知事に美濃部亮吉が当選し、革新都政がはじまる。

1964〜1974（昭和39年度〜49年度）2

は、いまいちのオデンやお惣菜を肴にフェンシングの事、仕事の事、家族の事など夜更けまで語り合ったものである。時には、出張で上京したOBや現役部員達とカウンターの奥の座敷を借りてドンチャン騒ぎをして近所から苦情がきたこともあった。

古いOB対若いOBと言う恰好で監督問題を議論し合ったのは10年以上も前の事になるだろうか。

何時も笑顔で、我々の相手をしていた小母さんの様子を思い出す。30周年から50周年までの歳月に改めて感慨を催す。

ここ数年の練習後の憩いの場は、神田川沿いの「呑ちゃん」である。諸先輩、月曜日の夜は、道場へ寄ろう。あーあ、今夜も遅くなりそうだ。

●成田龍士（41年度・主将）
千日を鍛、万日を練とせよ

フェンシング部50周年、誠におめでたいことと存じます。私も現在51歳になり、ほぼフェンシングの誕生とともに歩んできたことになります。その間といえば私自身愛知の山奥より、東京に出て参りましたのが、丁度小学校に上がる前の年、6歳の時でした。

その頃のフェンシング部といえば、故・中村栄太郎先輩、佐藤武先輩を始めとして、早稲田第一期黄金時代の幕開けと聞き及びます。その後も本道、竹村、川名、成瀬諸先輩等が早稲田の黄金時代を築かれ、その後も北原、植竹先輩、最近ではオリンピックにはじめて出場した出野君、又今年は女子でアトランタオリンピックに出場が決定した田中さん等、キラボシの如く有名選手が輩出されていることは、伝統の力が綿々と引き継がれていることを物語っていると思います。

私はといえば小学校、中学校と野球に熱中しておりました。その頃は川上、青田、大下、杉下、藤村選手の全盛時代で、その頃カバヤのキャラメルのおまけのブロマイドを争って集めていたことを思い出します。

そんなわけで早稲田の高等学院に運良く入学できた時も野球部に入ろうと思っておりました。しかし、その頃の私の身長が150㎝、体重も45㎏程度だったと思いますが、ていよく門前ばらいをくらうことになりました。その時、名前は失念しましたが口のうまい一年先輩の方の勧誘にマンマとのせられ、その後20数年フェンシング部に御世話になろうとは、その時露程も思いませんでした。

その間楽しい思い出、苦い思い出等走馬燈の如く思い出されます。特に2年間連続の入替戦はレギュラーとして最初の年は一部残留、次の年は二部転落というドラマチックな展開を体験し天国と地獄を味わいました。その場面はいまも、生々しく記憶に蘇ります。

社会人になってからは、月曜会に参加し、20年近くフェンシングを通じて、先輩、後輩とつきあわせて頂きました。特に故・中村栄太郎先輩からは「勝つフェンシングより、上手なフェンシングを目指せ」、佐藤武先輩の「一生懸命やっているつもりでは駄目」という御教訓はいまも心に残っております。その間自分といえば、学院の監督として3年あまり高校生の指導をさせてもらいましたが、生半可な技術力をもって、受け売りの指導しかできなかったと悔やまれます。その反省から10年程前より剣道も始め、やっと3段をとりましたが、なかなか4段の壁が破れないのが現状です。

フェンシング部も本年女子は一部に昇格したそうですが、男子は一部の壁に苦戦中と聞き及びます。技術力に左程差がなくなると、どうしても最後は気力、心構え等、精神力の向上という問題につきあたります。これは一朝一夕でできるものではなく毎日の地道な真剣な努力の積み重ねが必要です。千日を鍛、万日を練とせよという剣道の言葉もあります。学生の皆さんも毎日、毎日を惰性的稽古に時間を浪費することなく日々新たであってほしい、これは自戒をこめて切に希望するものであります。

最後になりましたが、川名監督、中村助監督の部員指導御苦労に対し心より敬意を表します。また、早大フェンシング部が今後とも益々興隆、発展していくことを、心よりお祈り申し上げます。

●中村立雄（42年度・主将）
21世紀での発展の礎に

創部50周年を迎えた本年は、まさに我部の21世紀における発展が期待できる基礎が固まった年であると確信しております。

部の現況は、当部2人目の現役早大生・五輪代表となった「田中奈々絵選手」を始めとして続々と有望な人材が入部しつつあります。実に先が楽しみな状況といえます。

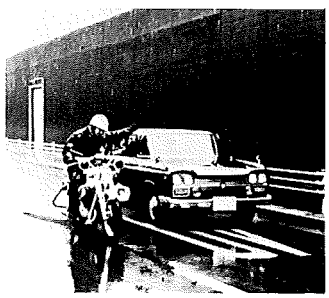
「集まり散じて人は変れど、仰ぐは同じき　理想の光」の詞に、万感胸に迫る先輩方は多いと思います。まさに当部も栄枯盛衰の歴史を経て今日に至りました。願わくは、この発展の礎をしっかりと固め、磐石なものとしたいと考えるのが、全OBの悲願であると思います。

我部には他校に勝り、誇れる「稲光会は〝一枚岩〟」の基、純粋にフェンシング部の発展を願う歴代の部長先生を始めとする全員全員の真心が有り、このことは50周年にとどまらず、未来永劫に発展・持続することと確信しています。現役部員諸君の精進と成長をひたすら祈るばかりです。

最後に、近年他校の先輩方が「生涯

1968年

●東京・府中市の路上で東芝府中工場従業員のボーナス資金約3億円が白バイ警官を装う男に強奪される。捜査はその後、難航し、75年に時効が成立する。



●スタンリー・キューブリック監督が特撮を駆使して宇宙を詩的にとらえたSF映画「2001年宇宙の旅」が公開される。

●全米陸上選手権でハインズ、スミス、グリーンの3人の黒人が100メートル9秒9の世界新記録を達成する。

●川端康成が日本人初のノーベル文学賞を受賞する。

1969年

●セイコーが水晶発振式の腕時計を発売する。これ以後、クオーツ時計を中心に日本の時計産業が世界を席巻する。

●アポロ11号が月面に軟着陸。ニール・アームストロング船長とエドウィン・オルドリン大佐が人類で初めて月面に第一歩をしるす。

●アメリカ・ニューヨーク州のウッドストックに40万人の若者が集まりロックとブルース、そしてマリファナに酔った。日本では、新

スポーツ」として「フェンシングライフ」を楽しみ、練習や試合に積極的に参加している姿が多くみられます。日本でのフェンシングの発展の為にも、自分の楽しみの為にも素晴しいことと思います。

川名監督が執筆者の一員となられて最近発刊された「フェンシングの手引」（東京都フェンシング協会・編）に全国各地のフェンシング協会や練習クラブの所在地リストが充実して紹介されています。

全国の先輩の方々、いつの日かお手合わせをしたいと思います……。

●柳田三重子（43年度）
あの頃の思い出

早大文学部に入学して2年目、体育の単位を取る為に実技の種目の一覧表を前に、「さて何を選択しようかな？」と迷っている内に、ふと目に止まったのが「フェンシング」の6文字でした。中学・高校時代の6年間演劇部に所属し、早大に入ってからもいくつかの劇団につい首を突っ込んでしまう程、芝居好きの私の脳裏にシェイクスピア劇に登場する騎士の姿、独特な剣を抜いて戦う華麗なスタイルが浮かんできました。「これだ！」とばかりに申し込んでしまったのです。しかし選択はしてみたものの、幼い頃から虚弱体質で、思い切りスポーツを楽しんだ事のない人間が激しい運動についていけるのかと、ちょっぴり心配でした。

期待と不安の入り混じった気分で初めての授業に参加しました。予想通り殆んどが男子学生で、女子はほんの数人でした。良く覚えていませんが、初めて「オンガード」の形を取らされた時はへっぴり腰ながら、手塚治虫の「リボンの騎士」になったような気分でした。何回か通って楽しくなってきた頃、女子部員のお二人に入部を誘われました。「とんでもない！　体育局に入るなんて？」と即座にお断わりすると、「現在女子は二人きり、リーグ戦にも参加できない状態。一人でも入部して貰いたい」と熱心に説得されて、ついその気になってしまったのです。「皆さんについていけるはずもないのに！」と軽率な自分に腹立ちながら、恐る恐る部室へ顔を出しました。

部の雰囲気は明るく、当時の監督・佐藤先輩を初め部員の皆さんが歓迎して下さりホッとしたものの、生まれて初めての運動部はやはりきついものでした。それでも構内一周マラソンから柔軟体操、フェンシングの基礎を段々に教えて頂き、私なりに体力、筋力がついたようです。この時期が私にとって運動能力を育てる最後のチャンスだったかも知れません。

四年になって、気がついたら女子部員は私一人になっていました。卒業を間近に控え、改めて自分の3年間を振り返り、「フェンシング部先輩」としてこのまま栄誉ある稲光会の会員に残る資格はないと思い、或る日佐藤監督に「退部願」を提出した所、監督はサッと一読した途端ビリビリッ！　と破いて「認めん！」とひと言。ついに私は、稲光会初の女性会員一号になってしまったのです。

不思議なご縁で得た私の大事な世界。金子会長を初め素晴しい先輩方、現役時代の成田、中村先輩、同期の小代さん、一番気楽に話し合えた窪田さん達、北島さん達、そしてかわいい森居君達。改めてこの紙上をお借りしてお礼を申し上げます。素晴しい3年間を下さってありがとうございました。

今は女子部もオリンピック選手を出す程力をつけ、感無量の思いです。あまり頼りにならない先輩ですが、役に立つ事があれば、遠慮なく利用して下さい。そして、早大フェンシング部に永遠に栄光あれ！

●窪田知行（44年度・主将）
ドン底時代、あの時のあの力

創部50周年。本当におめでとうございます。我々が在学した4年間（昭和42～45年）は、戦後50年の中間期であり、我々フェンシング部の歴史の中でも、中間期にあたる時期であった。

入学の年は早稲田闘動の真最中、学内は封鎖されており、入学式すら出来ない状況であった。学内封鎖を解こうと、バリケードに突入して行ったりもした時代であった。

卒業の年は、万国博覧会の年。日本の戦後が経済復興の姿を世界にアピールした年でもあった。まさに大きく変わって行く時代であった。そして我々フェンシング部にとっては、ドン底の時代でもあった。

昭和42年リーグ戦で、二部の最下位。三部との入替戦。先輩方からは、三部に落ちたら廃部すると言われていた。普段は、貴公子然としていた中村主将の表情が、本当に変わっていた。あんな真剣な中村先輩を見たのは、はじめてであった。幸いにして、入替戦で、勝利をおさめることが出来、今こうして50周年を迎えることが出来た。あの時のあの力は、何だったのだろうと、今更ながら思える。

試合会場は、諸先輩の大きな声援で、何とも表現しようのない、雰囲気であった。今思い起こそうとしても、どう戦ったのか、全くおぼえていない。歴史を重ねていく、伝統を継承していく、そんな目に見えないものの力かもしれない。

2年半前に、卒業以来24年ぶりに東京勤務になり、新しいフェンシング道場に顔を出した。専用の道場。数多くの部員、そして壁に掛ったOBの名札をながめた時、あの時勝っていて本当に良かったと、あらためて思った。と同時に時間の経過をつくづく感じた。足がもつれて、マルシェが出来ない。自分の体重を自分の足が支えられない。ちょうど吉田先輩と、橋本先輩が来ておられ、ファイトをしておられる。昔と少しも変わらないなつかしいフォームで。

継続することの大切さをあらためて教えられた気がした。

半年前に大阪に転勤になり、あわただしく引越し、諸先輩方には、御挨拶も出来ず申し訳ありませんでした。本

宿駅西口広場の反戦フォーク集会に7000人が集まるなど、反戦フォークが流行する。

1970年

●羽田発福岡行きの日航ボーイング727「よど号」が赤軍派にハイジャックされる。よど号は3日後に北朝鮮に着陸し、赤軍派は亡命を認められる。

●「人類の進歩と調和」をテーマに大阪で万国博覧会が開幕する。参加77カ国、観客は6421万人。

●パンアメリカン航空が、座席数490のジャンボジェット機「ボーイング747」を大西洋線に就航させる。ジャンボの最大の長所はその経済性にある。

●作家・三島由紀夫が「楯の会」会員4人と市谷の陸上自衛隊東部方面総監部に乱入、自衛隊員にクーデターを訴えるが受け入れられず割腹自殺する。

来なら私が、この様なイベントの準備やお手伝いをしなければならなかったのに、誠に申し訳ありません。

私自身大阪に来て、日も浅く右も左も良くわかりません。在阪の諸先輩方、皆様方、是非御連絡下さい。

●北嶋 栄（45年度・主将）

昭和45年度卒5人の4年史は波瀾万丈だった。入学早々のリーグ戦は二部最下位。国士舘（二部）との入替戦を凌ぎ、辛うじて降格を免れた。二年は二部で低迷、三年では優勝したものの一部の壁（明治）にはね返された。

四年の時に二部で優勝し、立教との入替戦を2勝1敗で勝って一部復帰が叶った。

50年史の丁度中間に位置する私達は「団塊の世代」と呼ばれ、人口過多が故に、常に競争と混乱が付きまとう。当時もベトナム反戦、全共闘、学園紛争等のまっただ中にあり「混沌」が世相を表す言葉であった。そして入部した年の早大フェンシング部は、創立以来の低迷期でもあった。新監督の佐藤武先輩から4年間に亘る薫陶を得ながら、何かに憑かれたように、ひたすら突き進んだ日々は、若き日のすべてであり胸を熱くする想い出だ。

25年を経た今、思い出す機会を得て5人各々が短信を寄稿することになった。そしてたまには集まってみようか、と言う事になった。

●安藤孝男（45年度）

昭和46年3月卒業以来、25年、早や四半世紀が過ぎた今日、我がフェンシング部は半世紀の50周年を迎えることに、誠にうれしく又、有難く思っております。

この間、私は会社では、永年勤続の表彰を受ける年齢となり、家族も長男が大学を卒業し、就職することとなり、時の流れの早さ、大切さを痛感する一方、この間、フェンシング部での数々のご指導、練習、合宿、リーグ戦等々の体験、思い出が、実社会の中で、心の支えとして役立って来たことを改めて認識している次第です。

転勤族の私は卒業後、なかなか、催し物に参加できず失礼をしており、尚更に、わがフェンシング部50周年を支えていただいた歴代部長、監督はじめ諸先輩、後輩に感謝し、益々の発展をとげられることを祈念致します。

●太田三雄（45年度）

2週間程前に理工系新入社員の面接を行った。当社では営業部門の第一線で働く者が面接を行う。やはり体育会系の男子にしっかりした若者が多い。昔も今も一つの事に打ち込んだ人間の自信の現れか。家庭の事情でアルバイトに精を出さざるを得ない者も気骨があった。一つの事をやるからには全精力を注ぎ込んでほしい。試合では勝てなくとも、次の人生につながって行くだろう。25年前を振り返って三年の入替戦で果たせなかった夢が四年で実現した事が、昨日の事のように思い出される。一丸となれば一部復帰も近いだろう。

●小林秀直（45年度）

夏目坂を過ぎ、だらだら続く坂道を上り詰めると都電通りに出会う。その若松町交差点手前の路地を左に入ると合宿所（一二三荘）があった。

一部復帰の大義の下、佐藤監督とともに多河氏、坂本氏、宮原氏、小生5人の奇妙な共同生活が始まったのは、昭和44年の早春と記憶している。

当部50年の歴史で唯一の合宿所であった。よく言えば「臥龍崖」か「梁山泊」。実態は第2部室を兼ね、フェンシング道に加えて雀道、酒道の人生劇場。近所の白眼視が痛かったことをよく記憶している。

往時茫々、『弁天』のおばちゃん、『若松食堂』のオッチャン、午過ぎに出勤するオカマさんは、いまごろどうしているだろうか。

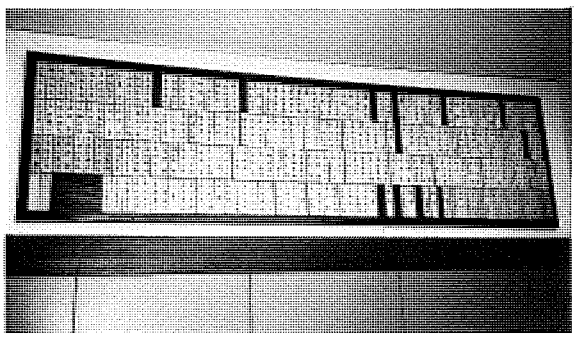
あれからすでに四半世紀、未だかつて足を踏み入れていない青春のサンクチュアリ、あの懐かしい原町界隈をもう一度徘徊してみたいと思う。

●多河 清（45年度）

校歌が好きで早稲田を希望した。入学してから、本格的な運動をやりたかったので、バスケット部に行ったが、身長等で無理だとキャプテンに断られた。

ぶらぶらしていたところ、偶々、中村立雄先輩（昭和42年度卒）に会った。それが、フェンシング部との出会いだった。

田中奈々絵さん、オリンピック出場おめでとう！



1971年

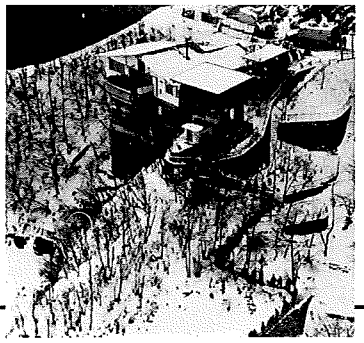
●アメリカがドル防衛策として金・ドル交換を一時停止、ドルショックが世界をかけめぐる。主要諸国は変動相場制へ移行する。日本では年末に1ドル308円となる。

●日清食品から発泡スチロール容器に入った即席めん「カップヌードル」が発売される。

●千歳から羽田に向かった全日空58便B727が、岩手県雫石町上空で自衛隊の戦闘機F86Fと衝突し、機体は空中分解。乗客乗員162名全員死亡。原因は自衛隊機のニアミスとされた。

1972年

●連合赤軍派5人が、軽井沢のあさま山荘に管理人の妻を人質にしてろう城。警官隊と10日間にわたり銃撃戦を展開する。この模様はテレビで実況中継され、お茶の間の目を引きつけた。



●国連人間環境会議がストックホルムで開催され、生命と自然の安全基準を定めた「人間環境宣言」を採択する。

●第11回冬季オリンピックが札幌で開催される。日本は70メートル

●森居　章（46年度・主将）

日々、思う事

若い頃の話です。まだ明るい時間、ビアガーデンで相席した風采の上がらぬおじさんは早稲田の先輩で、見ず知らずの僕らに一杯のビールをごちそうしてくれ、帰って行きました。スキー場の民宿で後から同室をおずおずと申し込んできた男2人連れは、話せばやはり先輩で、30分後にはお茶の用意や雑用は僕らの役目となっていました。

以来、勤めていた会社が経営難に陥った時、希望退職に応じた者の実に多くが早稲田卒でした。因みにK大卒の連中は殆ど辞めませんでした（あいつらの何としぶといこと）。取引先の担当者で、フェアで切れ者と業者には評判の高かった彼は、聞けば早稲田出でしたが、上司とはおりが合わず、飛ばされてしまいました。

早稲田の人間に共通しているのは、温かく、自由が好きで、決してスマートとは言えない生き方を楽しんでいる事でしょうか。フェンシング部を出たおかげで本当に信頼し合え、心おきなく語り合える仲間を今でもこれ程多く持てるのはこの上ない幸せと日々、感じています。

学院に入学した時、「週3日の練習」に騙されて入部して以来、もしかしたらずーっと騙され続けているのかも知れませんが。

●坂本雅夫（46年度）

我が青春！　原町合宿所

御存じない方も多いでしょうが、フェンシング部にも、実は寮がありました。佐藤監督のご提案で、確か昭和45年に出来たと思います。

思い出の1日を披瀝しますと――。

もちろん、1日の朝はランニングから始まりましたが、その後が普通の学生とは違いました。監督の優しいご指導のもと、夕方の練習が始まるまでみっちりと麻雀のレッスン。ともかくキビシいレッスンのため、その月の寮費をソックリ授業料として支払う八メになった新潟出身の先輩もいました。

厳しい練習の後は、「弁天」という飲み屋で、お酒の正しい味わい方のレッスンがはじまります。つまみは先輩の悪口、政治家の悪口、はたまた隣りで飲んでいる労務者の悪口（なんと、パトカーが3台も来たほどの騒ぎになってしまったこともありました）、そして最後は、なんとしても一部リーグへ上がるため侃々諤々。

剣と酒と……という日が多かったように思います。原町合宿所での思い出は、数えたらキリがないほど沢山ありますが、いまでも一番頭に焼きついているのは一部昇格の入替戦です。

現役の皆さん、一部昇格とは言わずに、是非、優勝を目指してガンバって下さい。

●高橋秀忠（47年度）

50周年によせて

私達の代の卒業生は、最終的には、私と佐藤勧君の二人だけでした。勧君とは学院時代からの付き合いで、7年間のフェンシング生活は、今思い出してもなつかしく、かけがえのない時間だったと思っています。

特に大学の4年間のリーグ戦は、一、二年時が二部から一部へ上がる為の、また、三、四年時が一部転落を防ぐための入替戦だった事で、特に深く印象に残っています。

皆さんの時代もそうであるように、我々の時もまた、フェンシングの勝負の追求の過程には、語れば、TVや小説よりよほど面白いドラマが、至る所にちらばっていたと思います。

当時の佐藤武監督、川名監督を始めとする諸先輩方、また、一級上の森居先輩には、意気地の無い自分を引っ張って頂き、ひとかたならぬお世話になりました。

今思えば、幼稚な精神構造で、迷惑をかけっぱなしだった自分が恥ずかしくなります。卒業後22年経ちますが、定期的に頂く稲光会員の名簿の中にも、最近は物故の記事が目立つようになってきて寂しい限りです。

私は、大学卒業後、わずか数年の間に、この佐藤君の郷里の新潟に二回程訪問することになりました。一度は彼の結婚式であり、もう一度は彼が白血病で亡くなった時です。

この時には、当時の平部長を始め、フェンシング関連の参列者全員で、前の晩ホテルで書いた弔辞を交代で読み上げさせてもらいました。私はその時、勧君の霊前に、俺はおまえの分まで思いきり人生を生きるから見守っていてくれという誓いをしました。

それから20年近くたちますが、今でも人生の節目節目でそのことを思い出します。

最近、2度目のアメリカへの転勤が決まりまして、そのための引越荷物の整理をしていたら、昔勧君が私宛てにくれた手紙が出てきまして、なつかしく読み返したという次第です。

この節目にも勧君が激励に出てきてくれたような気がしてなりません。今、ビザがおりるのを待っているところで、ビザがおり次第シカゴへ発ちます。今度の転勤は5年から7年になりそうです。

前回の8年と合わせると会社勤務の三分の一以上をアメリカで過ごすことになりそうですが、勧君に笑われないように頑張ってきます。

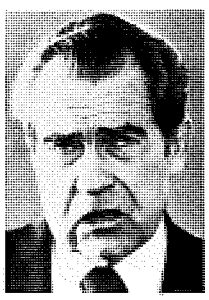
最後にOBとして、稲光会の行事、現役の試合の観戦等にも参加できずに大変申し訳ありません。この紙面を借りましてお詫び致します。

残念ながら、以上のような次第で、この50年史が発行されるころには、シカゴで生活していることになりますが、稲光会の今後の益々のご発展をお祈りしております。

級ジャンプで笠谷幸生の金メダルに続き、銀・銅メダルも独占。

●奈良県明香村の高松塚古墳で石室内に描かれた極彩色の壁画が発見される。

●ワシントンでウォーターゲート事件が発生。事件は拡大し、翌年には全米に波紋を広げ、盗聴事件もみ消しの事実を認めたニクソン大統領は2年後に辞任する。



1973年

●韓国大統領候補の金大中氏が東京のホテルから誘拐される。事件は真相が明るみに出ることなく、政治結着となる。

●第4次中東戦争が起きる。対イスラエル戦略でアラブ側が石油値上げ、減産を発表。世界中にオイルショックが広がる。日本でも電力削減、ネオン、マイカー自粛などが打ち出される。

●阪神を相手に甲子園球場で巨人がセ・リーグ優勝を決める。この試合で王選手は史上3人目の三冠王を確定する。続いて日本シリーズも制し、V9を達成する。

1964〜1974（昭和39年度〜49年度）4

●佐藤光良（48年度・主将）
現役時代のこと

現役時代の思い出と言えば、第一にリーグ戦の思い出、というより正確には入替戦への戦いの思い出といったほうが正しいのか、とにかく、それに尽きるだろう。

我々が入学した年、北嶋先輩が4年の時であるが、一部に昇格し、以来、森居先輩の代、佐藤勧先輩の代と入替戦が続くのであるが、それらの話は諸先輩にお任せするとして、ここでは割愛するが、それぞれが忘れ難い試合なのである。

我々が四年の時はというと、この時も、二種目終った時点で、明治と肩を並べてビリ。残るは苦手としていたエペとあっては、今年もまた入替戦かと、半ばあきらめながら、第二日目の対法大戦に臨んだのである。

負けて元々と開き直ったのが幸いしたか、一廻りしたところで3勝1敗とリードしたため、逆に法政側があせり始め、結局、前半のリードに助けられて法政に勝つことができた。

その勢いで、次の明治をも破り、結局、5位でリーグ戦を終了する事ができ、私が入部以来、初めて入替戦のない年となったのには正直いってホッとしたのである。

もっとも、最初からリラックスして、変なふうに入替戦を意識しないで戦っていたなら、もう少し良い内容で戦えたのではないだろうかと、今でも悔いが残るのであるが……。

春のリーグ戦の次に大事な秋の早慶戦、その早慶戦を幸運な事に、我々の代は、4年間負けることを知らずに過すことができた。

我々の代で、早稲田にとって最初の4連勝を達成できた時は、本当に嬉しかった。

もっとも我々の代は、春の立命戦では珍しく負けるという汚点も残しているのだが……。

我々が四年になってからの最初の試合である立命戦に負けた時は、これからどうなるのかと、暗たんたる気持になったものだが、特にイヤな思い出はそれだけで、あとは順調であった。特にシーズンの最後、インカレのサーブル個人で宮原君が優勝したのは特筆すべき事であろう。

現役の時に一番いやだったのが、合宿。それも夏の合宿であったが、それも何年もたつと懐かしい思い出となるから不思議である。

川名慶智や森居先輩たちに、よくしごかれた事が、今でも鮮明な記憶として残っている。

〈30年史より転載〉

●大川秋彦（49年度・主将）
奥多摩の山中にて

額に汗がにじんで来た。歩き始めて30分が過ぎたか。体の中を血液が脈々と流れている。体が欲しがり大口を開けて酸素を取り入れる。心臓と肺が動いているな。空調のきいた事務所では汗をかく事はない、息が切れる事もない。この坂道では、足が上がる、手が振れる、汗をかける、体が中から動く、俺は生きているなと実感できる。坂は続く、杉が等間隔で整然と並んでいる。細い道はなお続き、木漏れ陽を浴びる。枯れ葉が積もり、永い年月の中で踏み固められて出来た自然のジュータンは軟らかく、掘りのある感触を足の裏へ伝えてくれる。踏みしめて進む。クッションの分だけ心が安らぐ。

今日は休日だ。薄明かりを感じて、無理して早起きをする。女房はかすかに気づいているらしい、子供は全く夢の中か。トーストをほうばり、熱いコーヒーへ牛乳を注ぎ一気に飲み干す。ペットボトルに半分の水を凍らせて、そこに濃い目の麦茶を注ぐ。ディパックに着替えと地図と雨具を入れる。梅雨どきにしては今日は天候に恵まれた。明るい、やや強い日差しの中、目を細めマンションの扉を開けた。眩しい。電車を乗り継ぐ、地図と案内書でコースを確認する。読んだが掴めない、頭に入らない、頭はまだ起きていない、もう一度読み直す。いつのまにか、電車はハイカーでいっぱいになっていた。

福岡転勤の際、お世話になった佐藤令史先輩、野田恭弘君、なつかしい人たちの笑顔が脳裏をよぎる。美味しい魚と焼酎を幾度となく一緒に味わった。芥屋の海と空は澄みきっていた、室見川は白魚が上り、美しい川だった、中州川端は山笠が走り、輝いていた。慣れない勤務地で心細かったのをはげましてもらった、楽しい思い出をありがとうございました。いつの日か博多へ行きます、会いましょう、それまでお互い元気で。

雑木林の緑が鮮やかに目に焼き付く、どこまでも緑の山並みが続く。突然つぐいすの鳴き声が響き、辺りの静寂を破る。ふっと我に帰る。単純でかわいいやつだ、口笛でまねをすると、それに応えてくる。

坂道は続き、岩が出てきた。進むにつれ、やがて大きなものがまじってきた。天狗が座ったという天狗岩だ。山肌に垂直にそそり立つ。この岩は何年前から人間を見ているのか。

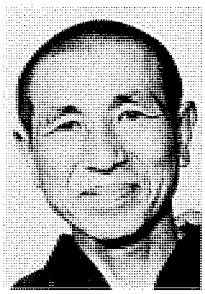
何人の旅人を、修行僧を、迎えそして見送って来たのか。オーイ岩よ、千年前から、おれが来るのを待っていてくれたのか。そしてこれから千年先にも、稲光会のメンバーがここを通りすぎるのを待つのか。

山頂に着いた、晴れていれば富士山が丹沢が秩父が見えるはず。今日は近くしか見えない。寒い澄んだ冬にもう一度訪れよう、山は遠い思い出がよみがえる場所だから。

1974年

●モハメッド・アリがザイールのキンシャサでジョージ・フォアマンをKOで破り、世界ヘビー級の王座に返り咲く。

●フィリピン・ルバング島の山中に終戦後28年7カ月も潜んでいた小野田寛郎元少尉が、救出団の説得に応じ帰国する。1972年にはグアム島で横井庄一さんが発見されている。



●ミスタージャイアンツこと長嶋茂雄選手が「わが巨人軍は永遠に不滅です」の言葉を残して現役を引退する。

●ハンク・アーロンが715本目のホームランを打って、ベーブルースの記録を破る。

●堀江謙一が小型ヨット「マーメード3世号」で、単独無寄港世界一周を277日目で成功する。

●三菱重工、三井物産など、外国投資関連企業が過激派により連続で爆破される。「東アジア反日武装戦線」を名乗るグループが犯行声明を出した。

座談会●月曜会、集合！

いつまでたっても“現役”精神

出席者／金子 誠、川名宏美、新井時男、吉田友久、橋本純樹、
田中 一、内田敏朗、小川敦行　司会・進行／平野健一

「月曜会」の歴史はもうすでに20年！

7月22日、月曜日。神田川沿いの一杯飲み屋「呑ちゃん」に月曜会のメンバーが集合した。カウンターだけの小さな店だが、メンバーにとっては実に居心地のいい空間だ。まずはお決まりのビールとなったが、「いつもと味がちがうね」「やっぱり汗かいてからじゃなきゃね」の声。そう、この日は50年史のための座談会の集まり、しかも現役の練習もオフとなったため、いつもの“ひと汗”はなしで席に着くことになった。

＊

司会　皆さん、ごぶさたしてます。変わってないですね。今日は50年史を作るにあたって、より多くのOBの皆さんにぜひ、この月曜会のことを知っていただくことが重要ではないかということで、座談会を開かせていただきました。まずは、この会の発足についてからお話を進めたいと思います。

川名　ちょうど20年前の30周年のときがきっかけだったはずだよ。30周年の打ち合わせで集まったときに、OBの練習もやろうという話が出た。たしか、成瀬あたりが言い出したんじゃなかったと思うけど。

吉田　そうですね、30周年の年ですよ。昭和51年の春ころから体育局4階の当時の練習場へ顔を出し始めた。30周年のイベントの前から集まってきた記憶があるからね。別に月曜会という名前はついていなかったけれど、現役にまじって汗を流そうと通いはじめたのが最初ですよ。

司会　ちょうど私が現役の4年でしたから、覚えています。毎週、4人くらいのOBの方がみえていました。

橋本　当時、現役も一部リーグにはいたものの、部員も少なく、入替戦などの土壇場で苦労していた時期で、OBでもなにかやろう、という気運が高まっていたと思うよ。

川名　やっぱり30周年というひとつの区切りをきっかけに、それまでOBと現役との日常的なつながりが少なかったことから、ハッパをかける意味も含めて集まってみようということになった。

司会　月曜会という名前はいつついたんですか？

吉田　どうしてついた名前だったかなあ……。

内田　中央大学に木曜会というOBの会がありますよね、それを意識してつけたんじゃなかったんですか？

橋本　そういうのがあることは知っていたけど、それを意識してではないよ。それよりなぜ月曜だったんですかねえ。考えてみると月曜って、仕事のあるOBにとっては練習するのに週初めで辛い曜日ですよね。

川名　実はね、私にとって月曜がいちばん時間がとれて、この曜日なら出席できるという事情があったんだよ。だから、私の都合に合わせてもらったというのが、真相。OBたちが集まるといっても、だれかが先に行っていないと、なかなか行きづらいから、私が行ける曜日がベストだったというわけ。

吉田　じゃあ、月曜会という呼び名は、結果的についたということですね。

橋本　それまでめったに顔を出していなかったOBにとっては、突然ひとりで現れるのはなんとなく気が引けるんだよ。だれか知っている人間がいれば

いいけどね。現役だって知らないオジサンが突然現れたら対応できないでしょうし、けっこう冷たく感じるんだよ。

田中 そうですよ。いくらOBといっても、卒業して5、6年もすると知っている現役はいないし、戸惑いもでてきますよ。僕は月曜会に参加し始めてまだわずかですけど、最初はどうしようか迷いましたね。でも、吉田先輩や橋本先輩の顔を見れば、それだけで安心してすんなり入っていけましたもの。

司会 ところで、僕は月曜会の発足当時に現役で、すぐにOBになって最初のころは顔を出していたんですが、吉田先輩や橋本先輩はあれからずっと続けておられるということですよね。

川名 そうなんだよ。当時のメンバーは吉田、橋本、成田、中村の4人がレギュラーで、森居もよく来た。たまに越先輩もみえた。とにかくこの4人はすごいよ、20年間だからね。現役5人分、自分の現役時代も含めると6世代分やってるんだから。(笑)

内田 ひえー！　たいへんだー。

吉田 長くは感じなかったよ……でも考えてみるとやっぱり長いねー。あのとき生まれていた子供はすでに成人しているわけだからなー。(笑)

ここが月曜会の集まる「呑ちゃん」

橋本 うーん、ずいぶん長いし、しつこいねー。

内田 あのー、長い、しつこいといえばですね、先輩たちとのファイティングがそうだったですよ。現役の下級生のころは、先輩から声がかかるとビビってましたもの。とにかくいつ終わるのかわからない。延々つづくんだからもうへとへと。

田中 特に成田先輩のしぶといことしぶといこと。フレーズの区切りなしにどんどん攻められて、こっちが根負けしちゃう。

川名 あたりまえだよ、成田はそれが武器なんだから。(笑)

橋本 だって、現役とやるんだから、こっちも気合いが入るわけよ。

吉田 橋本の声はまたデカいからね。今でもぜんぜん変わってないけど。現役よりパワーだけはあるよ。

橋本 そりゃ、技術じゃかなわないけど、勝負には気迫ってものが必要なんだよ、あたりまえじゃないか！

川名 たしかに橋本の声と気迫には現役もタジタジだよ。練習場の外にいても「トォーッ！」って声が聞こえると今日も橋本が来てるなって分かるくらいだもの。(爆笑)

吉田 ファイティングやってると現役があまりアタックしてこないんだ。

川名 そうそう。だから当時、現役たちに言ったことがある。「OBとやって下がるな！」ってね。

内田 正直いって、毎週月曜は大変だったですよ。通常練習プラスOBとのエンドレス・ファイティングが待ってるんですから。ある意味で根性はつけてもらいましたけど…。(笑)

田中 電気審判器を使わないファイティングだったから、トゥシュがあったかどうか分からない。こっちはたしかに突いたと思っても先輩は「ノン、ノン」っていう表情で反撃してくるものだから、エンドレスだったんです。

川名 吉田なんか自分でフレーズ作っちゃうんだから。(笑)

橋本 そう、マルパレだっておかまいなしに「リポステー！」なんてね。

吉田 ちゃんとパリしてるんだから！

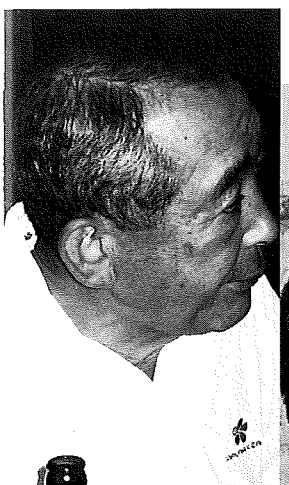
川名 声の橋本、フレーズの吉田って有名なんだよ。(爆笑)

橋本 まあ、今は男の現役より女子部員とのファイティングが多いけど。昔は女子部員とは突くところに困ってやりにくいなんてこともあったけど、今はそれはないね。

吉田 いや、そうじゃなくて、レベルがちょうどいいし、突けないんだよ、女子部員でも。(爆笑)

月曜会はお手軽なスポーツクラブだ！

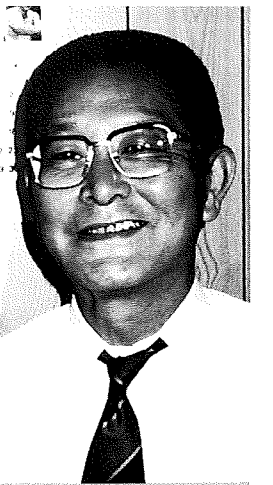
座談会も盛り上がってきたところに、金子会長、新井、小川の両会員が相次いで登場。「どうも、遅れまして…」「い

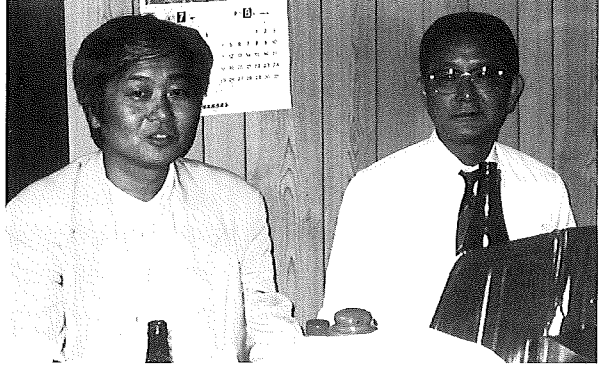

金子会長

田中会員

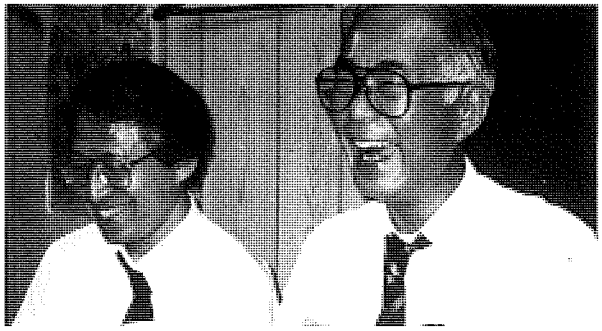
吉田会員

橋本会員

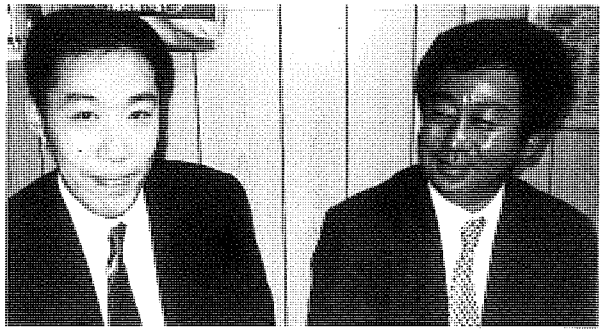

川名監督



右・川名監督、左・平野会員



絶妙コンビの吉田・橋本両会員



左より、最若手の小川会員と内田会員

やいや勝手にやってまして」「まあまあ、こちらへ」と一時、座談会を中断。あらためて「カンパーイ！」となり、ひとしきり雑談となる。

＊

金子　今日は皆さんご苦労さん。盛り上がってるようだから、どんどんつづけてよ。私は聞いてるから。

新井　私も今日はオブザーバーですから、おとなしくしてますから…。

吉田　何言ってるんですか！

橋本　新井先輩も一時よく来てたじゃないですか。ベテラン選手権にも出てたしか3位だったんじゃ？

新井　まあまあ、先をつづけてくださいよ。

司会　じゃあ、ここでまた話に戻しましょう。先ほど、川名監督から吉田、橋本、成田、中村の各先輩たちが、発足時から20年間連続出場という驚異的な〝アイアンマン〟ぶりを発揮されてる話が出ましたが、個人の努力もさることながら、なんとなくこの先輩たちの世代には強い結束力がある気がするんですが…。

橋本　それはね、現役時代のことを引っ張っているせいもあるかな。とにかく苦しい時代だったもの。一部復帰の目標を達成できなかったし、卒業しても何とか名誉挽回しなくちゃいけないみたいなことが付いて回っているのかもしれないね。

吉田　それもあるね。4人とも内心では同じような気持ちがあるのかもしれないな。

司会　うーん、それはすごいことですよね。〝ねばり〟がちがいますよ。でもそれだけじゃなくて、20年もつづけられるには、なにかほかにも理由があるんじゃないでしょうか。

川名　それは決まってるよ、これだよ（と、ビールを指す）。

橋本　あっ、それそれ！　それは大きいですよ。

吉田　なんてったって、汗をたっぷりかいたあとのビールには勝てないもの。

田中　やっぱりそうですか。僕もやってみてよくわかりました！（笑）

川名　皆そうだよな。やってみればこのうまさにはかないっこないもの。だから、いくら練習してスリムになろうったってヤセやしない。（爆笑）

内田　練習あとのこれがなけりゃ、やれませんよ！

橋本　ヤセるヤセないはともかく、月曜会は、僕はホントに安上がりなスポーツクラブだと思ってる。年会費1万円でいつでもやれるんだもの。

田中　そう、普通のスポーツクラブなら毎月が1万円ですよ。入会金もないし、何年たっても更新料も取られないですから、安い！

吉田　その年会費1万円っていうの原稿で強調しといてくださいよ！　これ、月曜会費じゃなくて、稲光会費ですからね。まだ払ってない人いるんですよ！　もちろん、月曜会費なんてないですけど。

橋本　昔の体育局4階の練習場は水道があるだけだったけれど、今じゃフロ、サウナ付きだよ。

吉田　まあ、長くつづけられてる理由のひとつは、自分が楽しんでるってことなんだと思うんですけどね。

川名　そう、それでいいんだよ。義務とかになったら、そうそうつづけられるものじゃないから。楽しむってことが大事だよ。それに、けっこう技とかにこだわってたりしてるよね。先週はあれで負けたから、今週はこれで返してやる、なんて、みんなけっこうやってるじゃないか。

＊

アルコールが入って皆さんのテンションが高くなり、話もアッチへ行ったりコッチへ行ったり。お店のおかみさんも入って脱線の連続。この店は月曜会のメンバーにとってはオアシス的存在で、当初の「ボロ馬車」がおかみさんが亡くなって閉まってから通いつづけているとこだ。

かつて吉田先輩はお店へ来て、勝手しったる何とやらで、2階へ上がりこんでしまった。いくら橋本先輩でもそれはしなかった。しかもお店の犬が吉田先輩に吠えなかったのは解せない、何があったんじゃなかろうか…などなど。月曜会ならではの爆笑大会の様相を呈してきた。

月曜会に参加して〝現役〟復帰しよう！

司会　ここでちょっと、ベテラン選手権についてふれておきたいんですが、月曜会にとって、昭和53年に復活したベテラン選手権は励みのひとつになってるんじゃないでしょうか。

川名　もちろんそれはあるね。

吉田　新井先輩も出場してたって言いましたが、月曜会のメンバーは成績もいいんですよ。成田がフルーレで優勝したけれど、その時の決勝の相手は法政の監督の中島さんだった。しかもバルセロナ五輪の監督を務めた直後だっただけに、体もよく動いたはず。それに勝ったんだからね、たいしたもんだよ。ほかにも2位、3位は毎回のように出ている。

川名　早稲田の新練習場ができたときに、都協会にここの場所を提供しますからやりましょうと提案したことや、滝口先生のお名前をいただいて滝口杯としている関係上、稲光会から参加しなけりゃ格好がつかない。参加したからには優勝も狙いたいしね。

吉田　他校のOBのなかには、週2日みっちり練習しているところもあるそうですから、負けてはいられないですよ。11月3日を目指さなきゃ。資格は40歳以上なんだから、どんどん出場してもらいたいですね。

川名　田中はもう出場権はある歳だろう？

田中　ええ、今年40ですから…。

川名　内田は…。

内田　僕はフケてみえるでしょうが、まだ38です！（笑）

橋本　平野も資格はあるだろう？　こ

おかみさんもまじって話に花が咲く

ういう世代の人間がもっと出て行けば勝てるし、おもしろくなる！

司会　はい…、これから月曜会に出て練習しようと思い始めてますが…。じゃあ、それも含めて、今後の月曜会について話を進めましょう。皆さんの思いとか、ほかのOBの方々への希望とかはどうでしょう？

川名　このなかで一番若い小川はどうかな？　話にどんどん参加していいんだから、何か思ってることがあるんじゃないの？

小川　いや、先輩方の話にはスキがなくてなかなかアタックのタイミングがとれないんですよ。僕は稲光会の会員としても月曜会のメンバーとしても新人並ですから、いろいろ勉強することばかりで、ハイ。できるだけこうした会には積極的に参加して行こうと思っています。若手OBにもそのことは伝えていきたいです。

吉田　若いのにいいこと言うね！　オレはもっとたくさんのOBに参加してもらいたいと言いたい。オレに勝てる自信のあるヤツは来い！　ってなもんですよ。オレはいつでも受けて立ってやると思ってるんですからね。

橋本　オイオイ、ずいぶん自信満々になっちゃった。だけど賞金でも付けなきゃ来ないよ。

田中　洋服一着タダってどうですか？

吉田　いいね、それ。だけどオレが勝ったら代金支払ってもらうよ！（爆笑）

内田　僕はやっぱり、OBになってもいつでも来られるために月曜会をつづけていくべきだと思ってます。毎週月曜にはだれかがいるってことは、大事ですよ。たとえば地方のOBにとっては、上京したときに月曜ならちょっと寄ってみようということにもなると思うんです。それと30代のOBにもっと参加してほしい。会社の仕事も最近は残業も少なくなってると思うし、若いOBなら、技術も現役に近いのでためになるはずですよ。

川名　そうだね。若手OBには実績のあるのがそろってるんだから、コーチ的な存在として参加してくれれば、もっとレベルアップする。これには期待したいね。

田中　月曜会ってタイムスリップできるようなところがおもしろい。現役のときと同じ先輩と20年たっても同じ感じでファイティングしてたりするんですから、不思議ですよ。

橋本　僕はやっぱり、もっと月曜会の存在をアピールしなきゃいけないと思います。30周年をきっかけにできたんだから、50周年ではさらに飛躍させないと。

金子　そうですね、50周年をまたいろいろな意味でスタートのきっかけにするのが、大切だと思っています。月曜会のメンバーに多くのOBが参加してくれるのを期待したいですね。

司会　えー、どうやら落ち着くところへ話が落ち着いたようです。皆さんのお話をうかがって、月曜会にはまだまだファイティング・スピリッツが充満していて、これからが楽しみになるのではないかと感じました。今日はほんとうにありがとうございました。

50周年に際して——稲光会幹事からのひと言

●北原輝久（幹事長）

稲光会が盛り上がってきたのは、いまから30年前、本道先輩が幹事長をお務めになられていたときだったと思います。その後で竹村先輩に代わられて、財政面の充実など3本の柱を打ち立て、うまく軌道に乗せられたわけです。2年くらい経ったころでしょうか。竹村先輩が突如辞任なさったので、私に出番がまわってきたのです。それ以来18年間、幹事長をやっていまして、金子会長などにはいろいろとご無理をお願いしてきました。

これからは、この50年という節目の年を稲光会の再スタートの年にして、会全体の若返りを図っていくべきだと思います。「50年史」の原稿の集まりを見ても、どうも昭和60年代卒、平成卒の若手の協力が足りないように感じました。これからは長老会というか、うるさい会を一つ作って、そっちはそっちで騒いで、若い人が中心になって稲光会をもり立てていくような体制にしていくことも必要でしょう。

あと、声を大にして申し上げたいのは、今回の50周年はぜひ全員参加でやりましょうということです。全員が幹事のつもりで式典に臨んでいただきたいですね。

●田高武彦

いま北原君が言ったように、確かにこのへんが一つの節目ではないかなと思います。稲光会を若返らせるためにも、決して悪い意味ではなく長老たちをコントロールしていく必要があるのではないかと。実際、今日の集まりにも、平野君はじめ若手のOBが来てくれて非常に良かったと思っています。今後、もっともっと若手に活躍してほしいですね。

●慶田浩一

私は卒業してすぐに地方へ行ってしまったので、ほとんど稲光会に顔を出すことがありませんでした。地方で7年間過ごして帰ってきたときに、ちょっと出たきりで、その後も仕事にかまけてすっかりご無沙汰していました。最近は比較的ひんぱんに出席していますので、今後もこの状態を継続していきたいと思っています。

●新井時男

私は学院のころからフェンシングをやっていたので、本道さんや川名さんに事あるごとにいろいろとやらされてきました。それで何となく現在までできてしまったという感じでしょうか。けれども「30年史」のころと比べると、いま会員も下の人のほうが数が多くなってきているわけです。ですから、今後は明確なかたちで下の人たちにバトンタッチしていったほうがいいと考えています。

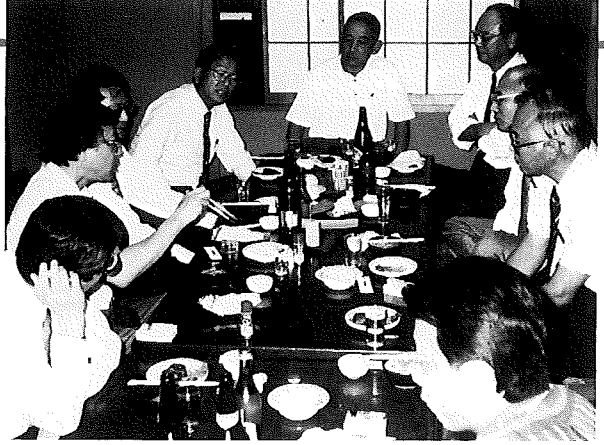
若い人が積極的にやっていかないと学生とのつながりもどんどん失われていくでしょうし、申し訳ないけれども、上の人は上の人同士でやっていかなくてはいけないのでしょうね。

●中村立雄

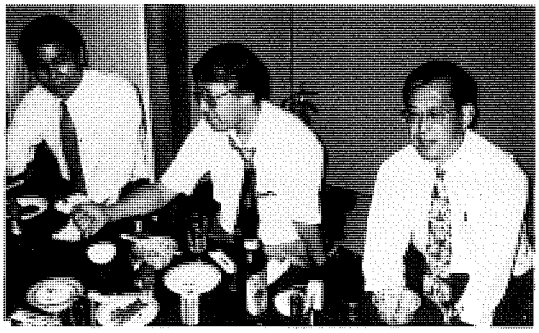
稲光会はよく一枚岩だと言われますが、それは本当に素晴らしい財産ですね。実際、OBの団結力ということで見ますと、稲光会にかなうところはないでしょう。その一枚岩を守り続けるためにも、先輩方には今後も稲光会を引っ張っていっていただきたいですね。

もう一つは、かつての名選手、例えば明治の新喜先輩、法政の小杉先輩などは、試合が電気になった現在でも、フェンシングに一生懸命に打ち込んでおられます。先輩方にしても、せっかく一時期は心血を注いでおられたわけですから、それをやめてしまうのはもったいないと思います。フェンシングライフを全うするということをもっとお考えになってもいいのではないかと。それが現役の励みにもなりますし、稲光会の発展にもつながると思います。

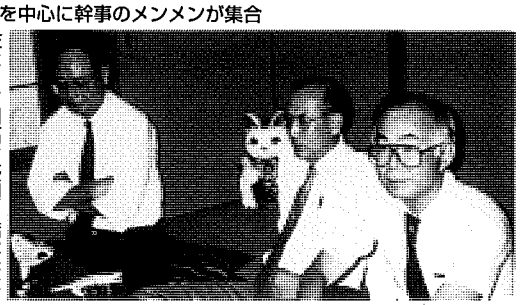
いまの現役部員にしても、大学を卒業したら関係ないよということではなくて、早稲田大学が好きなんだ、フェンシングが好きなんだという愛着を持



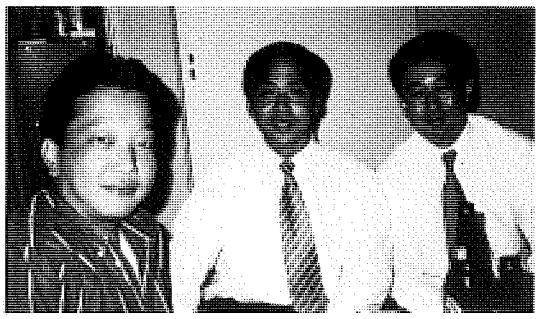
金子会長を中心に幹事のメンメンが集合



左より、中村、吉田、新井幹事



左より、田高、慶田、橋本幹事



左より、若手の白井、宮、内田幹事

った人になってほしいですね。

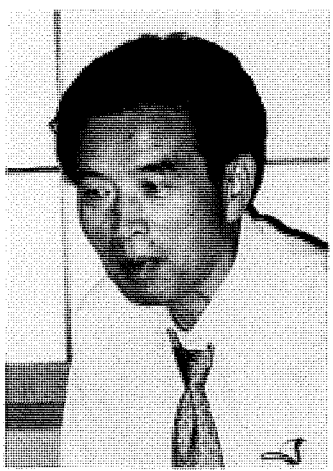
●成瀬正澄

月曜会が発足したのは、私が中村先輩のところへ挨拶へ行ったことがきっかけでした。ご無沙汰を詫びましたところ、「とにかく稽古しろ」とおっしゃられた。当時、仕事の関係から時間のやりくりが難しかったのですが、月曜日だけは何とか都合がつきそうでした。川名に相談してみると、「とにかく顔を出せよ、月曜でもいいから」と言われて、じゃあ月曜会をつくろうよということになったわけです。

ですから、初めのうちはちょくちょく顔を出していました。けれども剣を持つと動悸がするので、思うように力が出せない。練習の後にOB同士で飲みに行っても、高度成長期なのに私の会社は落ちていくばかりでしたから、不甲斐ない気持ちでいっぱいでした。

と言うのも、現役時代に川名とユニバーシアードに行ったときのこと、川名が「オレはフェンシングを続けるぞ」と言うので、私は「じゃあオレは会社をつくって儲けるから資金を援助するよ」と約束していたからです。なのに実際には満足な援助ができなかった。

中村立雄幹事



成瀬正澄幹事

けれども、私にとってフェンシングは一生涯の先生だったし、月曜会からは多くのことを学びました。これからも、どういうかたちにせよ、会を全面的にバックアップしていこうと考えています。

●宮　信雄

私は学院のときからフェンシングをやっていましたので、大学の先輩方の活躍ぶりは常々耳にしていました。なかでも森居先輩は神様のような存在で、オリンピックの最終選考会に残ったとか、関カレで決勝に残ったなどの輝かしい名声に触れていました。

当時私は理工学部に入って技術屋になろうという目標を持っていましたので、大学に入ってからフェンシングを続けようとは考えていませんでした。けれども森居先輩などに出会って、道を逸脱することになったわけです。結局、いまの仕事は技術屋ですが、もしフェンシングをやっていなければ出世はなかったでしょう（笑）。良い社会勉強ができたというか、広い視野で物事を考えられるようになった部分が大きいと思います。

最後に、学院生のころから川名先輩にはお世話になりっぱなしですが、まったくの不肖の弟子となってしまいました。川名先輩には足を向けて寝られません。

●白井　誠

私は中学生の頃に「30年史」を読んだことがあるんです。父が中大フェンシング部の出身ということもあって、家にあったわけです。早稲田のフェンシング部は歴史のあるところなんだと、中学生ながら思った記憶があります。

いま部員の数が多いようですが、私が現役の頃は一番人数が少なかったときでした。ある種フェンシング部が消滅するというような危機感があって、少ないなりにも力を合わせて一部復帰を目指していました。四年生のときも、リーグ戦で絶対に優勝するつもりで相当練習したものですが、明治に勝つことができなかった。勝ち数では同じで、トータルの被突きで数本差でした。あの試合でもう一本とっていたらと、皆でずいぶん悔しがりました。

五年生のときには三部に落ちる危険も乗り越えて、ちょうど私が卒業した年に救世主のような感じで鈴村が入ってきて一部復帰を果たしたのです。

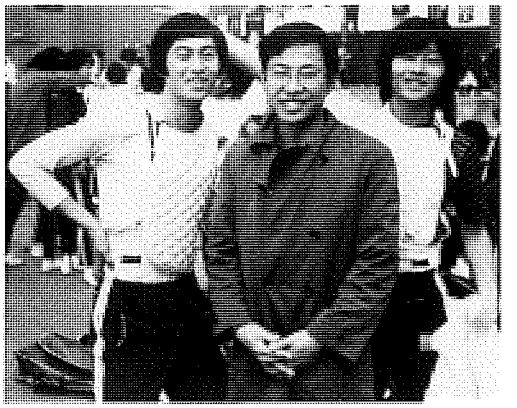
少ない部員数にもかかわらず一部リーグで奮戦！52年、張インカレ・エペ個人で優勝の快挙！

50年菅平合宿。左・大川、右・平野の両氏

50年、菅平での夏合宿
中日恒例のハイキング

合宿最終日の打ち上げ

50年インカレ、フルーレ団体戦

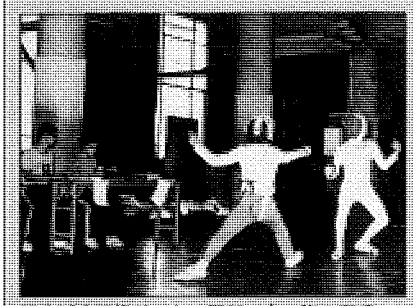


50年インカレ。左より、田中、赤井、平野の各氏

50年12月、早慶戦。前年負けていただけにこの年は奮戦して勝つ

昭和50年～54年

1976年 フェンシング部 30周年記念

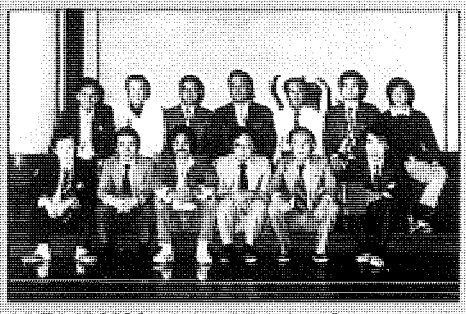


記念試合模様。左・平野、右・張の両氏

OB戦出場の面々。左より荻野、本木、佐藤の各氏

30周年記念パーティー後、大講義室にて

パーティーでの中村、金子の両氏

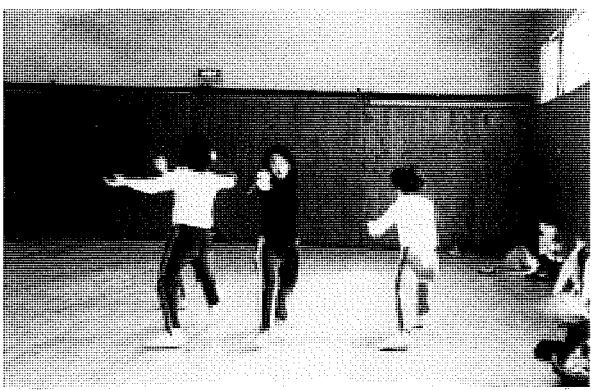


30周年記念試合のときのOBスナップ

51年12月、早慶戦は前年に続いて2連勝する

51年の夏合宿。手前は宮氏

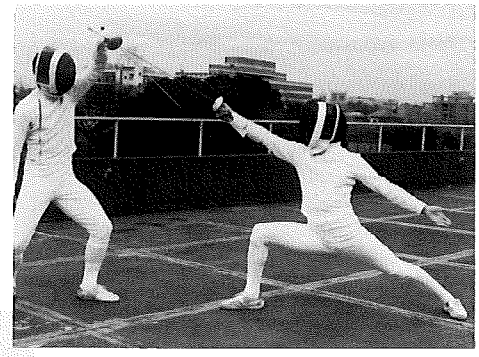
52年、送別試合のあと体育局前にて



51年夏合宿で久々の1000本ファンデブー復活

新体育館に専用道場が誕生し、練習にも熱が入る。そして、59年には5年ぶりに念願の一部復帰を果たす！

55年の軽井沢合宿
本道氏を迎えて



55年、体育局の屋上にて。左・原田、右・武市氏

56年、卒業前のスナップ
体育局の屋上にて

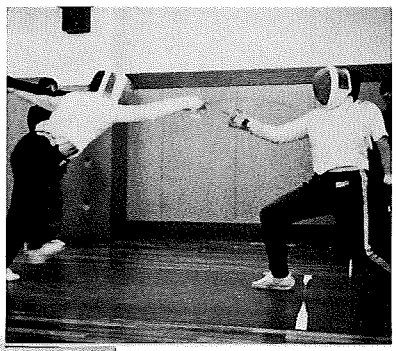
56年、インカレ・エペ
個人で遠藤選手が優勝

56年の新道場開き

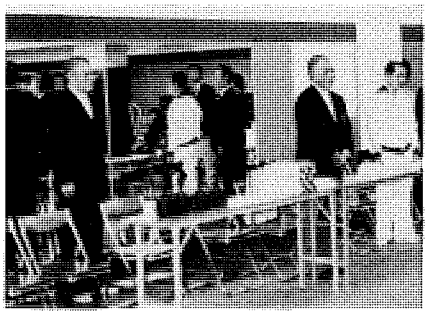
新道場開きでの戸谷部長(右)と平前部長

57年ベテラン選手権復活
選手宣誓をする成瀬監督

パーティーでの
堀(左)、伊藤氏



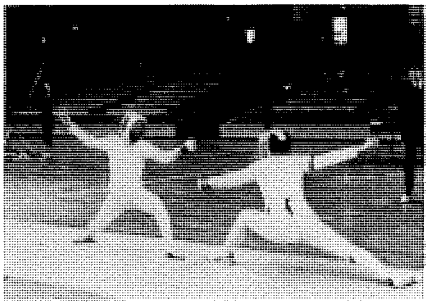
57年稲光会パーティー
での成瀬監督(左)と越
会員の熱戦サーブル



ベテラン選手権での滝口大会名誉会長(左)

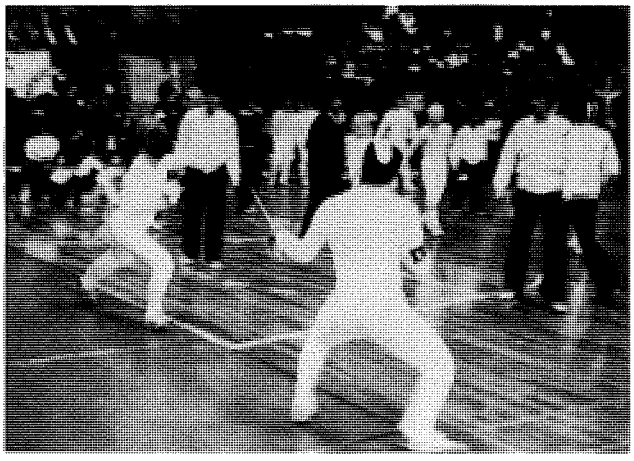
紅白戦で滝口杯を授与

昭和55年～59年



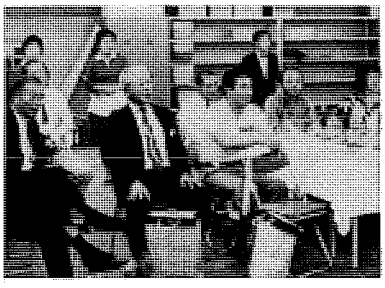
58年早慶戦のエペ

早慶戦での早大ベンチ



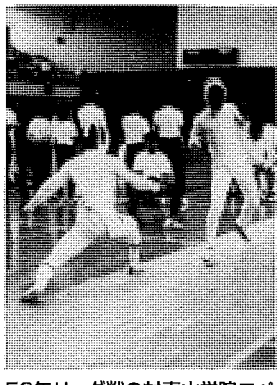
苦戦を強いられた58年のリーグ戦

パーティーでの若手ＯＢたち

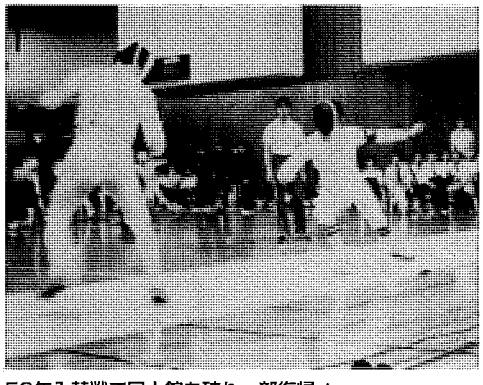


58年パーティーにて

59年の４戦士。左から安東、鈴村、帆刈、寺田



59年リーグ戦の対青山学院エペ



59年入替戦で国士館を破り一部復帰！

59年パーティーでの滝口先生（左）と戸谷部長

59年10月10日の橋本（左）、吉田両氏の熱戦

59年リーグ戦二部優勝のベンチ

1975〜1984（昭和50年度〜59年度）

●赤井平二（50年度・主将）
エネルギー全開だった入替戦

創部50周年おめでとうございます。

私もフェンシング部のOBとして創部50年を迎えることができ、とても光栄で、現役時代の頃の様子がなつかしく思い出されます。

私の現役時代の頃の部は、リーグ一部ではありましたが人数も少なく、記憶するところでは私が二年の時、四年に大川先輩、同期で三戸さん、一年に平野君、鬼頭君、一年生が4〜5人と合わせて10名程度の部で、リーグ戦のメンバー編成にも困ったものでした。当時は、ほとんどの部員が3種目を練習していました。

今では部員数も増え、実力のある新入生が入って来ていることを聞き、私の現役時代と比べてうらやましく思います。部員が多いということは、技術面から見ても部のレベルアップにつながりますが、学生時代に多くの友人を作れることになるわけですから、現役の諸君には、フェンシング部での鍛練とともに学生時代を大いにエンジョイしてもらいたいと思います。

私の現役時代の頃は、先程述べました様に人数は少なかったのですが、先輩達の御努力でなんとか一部リーグに残っており、私の入部してからの目標も、自分が卒業するまでは絶対二部に落ちたくない、落とさないというものでした。入部4年間の内、入替戦をまぬかれたのは、二年の時だけで、他の年は、今年こそ卓稲田を倒し、一部昇格をと、意気揚がる二部優勝校との入替戦で、今思うと私の学生時代のエネルギーは、この入替戦での勝利だけに向けられていた様な気がします。

それだけに社会人になっても学生時代の印象、特にフェンシング部でお世話になった川名監督はじめ諸先輩、後輩諸君の顔がなつかしく思い出されます。フェンシング部でお世話になった経験が、社会人になってからの自分に生かされている気が致し、自分にとって大学4年間が有意義でありました。

私事になりますが、この7月末より、中東のサウジアラビア・ダンマン（アラビア湾に面するサウジ第3の都市、ダーラン空港の近く）に駐在することとなりました。10年前のアフリカ赤道直下のガボンに次いで2度目の駐在となります。（なんで何度も環境の厳しい所に行かねばならないのかと、会社に文句の一つも言いたいところですが……）。アフリカより戻った後は、大阪転勤となり部の方に顔を出す事ができず残念に思っておりましたが、また3年間は顔を出すことができなくなりました。

諸先輩、後輩諸君の御活躍を楽しみにしております。

●平野健一（51年度・主将）
〝災い〟と〝幸い〟は紙一重

24年前の4月、体育実技抽選・フェンシングの列に並んでいた僕は、残念ながらハズレ玉を出してしまった。フェンシングというスポーツは出身高校にも部として存在していたため、ある程度は知っていたものの、経験したことは全くなかった。

大学に入ったら、何がスポーツをやろう、そう思っていたのだが、なかなかフンギリがつかない。このハズレ玉が出たときに手渡された、一枚の黄色いチラシが、そのキッカケとなった。あのチラシは、多分、赤井先輩が配っていたものだと思っている。記憶ではフェンシングのイメージとはかなり違って、やけに腕や指の太い人から手渡された気がするのだが……。

あのハズレ玉と勧誘チラシをもらったことが、その後の〝災い〟、いや〝幸い〟の始まりだったとつくづく思う。

入部してからは、初心者であったから当然なのだが、ハードなサーキットトレーニングやフットワークレッスンに、もうヘドが出そうな毎日。結果、夏合宿を迎える頃には、新入部員はたったの3人になってしまった。この部員不足が、結局、卒業するまでついて回った〝災い〟の元なのだった。

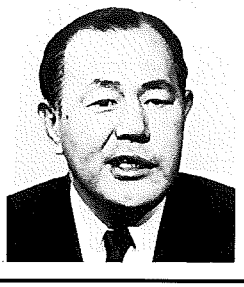
各学年がひとりかふたり、全員集合しても6〜7人というメンバーでは、一部リーグで戦うレベルではない。しかも、ほとんどが僕と同様、未経験者ときては、いわずもがなである。人がいない、経験がない、時間がない、のないない尽くしの4年間は、それこそゲリラ戦の様相を呈していた。

現在の30人近い部員数と聞くと、ため息が出るほどだ。しかし、この〝災い〟は、実は僕にとっては、〝幸い〟でもあった。人数が少ないということはそれだけ、レギュラーになれる率も高いということ。勝っても負けても、ともかくレギュラーとして試合に出られることは最もうれしいことなのだ。

結局、初心者にもかかわらず、一年生からレギュラーになれ、四年では3種目の全試合に出場できるという〝幸運〟に恵まれたのだった。戦績はパッとしたものではなかったが、ともかく入替戦も含めれば、かなり多くの試合に出場できたことは確かである。

望んだわけではないが、常に逆境にあることで、精神的にも肉体的にも思わぬ強さが身についた4年間は、その後の僕の考え方にも大きな影響を与えてくれたようだ。何があっても、あわてず、騒がず、あきらめなければ、そのうち何とかなるという、実に楽観的な考え方は今後も変わりそうにない。

卒業して4年目。坂本先輩から呼び出された。「実は、オレは肝臓が悪くて、入院する」「はあ……」「で、頼みがある」と手渡されたのが、稲光会報の原稿と写真が入った紙袋だった。出版社へ就職したことから、気軽に「分かりま



●第21回モントリオールオリンピックで、女子体操ルーマニアのコマネチ選手が10点満点を連発。

●ソ連の最新鋭戦闘機ミグ25が北海道函館空港へ強行着陸。乗っていた極東空軍のビクトル・イワノビッチ・ベレンコ中尉はアメリカ

1975〜1984 出来事

1975年

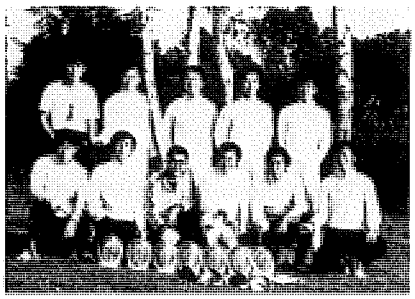
●サイゴン陥落、30年にわたるベトナム戦争が終結する。

●プロ野球セ・リーグで広島東洋カープが初優勝し、赤ヘル・ブームを巻き起こす。

1976年

●ロッキード社の航空機売り込み工作が発覚、日本政界はロッキード事件で騒然となり、田中角栄前首相の逮捕に発展する。

●鬼頭朋近（51年度）
栄光の六角形と執念の一本


1973年の夏合宿は総員たったの11名だった

入替戦、いれかえ戦、寝ても覚めても入替戦……当時はそれしか頭になかった。我々は入替戦のために練習をしているのではないという先輩の叱咤激励をよそに、目標を一部残留をかけたそこに置かざるをえなかった事情。私が二年生になる直前の春、リーグ戦を前にした部員の質の前に立ちはだかる数の事情。三年生・大川先輩ひとり、二年生・赤井先輩、三言先輩の2人、一年生・平野、有沢、私と合計6人。しかも高校からの経験者は大川先輩のみ。普通ウォーミングアップはサークル状になると思うが、我々には角ができる。2、3人休もうものなら、たちまち四角形、三角形になる。

新一年生に経験者の張、宮が入部してきて、はなから即戦力と甘ざるを得なかった苦しい星計算。入替戦前日、「源兵衛」で酒で盃を交し、覚悟を決めての出陣も今ではいい緊張感を味わったと思う。

入替戦当日、相手は全日本級2人（松橋、戸嶋）をかかえるエリート集団〝拓大〟。二部楽勝の自信をひっさげて、我々初心者群団に向かってくるに違いない。フルーレ負け、サーブル勝ち、エペ最後の16試合目、大川先輩が4―4で迎えたアンコールユヌミニュット。両ベンチとも絶叫マシンと化した中で、マスクを取り天を仰ぎ長い溜め息をつく。青ざめた顔面に悲壮感はない、ただポアンにかけた執念のみ。

……点いた、青ランプ。勝った。沸き上がるベンチと自然に抱き合う猛者達。被突数差〝一本〟の薄氷を踏むような勝利であった。

会社を休んでまで応援に来ていただいた大勢の先輩に感謝！

ただ、一度とこんな試合はしたくねぇーと思った。しかし、その翌年もまた入替戦だった。

となって生き続けています。

当時の部員全員がそうである様に、川名監督には道場でしごかれては酒席で励まされ、感謝にたえません。その川名監督の知られざる事となった、私が大失態を演じた苦い思い出を最後に紹介させていただきます。

それは四年生最後のリーグ戦での出来事でした。入替戦をめぐって早慶両校の争いの中、負ければ入替戦出場もあり得るという対宿敵・慶応戦で、何と私が大遅刻をしてしまったのです。試合会場に着くまでの混乱は大変なものであったと思われますが、何とか同輩の宮が学連や慶応側に働きかけてくれ、開始時刻を一時間近く遅らせてスタートしたものの、ウォームアップもせずに臨んだ初戦で負けてしまい、もう頭の中はパニック状態。その後、宮や後輩たちが頑張ってくれて勝利を得、入替戦の危機を脱出できたのです。普段ならお見えになられる川名監督もこの日に限ってはお見えにならず、監督の知られざる出来事となり事無きを得たのですが、その試合後の安堵感は口では言い表わせないものでした。

卒業後、私は母国である韓国に渡り、経済急成長中の荒波の中、商社マン生活を勤めましたが、フェンシング部で培った体力、経験、そして精神力が大いに役立ちました。日本に帰国し会社勤めから現在の商売（家業の焼肉屋）に移ってのこの10年間というものは、昼から夜への生活の逆転と寄る年波に勝てず、道場へはすっかりご無沙汰しております事をお詫び申し上げます。又、稲光会の一員として記念行事のお手伝いも何も出来ず、重ね重ねお詫び申し上げます。部の更なる発展をお祈り致しております。

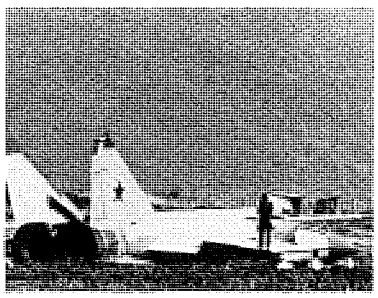
●張　守栄（52年度・主将）
大失態を演じた苦い思い出

創部50周年を迎え、改めて歳月の流れの早さを実感しております。私が三年生の時、30周年の記念行事が大隈会館で催され、多くの諸先輩方が一堂に会された事がとても懐かしく思い出されます。

あれから20年の歳月が流れ、私も白髪が目立つ40代になってしまいました。この原稿を書くにあたり、さて何を書いていいのやら思案のあげく、当時の写真を取りだし、一枚一枚感触を確かめながらしばしの間思い出に耽ってしまいました。断片的でしかなかった記憶も時と共に一つ一つつながりを持ちはじめ、遠き青春の日々を鮮明によみがえらせてくれました。

入部早々の新人部員歓迎会では、宴がはじまってまもなくダウン。今でいう急性アルコール中毒でしょうか。目覚めてみると三言先輩の下宿で朝を迎えていました。そして又、入部早々の入替戦。フルーレで負けサーブルで勝ち、3種目めのエペも最終試合にまでもつれ込む絶体絶命の状況から、大川先輩の気力の一突きによって一部残留が決まった瞬間の、現役、OB入り交っての興奮、そしてその感激は生涯忘れる事の出来ないものであります。

夏合宿での苦しかった思い出も、秋の早慶戦、毎年の京都遠征（立命定期戦、全日本学生選手権）、そして納会でのどんちゃん騒ぎも、その瞬間を共有した諸先輩、同輩、そして後輩たちとのふれあい語らいが今も私の心の糧



への亡命を希望し、認められる。

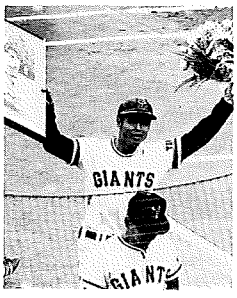
●ダウンベスト、ダウンジャケットなどヘビーデューティ・ファッションが流行。また、コインランドリーも急速に増加する。

1977年

●アメリカの若者文化の情報を伝える雑誌「ポパイ」が創刊され、アメリカン・スポーツ・ファッションが流行する。

●ジョージ・ルーカス監督の宇宙映画「スター・ウォーズ」が「ジョーズ」の配給収入を抜き、大ヒットする。

●巨人軍の王貞治が、対ヤクルト23回戦で通算756号のホームランを打ち、ハンク・アーロンの持つ世界記録を塗り変える。この記録で王選手は国民栄誉賞を受ける。



1975〜1984（昭和50年度〜59年度）2

●小幡　恵（53年度）
自由さとノー天気を忘れずに

な、なんとこのたび「フェンシング部が50周年」と聞き、ガクゼンとした次第です。だって、現役のときに「30周年」とかいうものが（失礼）あって、それからなんで20年もたつわけ？

私が現役のころは、練習前の準備体操をしようと「は〜い、丸くなって〜」と言ったところが、丸くなるどころか、四角、ヘタをすると三角にしかならないというありさまで、さらに悲惨な場合は、単なる「ご対面」となり、その場合は、「神宮行って野球でも見るか……」というような、とても体育局の運動部とは思えないような状況がしばしば見受けられたものでした。それでよくもまあ、毎年の入替戦とはいえ、一部に引っかかっていられたものだと、あらためて感じています。

しかし、あの意味あったんだかなかったんだかよくわからない1000本ファンデブーにつき合い、納会でタケシ先輩にからまれ、四年になってまで下級生のパンツを洗濯してやり、金を貸し、「ふるさと」で春り、家に呼んで飯を食わせ、（私に似て美人の母は面白がっていましたが）、あげく男と間違われ、まあ、そのおかげで、（というのか、そのせい、というのか）「ホントは女子はダメ」という今はなき甘泉寮の合宿にも参加させていただきました。

甘泉寮というのは、甘泉園のすぐそばにあった、「合宿所」というのもおこがましいような、もうぶっ倒れそうな、ただの2階建ての家でした。（ここら、現役、そんなもん知らないだろ！まあ、知らなくてよかったとも思いますが）。知らない方のために念のため説明いたしますと、「合宿所」といいながら、風呂がない！　さらに、経費の節減からか、朝食しか出ない！　さらに私がたまげたのは、裸電球ぶらさがる部屋の押入れから布団を出そうとして、ふと見てしまった底に敷いてある百新聞です。その見出しには「日支関係悪化」／／／　改めて申し上げますが、それはキャンディーズやピンクレディがもう活躍していた、1980年頃の話です。

しようがないから、昼と夜はそこらで食べて、銭湯行って（松ノ湯か安兵衛湯だったな）、洗濯はその横にあったコインランドリー。私がやったんだぞ！　全員分／／／　それを哀れんだ銭湯のオバチャンが、粉石鹸を恵んでくれたこともあったのでした。

最後まで、団体戦を知ることなく、女子とファイティングをすることもなく、個人戦の3回戦だかにすすめたのが私のフェンシングの「実力」でした。

実力のない割に、あほらしい思い出は山のようにあるのですが、これは残念ながら、卒業してから、週刊誌やら月刊誌やらのただむだに忙しいだけの仕事を続けている私にとって大切な思い出でもあります。時代が変わればルールも変わるし人数も変わるし、学生気質も変わるでしょうが、強かろうと弱かろうと、早稲田大学フェンシング部の自由で、ノー天気な「伝統」を大事にしてください。

●森　隆（54年度・主将）
時の経過の早さを実感する

大隈庭園で30周年を祝ったのは私たちが一年生の時でした。あれからもう20年経つのかと思うと時の経過の早さを実感せざるを得ません。

私たちの学年は、頭脳明晰な法学部の井上と九州男児で文学部の野田、そして教育学部の私と異質な個性を持つ三人でした。

高校時代にフェンシングをかじったことのある私と井上は、川名監督の薫陶と「弁当」の魅力によって部を続けたのですが、初心者の野田はよく最後まで続いたと思います。「野田君、それじゃだめよ」と鬼のようにしごいてくれた先輩の小幡女史のおかげだったのかも知れません。

あのころは本当によく練習しました。初心者の多い我が部は練習量を多くするしかありません。他校が休みとなるリーグ戦後も夏休みまで練習を続けました。冬には戸山町から早稲田駅へとぐるっと走ってきてから練習したものです。

空が暗くなる頃、穴八幡から文学部の前を通り体育局4階の道場へ通うのが私たちの日課でした。ちょっと薄暗く、大雨が降ると水浸しになる部室、隣の部室の応援団の声、練習場でのボクシング部等なつかしく思い出されます。

練習後によく寄ったディリークイーンや中華料理屋、練習に来ない後輩を捜しに行ったパチンコ屋はまだあるのでしょうか。

大学時代を語るときにどうしても避けて通れないのがリーグ戦です。一、二年の時に入替戦を経験した私たちの代は、四年生の時には上位入賞を目指していました。

部員は少ないながら、後輩の武市を含めて力をつけてきたこと、新入生に高校総体サーブル優勝の春日とエペ二位の遠藤がいたことなどから期待できると思われました。

直前の合宿までして臨んだリーグ戦でしたが、初戦の専大戦を7−9で落とすと、そのあとはなかなか勝てません。これには試合前に下級生の体調不調を見抜けなかった私の責任でした。悪いことは重なるもので期待していた遠藤は直前に手首を傷め出場出来ず、春日も試合中に怪我をしてしまうなどと誤算続きでした。

それでも、フルーレ最終戦で日大に勝つと、サーブル第一戦でも日大に連

1978年
●プロゴルファーの青木功が、ロンドンで行われた世界マッチプレー選手権で優勝する。

1979年
●アメリカのスリーマイル島の原子力発電所で大量の放射能漏れ事故が発生する。
●東京で第1回国際女子マラソン大会が開催される。優勝はイギリスのジョイス・スミス。これ以後女子マラソンの人気が上昇する。
●イギリスに初の女性首相が誕生する。総選挙で圧勝した保守党の党首マーガレット・サッチャーが首相に就任する。

1980年
●ポーランドにレフ・ワレサを委員長とする自主管理労組「連帯」が誕生する。
●アメリカの無人惑星探査機「ボイジャー1号」が土星に接近して土星の輪や衛星を観測する。
●元ビートルズのジョン・レノンが射殺される。

勝し、最下位は日大と争うことになりました。結局、エペ最終戦での決着にもつれ込んでしまった。

下級生中心にメンバーを入れ替えて勝負にでていた日大に対して、接戦に持ち込んだのですが届きません。他校が日大に負けたため、結局は最下位となってしまいました。

入替戦の事は、もちろん覚えていますが、あまり触れたくありません。何としても踏ん張る覚悟で臨んだものの、国士館に破れ、思いもしなかった二部陥落となってしまったことは思い出すだびにやしさが残ります。あと一勝出来ていれば20年後の今でも思い出します。川名監督、本当に申し訳ありませんでした。

同時代を共有してくださった先輩・後輩の方々に感謝するとともに、現役の活躍を期待しています。

●武市　聖（55年度・主将）
男の意地を賭けた一年

昭和54年リーグ戦、総合で一部最下位となり、国士館との入替戦となった。試合を大きく左右する一種目のフルーレは一進一退。そして迎えた、最終試合のビストに上ったのは、当時二年生の私だった。

勝てば8勝8敗となり被突数差で早稲田勝利というこの試合。序盤は優勢だったが、途中「左手で有効面を隠した」と国士側から強いクレームが入り気持ちが動転、リズムを失ったまま一本勝負に持ち込まれ、負けてしまった（結局、このフルーレの敗北が尾を引き入替戦を落とす）。

「先輩達が守り続けた一部の座を私のせいで失ったのではないか……」

その思いが私の脳裏から離れず、意地でも一部に返り咲くんだという強い思いにかられた。

翌日、同期の原田、山田、宮下と共に髪を丸坊主にして再出発。猛練習に明け暮れた。すでに伝説化していた「1000本ファンデブー」を復活。瀬田、TFS、警視庁等へ出稽古。そして一番思い出深いのが、その頃学生ナンバーワンの中大と秋田で合同合宿をした事。練習の内容は全て中大任せという厳しいもので、よく下級生がついてきてくれたとつくづく思う。

こうして人事を尽くし翌年の関東リーグ戦に望んだ。結果はフルーレが3位、サーブル優勝、エペ3位、総合で2位に終わった。夢は果たす事が出来なかったのだ……。

社会人となって15年が経つが、今も変わらず私と同様、目標に向って若き血を燃やす後輩達がいる。そして母校に剣が交差する音が響く度に、あの頃の自分を思い出す。

私自身、今言える事は、たとえ結果がどうであれ少しも悔いていないという事だ。

一つの敗戦が契機となり、何かに取りつかれた様に、汚名返上に燃えたラストの一年間。同期や下級生が、私を支え、後にしっかり付いてきてくれた喜びは、今も私の心に強く刻まれて消える事はない。

●原田　充（55年度）

当時、学院の三年生だった時に発行された30年史を久し振りに読んだ。

大先輩方の輝かしい戦績、きわどい勝負での勝利が綴られている。また、最近でもリーグこそ二部であるが、後輩のオリンピック出場など個人の活躍は目覚ましい。

では自分の現役時代はどうであったか。残念ながら誇れるような成績はない。苦い想い出としては、三年での二部リーグ転落と、四年で二部リーグ優勝ができなかったことである。特に四年で、慶応の入交君とのフルーレ、エペ両方での負けは、一部優勝できなかった直接原因であり、私にとって今でも胸が痛む。

五木ひろしに似た武市。ラグビー出身で芸達者な宮下。ただ一人国際試合経験のある山田。短い4年間であったが彼ら三人と同じ釜の飯を食い、前後には、これまた個性豊かな先輩、後輩がたくさんいた。

インカレ・定期戦・合宿・リーグ戦など、成績のことを除けば思い出してもまた楽しく、懐かしい。

●内田　敏朗（56年度・主将）
フェンシング部出身であること

フェンシングという競技を「見たことも無い」と言う人が結構多い。しかもアメリカでの話である。欧州系民族がマジョリティの国でさえ、フェンシングはマイナースポーツのようである。本場ヨーロッパではいかがであろうか。

日本では言うまでもなくマイナースポーツであるが、しかしそんなフェンシングというスポーツに燃える青春のひとときを持てたことは、OB諸兄にとって良き思い出であろうし、大きな自信であろうとも思う。私にとっても同様である。決して自慢するわけではない。学生時代、勝ちたくて、昼も夜もフェンシングの事を考えていた。勉強は二の次だった。試合に勝とうと思えば楽なスポーツなんてあるわけはない。人よりも努力しなくてはいけないとも考えていた。しかし一方では甘えの心もあり、またセンスも無かったが故に称賛されるべき結果は何も得る事はできなかった。

「学生時代は大学が認めた正規の運動部たるフェンシング部に所属していた」と言ってもピンと来てくれる人は少ない。どころか広く認知されていないスポーツ故、「楽なスポーツをして、楽しい学生生活を和気藹々と過ごしていたのだろう」などと思われるのが関の山であろう。「自慢するわけではないが、自信を持つ」には、このくらいで丁度良いのかもしれない。一抹の寂しさも感じるが…。そんなフェンシングになぜあれほど燃えることができたのであろうか。試合に勝ったからと言って、なんら報酬を得る事ができたわけではない。純粋に、ただひたすらに

1981年

●アメリカのスペースシャトル・コロンビア号が初飛行に成功。宇宙開発は実用化の時代へ入る。

●瀬古利彦がニュージーランドで2万5000、3万メートルで世界新記録を樹立する。

●福井謙一京大教授が、フロンティア電子理論によりノーベル化学賞を受賞。日本人6人目の快挙。

●歌では「ルビーの指輪」、本では「窓ぎわのトットちゃん」「なんとなく、クリスタル」が人気に。

●大相撲・大関の千代の富士が横綱昇進。小がらながら圧倒的な強さを誇るウルフ人気が爆発する。

●アメリカでテレビ映画「将軍」が話題を呼び、出演した島田陽子がゴールデン・グローブ賞を受賞。

●ノーパン喫茶やビニ本など、新手の性風俗が登場し産業化する。

●国民的アイドル歌手の山口百恵が芸能界から引退する。

アマチュアであった。

私と同期の昭和56年度卒業には、富山泰勇（副将）と横須賀秀人（学連）の二人がおり、彼等とは共に苦しみと喜びを分ち合った者だけがわかりあえる信頼関係にあると信じている。そんな仲間を得ることもできた。決して華々しい学生生活を送ったわけではないし、早稲田大学フェンシング部出身である事を人から羨まれるわけでもない。しかし私たちが今にしてかけがえのない学生時代を精一杯すごしてきたことを誇りに思い、多くの人々が学べなかったことを学び、信頼できる仲間を得られたのは、早稲田大学フェンシング部のおかげである。

その早稲田大学フェンシング部が、無事50周年を迎える事ができことは各方面の多くの方々のご支援があったからこそである。心から感謝したい。

『集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光』の歌の通り、部員たちはこれからもどんどん変わっていくであろうが、早稲田大学フェンシング部が今後もますます発展し、次は100周年を迎えられる事を祈念している。

なお、月曜会は今も継続しています。OBの皆様、運動不足でせりだした腹を引っ込ませるべく、気軽にお顔を出してみませんか？ 無料です。練習後の風呂とビールもあります。

●春日龍二（57年度・主将）
一勝の重み、一本の重み

最近、道場や納会などに顔を出すと、まず驚くことは部員の数である。聞くところによると30名近くもいるとの事……。しかも女子が8名（？）もいるらしい。我々の頃はというと、特に三年生の夏合宿の時は、何と三年生6名、二年生0名、一年生1名のたった7名であった。普通、三年生と言えば、合宿の時は天国（もちろん練習は地獄だが）のハズであるが、食事の仕度、練習場の清掃、後片付けも我々三年生もやらざるを得ない状況であった。それを思うと、現在の状況はうらやましい限りである。

ただし少人数のお陰もあり、川名監督にミッチリしぼられたので、秋には、その成果があらわれた。インカレに個人で、私がフルーレとサーブルで、遠藤総一君（理工・新潟高出）がエペで出場し、張先輩（52年度卒）以来のチャンピオンに輝いた。さらにフルーレ団体でも準々決勝で、その年一部リーグの3位であった専修大学を明代止美君（教育・能生南高出）、川端宏行君（社学・沼田高出）、私の3人で、つまり3—0で破りベスト4に進出した。もうお祭り騒ぎであった。翌年もシードのため、2年連続4位という成績を残せた。ここ20年間ではインカレにおける最高の成績ではないかと自負している（最近女子が王座をとったとか）。

うれしかったことばかりではない。今でも悔しくて忘れられないのが、四年生の時のリーグ戦である。我々が入学した時は一部リーグだったが、すぐのリーグ戦で最下位、そして二部転落。それから3年たち今年こそは一部で優勝、そして一部最下位になるであろう慶応を破って一部復帰をと誰もが思っていた。またその自信もあった。

ところが、初戦の対明治戦で思わぬアクシデントが起き、痛い1敗を喫してしまったのである。その後は日体、立教、青学を破り、3勝1敗。最終戦それまで全勝の国士舘と雌雄を決することになった。当時のリーグ戦は今と違い4人対4人の総当りで9勝すれば勝ち。又、3種目の総合成績1位の大学のみが入替戦に出場できたのである。各種目の1位には7点、2位5点、3位4点……という具合にポイントが決められており、2種目1位になれば、総合優勝がかなり濃厚になるのであった。サーブルは早稲田が、エペは国士舘が有利と言われていただけに、何としてもフルーレは1位にならなければならなかったのである。

そして最終戦、10勝6敗以上で勝てば勝ち数で1勝上まわり逆転できることがわかっていた。15試合目を終わった段階で9勝6敗—。試合自体は勝ちが決まっていたが何と言ってもあと1勝。ラストは明代君。試合はもつれとうとう4—4のタイスコアに。明代が仕掛けた。相手が合わせた。誰もがその瞬間「勝った！」と思った。全員がベンチで立ち上がり、バンザイをした。ふと見るとランプがついていなかった。まさに天国から地獄のような心境だった。

今でもそのシーンは目に焼きついている。この試合だけではない。どこかで誰かがあと1勝していれば……。1勝の重み、1本の重みを感じた。

今あの頃を振り返ってみるとまだまだいろいろな事が浮かんでくるが、ひとつ言えることはみんなひたむきであった。白井誠君（商・学院出）や園田陽一君（理工・千葉商高出）といった初心者達も「絶対レギュラーとってやるぞ」と意欲満々で、それが全体的な向上につながったのではないかと思う。

今私は千葉で教師をするかたわらフェンシングにかかわり続けているが、その原点はやはりあの大学の4年間にあったのではないかと思う。

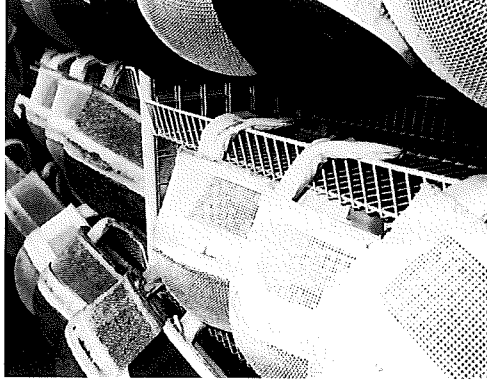
●白井　誠（58年度・主将）
貴重な5年間のリーグ戦

昭和54年の4月中旬に体育局4階ホールを訪ね、フェンシング部に入部し、春日、遠藤、川端、明代と一緒に中央区立体育館で二部転落を経験するところから、私のフェンシング部生活は始まりました。

1982年
●フォークランド紛争が起こる。アルゼンチン軍がその領有権をめぐってイギリスと係争中のフォークランド諸島に上陸するが、英軍の勝利に終わる。
●日本航空のDC8が東京湾に墜落、乗客24人が死亡。心身症の機長がエンジンを逆噴射させたのが原因と判明し、日航の健康管理が問題化する。

●スティーブン・スピルバーグ監督の映画「E.T.」が配給収入2億1000万ドルの大ヒットとなる。

1983年
●フィリピンで反マルコス派のアキノ元上院議員が暗殺される。これをきっかけに反政府運動が活発化する。
●任天堂が発売したファミリー・コンピューター、通称ファミコンが爆発的な人気を集める。'85年には4世帯に1台の所有となる。
●イタリア、イギリスに続いて、日本でも公衆電話にテレホンカードが登場する。
●アンカレッジからソウルに向かっていた大韓航空007便のボー



二年の夏合宿後に体育のフェンシング実技を取っていた園田をスカウトして同期が6人になり、一致団結して仲良く練習や飲み会をしたことを思い出します。

二年のリーグ戦には部としてはある程度の自信をもって臨みましたが、残念ながら優勝することができず、一年後のラストチャンスを逃すまいと心に誓ったものです。と気がつくと3名ほどいたはずの下級生が一人残らず辞めてしまい、四年生を除くと部員は同期6人だけになっていました。

三年になっても道場の掃除、合宿での食事の用意などをする時期が続いたときにふと「6人のうち一人か二人でも一年あとに入学すれば良かったのにな〜」という思いがよぎったのは私だけだったでしょうか……。

そんな時期に救世主のように現れたのが山口県出身の一年生、寺田君でした。

寺田君に辞められては困るということで、来る日も来る日も早稲田のデイリークイーンでコーヒーゼリーやハンバーガー等で彼を接待した記憶があります。

その甲斐あって寺田君も4年間無事フェンシング部生活を全うしただけでなく、悲願の一部昇格や個人戦でのインカレ上位入賞など数々の偉業を成し遂げてくれました。

彼を接待し続けた者の一人として非常に嬉しく思っています。

また、この時の経験は後の私のビジネスマン生活に大変役立っているということをこの場を借りてご報告させていただきます。

その後四年になるころにはなんとか二年生5人と一年生3人を確保し部としての体裁は保つことができました。

万全の準備をして臨んだはずの四年生のリーグ戦でしたが、またもや優勝に手は届かず、二部残留が決まりました。ということは……寺田以下の8人を中心に来年のリーグ戦を戦う。8人のうち高校時代のフェンシング経験者は安東ただ一人。最悪のケースでは、三部との入替戦もあり得る。関係者皆が、そう思ったはずです。約一名を除いて……。

彼は以前にふと「6人のうち一人か二人でも……」という思いをよぎらせた四年生6人の中にいました。彼はある事情で二年の時点で自分の大学生活を5年間にすることを決めていました。しかも彼はフェンシングを大学から始めた為、選手登録の期間も丁度あと一年間残っていました。そしてちょうどフェンシングが楽しくなりはじめたところだったのです。12月の納会の2次会を終えた高田馬場のホームで、川名さんからぽつりと「来年もやってくれるな」という有り難いひと言をいただきました。

という訳で私は5年目のリーグ戦にも出場させていただき、何とか二部最下位にならずに済ませることができました。春の練習からリーグ戦終了までは短い期間でしたが、本当に私にとって貴重な経験になりました。一年から五年まで二部という選手生活でしたが、卒業してすぐに一部に昇格したときには、自分のことのように喜んでしまいました。

もちろん、その時のキャプテンの寺田君を大接待したことは言うまでもありません。

●寺田　洋（59年度・主将）
念願の一部復帰を達成

不名誉な記録――対立命館定期戦初の二連敗。

誇りに思っている記録――関東リーグ戦四年ぶりの一部復帰。

我々が最上級生の時の記録である。

我々の代は、一年下の代も含めて高校時代のフェンシング経験者は、たったの一名（安東君）だけ、かつ一年先輩が不在という、まさに創部以来の低迷期といっても過言ではない時期であった。

したがって二年生の時には、特に二年上の白井先輩に、また四年間を通じて稲光会の諸先輩方に、本当にお世話になり通しであった。

しかしもっぱら、このような状況であったからこそ、我ら素人集団は、迷う事なく一丸となって頑張る事ができたと思っている。

結果的には、我々の最大の目標であった「関東リーグ戦一部復帰」を達成する事ができたのであるが、これには特別選抜第一号として入部してきた、鈴村君の活躍に負うところも多かったのである。

同君の入部後、次々と特別選抜の学生が入部しはじめ、我が部は復活をはじめてきたと思う。

また、我々の代には久しぶりの女子部員として重岡（旧姓二枚）さんの入部があった。今年は女子選手がめざましい活躍を見せているが、今にして思えば、我々の年は女子部の復活の年でもあったのではなかろうかと思う。

私は社会人になってまもなく、研修のため中国で約二年間を過ごしたが、その際、日本からフェンシング用具一式を持って行った。

そして、上海の大学で中国の学生と剣を交える機会に恵まれたのだが、当時の中国は、外国人との自由な交流がまだ難しい時代であったため、他の人では味わえない貴重な体験をすることができたのである。この時は早稲田でフェンシングをやっていて本当に良かった、としみじみ思ったものだ（中国でも早稲田大学の名前はとっても有名だった！）。

そのフェンシング部も今年で創部50周年。ひとつの区切りの年に、我が部よりまたもや五輪出場者が出たことは本当に喜ばしい限りだが、今後も、関東一、日本一、さらには〝世界一〟をめざして、現役諸君が御活躍されることを心より願っている。

頑張れ、早稲田！

イング747がソ連領空を侵犯、サハリン沖でソ連戦闘機にミサイルで撃墜される。

1984年

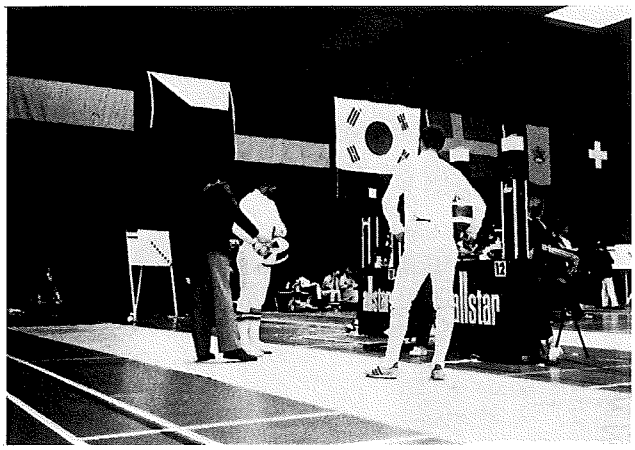
●'81年11月に夫婦で旅行中、ロス市内でピストル強盗に襲われ死亡した日本人女性の夫が、その後1億5000万円もの保険金を受け取っていたことが週刊文春の記事で判明。輸入雑貨商の夫・三浦和義への疑惑が浮上、マスコミをにぎわしたあげく逮捕される。

●グリコ・森永事件が起こる。かい人21面相と名乗るグループが食品会社数社に対し、製品への青酸ソーダ混入を武器に脅迫。

●第23回ロサンゼルスオリンピック開催。アメリカのカール・ルイスが100、200、400リレー、走り幅跳びで4個の金メダルを獲得する。

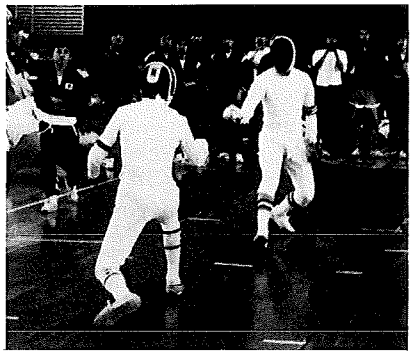
●冒険家・植村直己がアラスカのマッキンリーを冬季単独登頂後、消息を絶つ。

61年の創部40周年を迎え、世界へはばたく選手続出！62年、鈴村世界選手権、63年、出野ソウル五輪出場！



60年4月、ジュニア世界選手権に鈴村出場

60年リーグ戦フルーレ

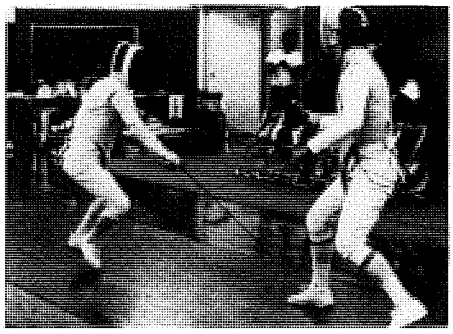


60年リーグ戦サーブル

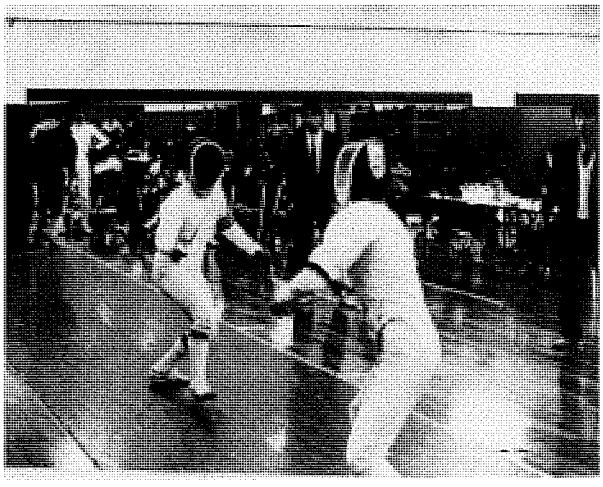
61年40周年パーティーでのOB

61年40周年
パーティー

左から宮、黒田、木田の各氏



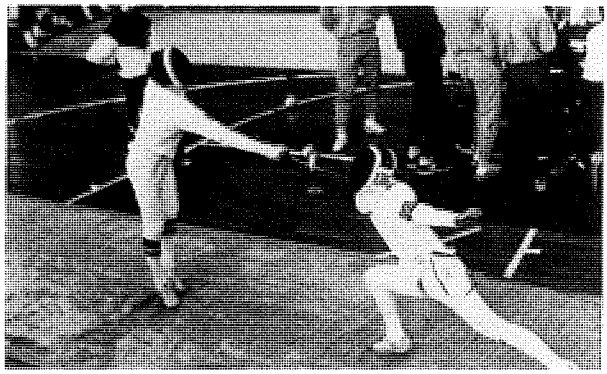
61年東京都ベテラン選手権。フルーレ中村会員2位、
サーブルでは吉田会員が3位となる



61年早慶戦では3種目制覇を達成する

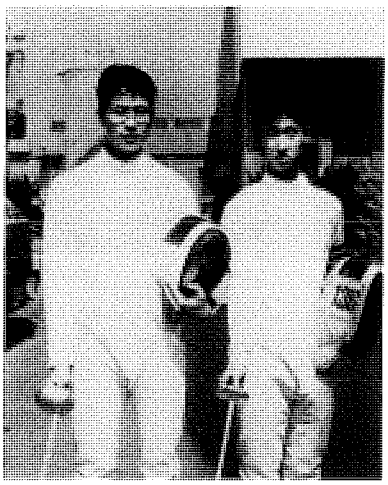
61年の早慶戦で熱戦をくり広げたOB戦

昭和60年～63年

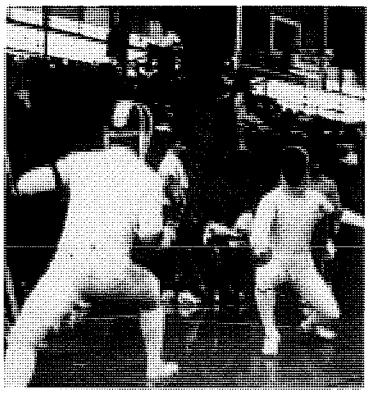


62年リーグ戦エペの佐々木選手（右）

62年リーグ戦エペの鈴村選手（右）

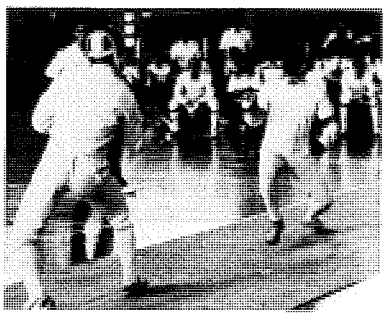


62年、世界選手権出場の鈴村選手（左）
とジュニア世界選手権出場の佐々木選手

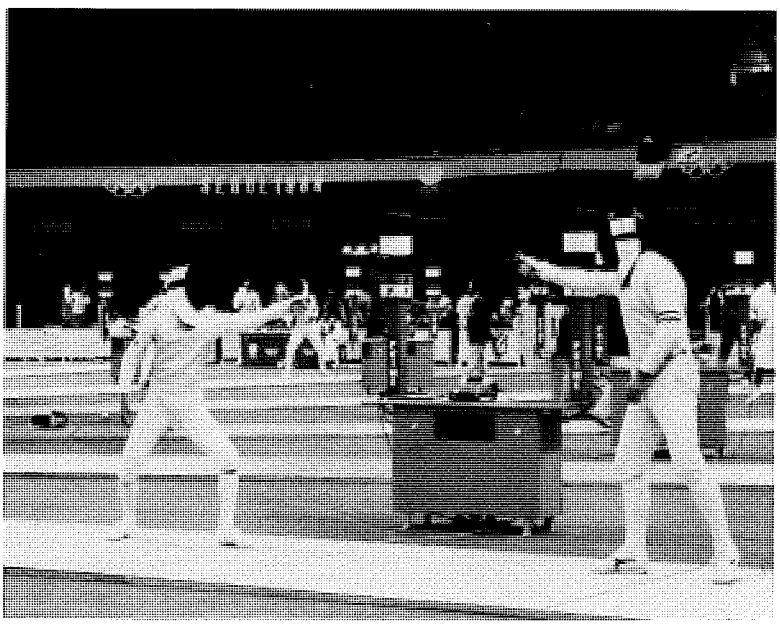


62年リーグ戦サーブルの山崎選手（右）

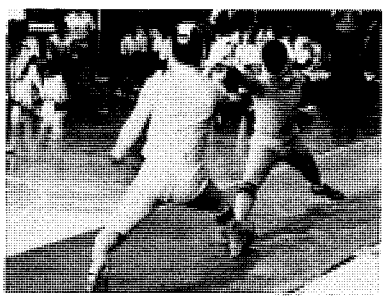
62年リーグ戦では女子も健闘



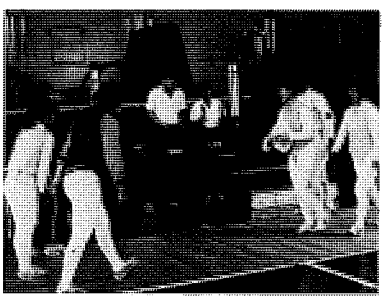
63年リーグ戦サーブルの加藤選手（右）



63年ソウルオリンピックに出場した出野選手(左)。相手はイタリアのアンドリュース・ボレラ選手



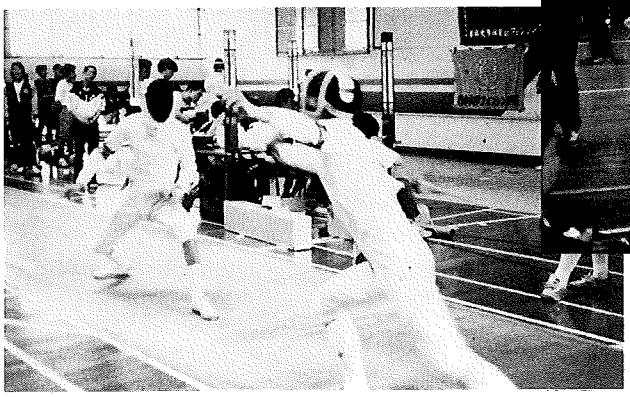
63年リーグ戦サーブルの木村選手（右）

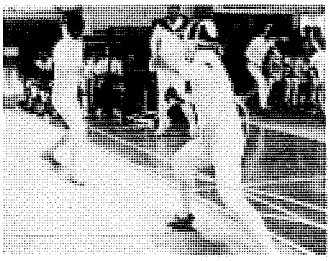


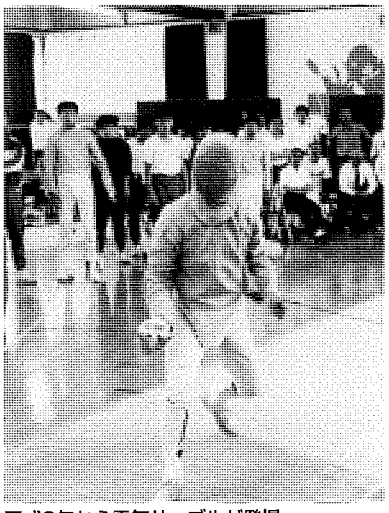
63年リーグ戦で女子が逆転で三部死守

あと一歩で一部復帰のリーグ戦、入替戦。部員のレベルはアップしたものの一部の壁は厚く。

平成1年のリーグ戦エペ。北原選手

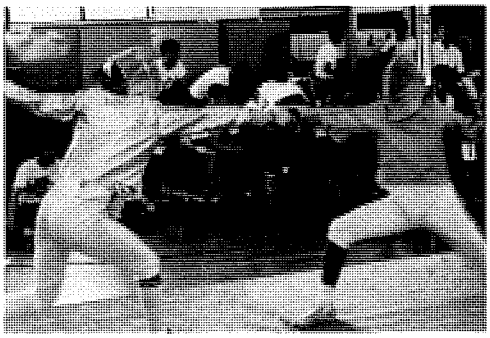

平成1年対東農大エペ、エース出野（左）も苦戦


新人ながら藤倉選手は大活躍

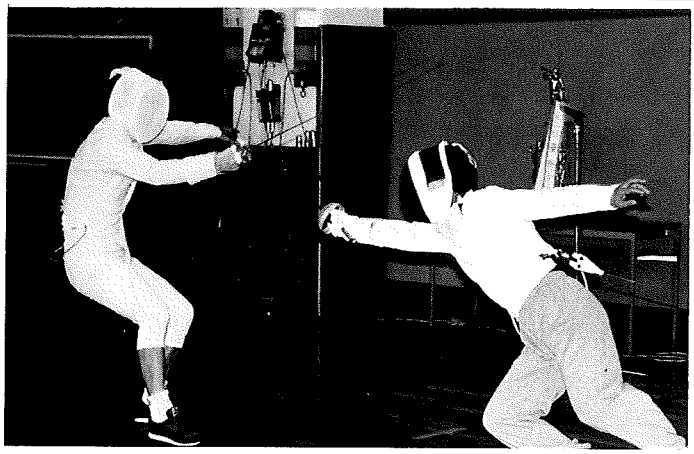

平成2年から電気サーブルが登場

平成2年の入替戦。対拓大

対拓大の入替戦に駆けつけたOB


平成2年の入替戦

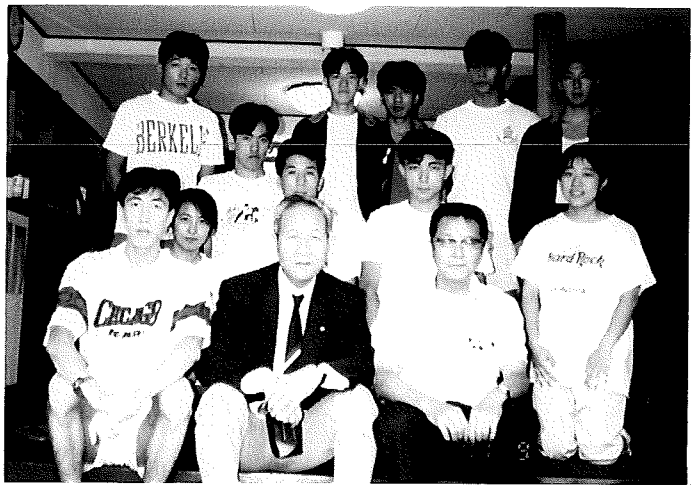
平成1年～3年



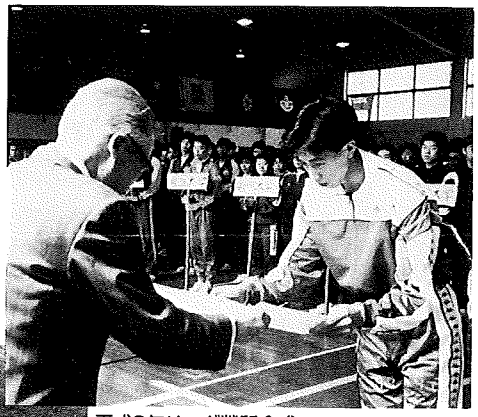
平成3年10月のOB戦

平成2年10月のパーティーでの滝口、戸谷両先生

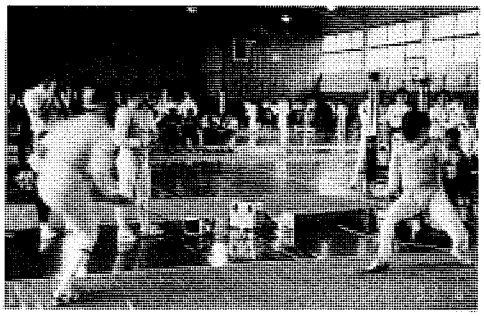
平成2年10月10日のOB戦



平成3年、越後湯沢の夏合宿にて新潟の原先輩を囲んで



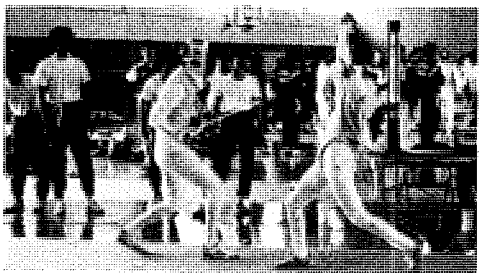
平成3年リーグ戦開会式で
特別表彰される出野主将



平成3年リーグ戦

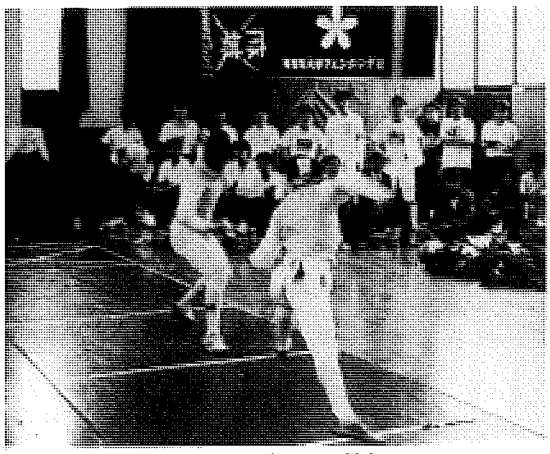
平成3年リーグ戦、出野選手のエペ
(左)

平成3年、女子は横山(左)と
高田の両選手が健闘、3位となる

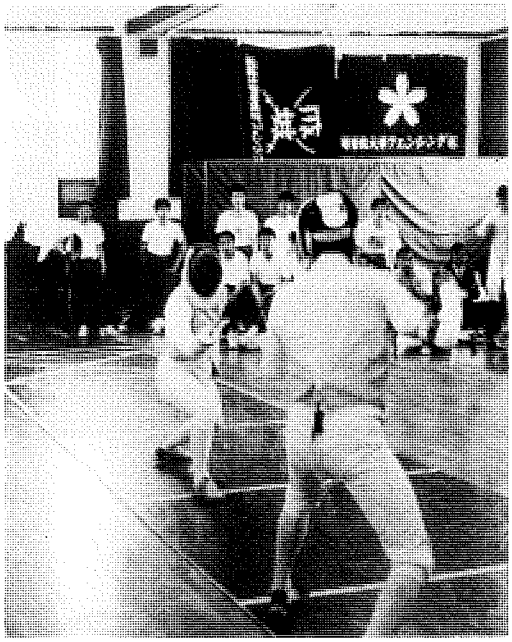


平成3年リーグ戦、藤倉選手(左)

男子は二部V3を達成するも一部には届かず。一方、女子は毎年昇格し、ついに二部へ。田中奈々絵が大活躍！



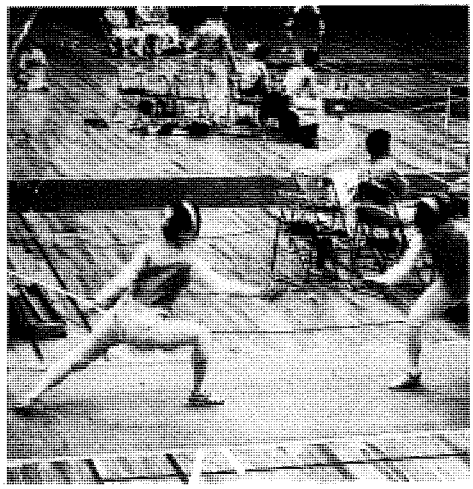
平成4年のリーグ戦で活躍した山口選手（左）



平成4年のリーグ戦フルーレの土屋選手（左）

主将の山岸選手（左）

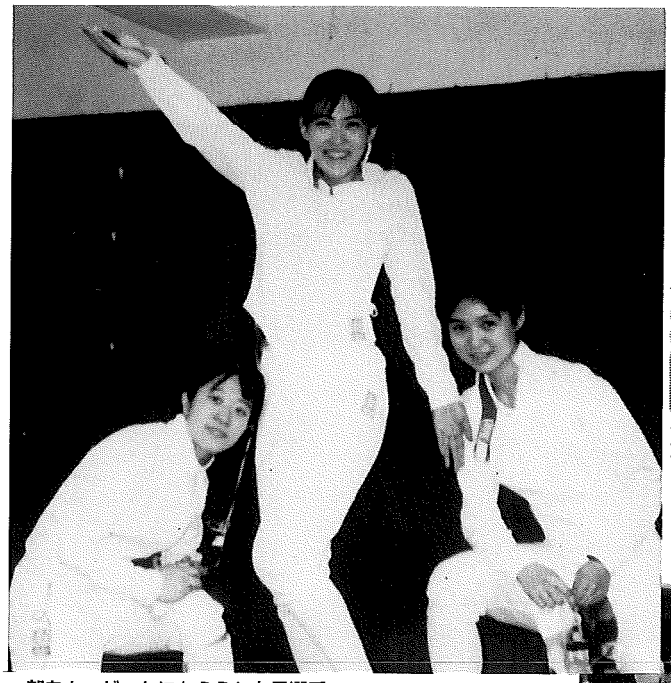
フルーレ出場の藤倉選手



三部昇格の原動力となった田中奈々絵選手（左）

平成5年、女子は三部へ昇格する

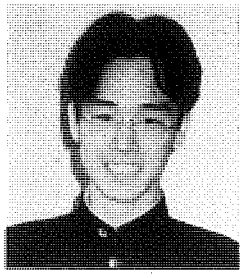
平成4年～6年



一部をターゲットにとらえた女子選手

平成6年、二部昇格を果たした女子部員。
左から、田中、高田、戸ヶ崎、岡田の4選手

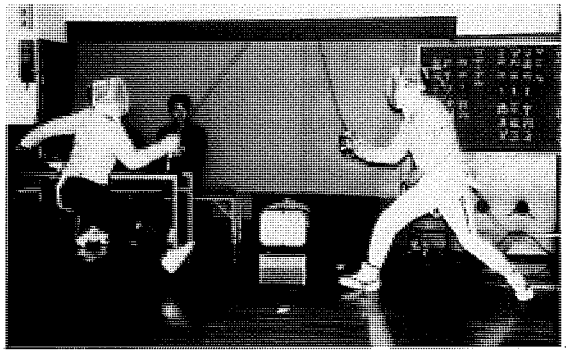
リーグ戦でも女子の強さが注目される



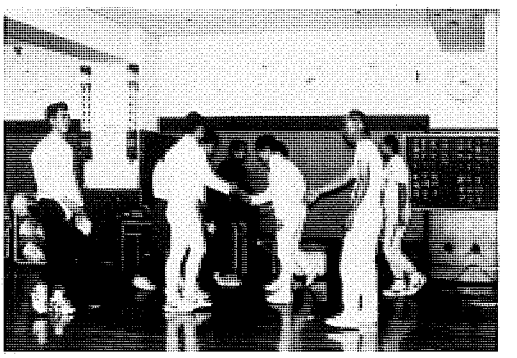
平成6年、世界選手権代表となった田中奈々絵と、ジュニア代表となった田中秀行の2選手

平成6年第47回の早慶戦記念写真

平成8年、女子エペ一部リーグ優勝、初の大学日本一の座に！田中奈々絵、アトランタオリンピック出場！

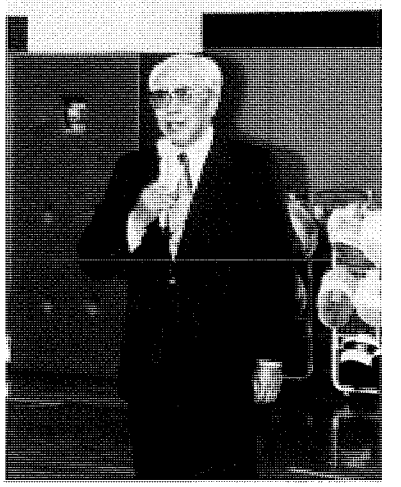


ＯＢのサーブル戦



平成7年10月10日の記念試合

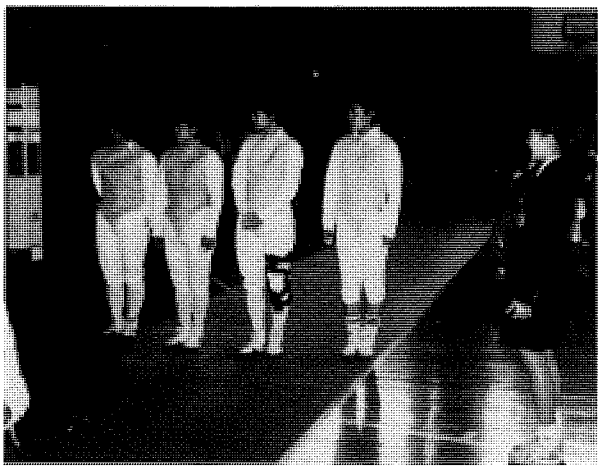
平成8年リーグ戦開会式で五輪代表の表彰を受ける田中奈々絵



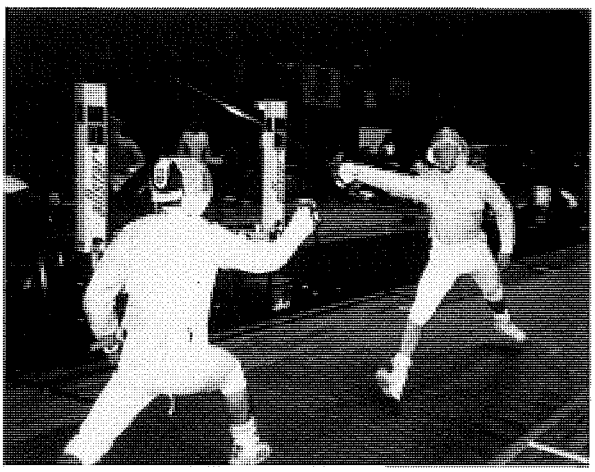
パーティーで挨拶する戸谷部長

平成8年4月、ベルギーで開催された世界ジュニア・カデ選手権に助監督兼女子エペ・コーチとして川名監督が参加

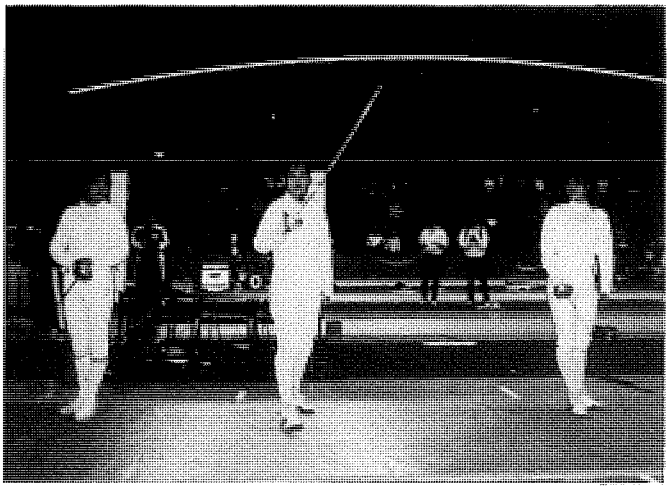
平成7年～8年



平成8年一部リーグで初優勝を果たした女子エペチーム

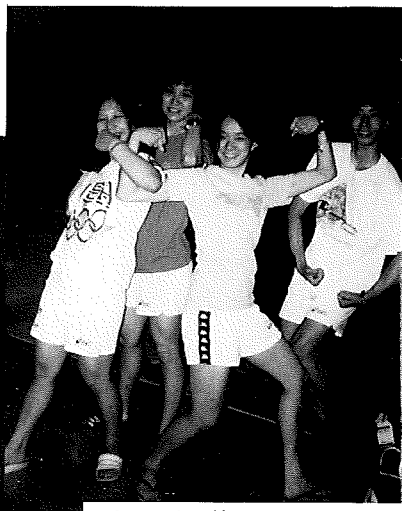


平成8年リーグ戦サーブル。3勝1敗で2位



女子エペはリーグ優勝の余勢をかって大学日本一も獲得した

平成8年、男子フルーレは二部優勝するも入替戦で惜敗



アトランタ五輪フェンシング代表は女子3名、男子1名。フェンシング会場にて

アトランタ五輪にエペで出場した田中奈々絵選手。早稲田からは2人目の五輪出場、女子では初めての快挙

1985〜1996（昭和60年度〜平成7年度）1

●60年度卒業生一同（60年度）
恵まれぬ人材と一部での経験

我々（福田、帆刈、石坂）3人は皆、初心者であった。入部の動機も、将来日本代表になりたい、学生選手権で入賞したいなどというものからは程遠く、体育会に入ってみようという心意気はあるものの、大学から始めてレギュラーになれる部、授業を優先してくれる部などという、なんともレベルの低いものであった。

当時は部員の数も4学年合わせて10名に達するかという状況で、我部も人材の良し悪しよりも、とにかく人数を確保することが先決であったようだ。

こんな我々は二年生になっても、今思えばそんな単純な技で誰がポイントを取られるのかというような練習を繰り返していただけであった。試合もただがむしゃらにやるだけ、運が良ければ勝てるかもしれないという状態であった。そんな訳で二年生のリーグ戦は、三部との入替戦に出場するかどうかという、青山学院との近年希に見る低レベルな争いをなんとか耐えしのいだというのが本当のところであった。

練習や試合はこのような具合であったが、我々はそれ以外の事については自信を持ち、積極的な活動を繰り広げていた。例えば、法政など他校との合同合宿、朝のマラソンだけは早稲田が必ず一番を取った。それにどういう意味があるかは別にして、そんな心意気だけはあった。

また、OBが指導に来られた際には、練習後ここぞとばかりに飯をたかった。人数が少ないこともあり、学年を問わず何かにつけて高田馬場の安い居酒屋へ、そして時には歌舞伎町の怪しげな店へと繰り出し、飲んだり遊んだりしたのであった（我々が新人部員の時の四年生の諸先輩方によって、我々の現在の生活習慣の基礎が築かれたのではないか？　その意味ではこれらの諸先輩方を崇め、また恨む日々を送っている）。

練習はもちろんであるが、このような道場以外での活動によって、部員相互間あるいはOBとの結びつきが強められたのではなかろうか。

しかし、一部の下位に低迷することに甘んじていた我部も、我々が三年生になり特別選抜制度によって鈴村というスーパールーキーが入部してから一変した。今まで人数が足りなくて、やむをえずレギュラーとなっていた我々は、すぐ補欠にまわるはめになったのである。今まで他に注がれていた我々のエネルギーがフェンシングの技術に集中することとなった。

鈴村の入部は部全体に刺激を与え、他の者も技術的に大きな向上が見られた。そして、三年生のリーグ戦で数年来の念願であった入替戦で国士館に勝ち一部復帰となったのである。

一部復帰とはなったものの、その主力は一年上の学年と鈴村であった。翌年、最上級生になった我々には、一部で競技すること、一部を守り抜くことは大変な重荷であった。特に審判を担当する時は地獄の思いをした。他校の選手と面識が少ないこともあって、早稲田の審判にはいつもクレームの嵐が吹いた。

しかし、一部の試合でも徐々に一人、二人と勝てるようになり、自分に自信が持てるようになった。また、フェンシングのテクニックの奥深さも分るようになった。大学選手権や他の個人戦でも特に入賞した実績のない我々であるが、最上級生の時に一部のリーグ戦を経験したこと、そして一部を守ったことが大きな戦績であると思っている。

現役の部員諸君にも是非、一部での競技経験をしてもらいたい。そこから得られるものは、計り知れない。

●鈴村元宏（62年度・主将）
恵まれた友人に出会えた4年間

入部後、私はある先輩に「昨年のリーグ戦はどうでしたか？」と聞いてみた。「二部の5位だ。もうすぐ三部に落ちそうだ。なんとかしないと。でも今年はもう少し上に行けると思うけど…」とのことでした。（エ〜うそ〜、そんな状態なの！　知らなかった。せっかく東京まで出てきたのに、このまま帰るわけにはいかないし、頑張らなければ。自分が選んだ道なんだから！　すぐ一部に上がれると思っていたのに…そんな気持でした）

それと、同期が私と藤野の二人。いかにも人数が少なく、先輩方にはたいへん迷惑をかけてしまったと思っています。（藤野には、重いリール、審判器等を試合会場まで持たせてしまったことを後悔しています）そんな状況の中、リーグ戦が始まりました。寺田主将を中心として、四年生、三年生、二年生、一年生が一致団結して試合にのぞみました。試合が消化される度に勝ち星が加算され、最終的には二部リーグ総合優勝を成し遂げ、一部昇格を願って入替戦にチャレンジしました。（もし今年一部に昇格しても、四年生の先輩が抜けると来年も厳しいぞ〜もう少し力をつけてからのほうが……と非常に弱気でした）

対戦相手は国士館大学。リーグ戦前に一度練習試合を行っていたため、どんな選手かは分かっていたので非常に戦いやすかった覚えがあります。試合前には弱気な状態はなく、チャンスは必ずものにするぞという気持ちで一杯でした。結果は、フルーレ圧勝、サーブル小差の末の勝利で悲願の一部昇格を果たしました。

OBの数も多く、その時の団結力の強さも思い知らされました。また、これからも頑張らねばという思いが込み上げてきた一日でした。試合会場で試

1985〜1996出来事

1985年

●ソ連共産党書記長チェルネンコ死去で、後任に指導部最年少のミハイル・ゴルバチョフが選出される。また、この年11月には6年半ぶりにアメリカ・レーガン大統領との首脳会談を行う。

●アフリカの飢餓救援コンサート「ウィ・アー・ザ・ワールド」が開催され、10万人を超える若者が集まる。またこの模様は衛星生中継で世界約80カ国で放映された。

●日本航空123便が群馬県御巣鷹山に激突、死者520人の大惨事となる。

●セ・リーグ阪神タイガースが21年ぶりに優勝、日本シリーズも制して、トラ・フィーバー起こる。

1986年

●ソ連ウクライナ共和国のチェルノブイリ原子力発電所で爆発事故が発生、大量の放射能が漏れ大パニックを引き起こす。

●チャールズ皇太子、ダイアナ妃が来日。ダイアナブームを巻き起こす。2人は'81年に結婚したもの

合道具はそのままに、近所の中華料理屋へ駆け込み、勝利の美酒に酔ったのも良き思い出の一つであります。しかし喜びも束の間、卒業される先輩はいいなぁ～と思いながら新たな代を迎えたのであった。その頃、私の耳に嬉しい情報が入ってきた。一年生が2人しかいなかったのが一挙に私を含め6人になったのだ。一部に昇格したものの、現状を考えるとなにか淋しさがあったのだが、このニュースによって自分自身と部全体に光がさしたようだった。(しかし、私の本音として、入ってくるの遅ぇ～よ！　てめ～ら～今頃入ってきやがって！　いい時に入ってきやがったな！　でした)

二、三年生の時のリーグ戦といえば、リーグ戦中は、入替戦の練習といった感じの試合が多く、なにか充実感のないまま時が過ぎていったような気がした。試合でも練習でも気が抜けた状況でなかったが、やはり結果として勝ちを得ることができなかったことが精神的にもストレスのたまった状態であったと思う。(とりあえず、一部残留に必死であった。意地で死守した感じであったが、上には上があり、目標を高く持とう！　このマンネリ化した状態を打破しよう！　でした) そんな中で富田淳の言葉がとても印象的に残っている。彼は「何か体に込み上げてくる熱いものを感じたいんだ……それも皆で味わえるものを！」と言った。とても意味が深く、私の心は刺激された。そんな言葉の中、我々が四年生を迎えることになった。今年は例年になく、後輩も高校経験者が多く、色々な意味で充実するようになり、是が非でも入替戦を恒例行事のように体験するのではなく、さっぱりとリーグ戦を終了したい、入替戦はしないぞ！　と意気込みのもとに、リーグ戦が始まりました。(しかし、正直言って不安でした。二部に降格したら……そんな気持ちで一杯でした)

私以外は高校でフェンシングを経験していない者ばかりで、しかし、純粋に勝ちたいという思いの強い者ばかりで、私が引っ張っていかなくてはならない立場なのに、逆に精神的に助けられ、本当に恵まれた環境と友人に出会ったような気がした。そんな仲間意識が絶好調に達した中、我々四年生のわがままを聞いてくれた後輩の協力もあり、念願の入替戦に出場することなく、一部総合5位でリーグ戦を終えることができました。(リーグ戦終了後、やれやれ、なんとか向上したな。と思いましたが、今となれば、もっともっと頑張れたな！　なんて目標が小さかったんだ！　とも思います)

やはり仲間の助言・行動というものは、どれだけ影響力があるか改めて知ったような気がしました。とても大切な奴に囲まれた状況でフェンシングができたことは、言うまでもなく、私の宝物であったような気がします。大学のたった4年間が、このように充実できたのも、監督を始め、先輩・後輩・同期のおかげだと思います。何か得をした気分で卒業を迎えましたが、さすがに卒業するときには涙が出てきました。今年で創部50年を迎え、さらに発展してほしいと思います。心残りは、正直言って少しありますが、満足した4年間でした。

62年、夏合宿にて

●佐々木　剛（63年度・主将）
楽しさと、くやしさと…

通常4年間という学生生活をすごすわけなのですが、私の場合その倍の8年間大学に籍を置き、前4年間をフェンシング部ですごしました。

学生時代の思い出、印象に残っていることはたくさんありますが、その中でも今でも思い出したり考えたりする事が四年生の時の入替戦です。

相手は慶応大学、早慶戦では連勝記録を伸ばし続けており、敗れたことのない相手でした。ただ、慶応の選手も下級生の時から試合に出場し、四年生になった時にはかなり力を付けていましたので、個人的には強敵だと考えていました。

入替戦というのは、早大フェンシング部にとって当時指定席のようなもので、入学してから一年、二年と経験し三度目だったのですが、下級生の時は、立場も楽でリーグ戦の延長という感じで試合にのぞんでいたような気がします。

自分がキャプテンを務め相手が慶応、OBの方々も大勢応援にかけつけていただけるとあって、予想以上の重圧で前日はさすがに眠れないような状態でした。

日大大宮校舎までの約2時間の道のりを電車の中で眠った私は駅を乗りすごし、集合時間に遅れるという大失態をしてしまったのです。

みんなを引っぱって行かなければいけない立場の私が、そんな事で他の選手を不安にさせたり、大勢の諸先輩方の前で川名監督に恥をかかせてしまい、今でも監督には会わせる顔がないと感じています。

結果は、接戦ではあったものの試合に対する気迫、内容共に完敗だったと思います。

自分達が入学してから引退するまでの4年間一部でプレーすることの喜び楽しさを、後輩達が味わえなかったことを、すごく残念に思いますし、くやしくも思います。

部を引退し何年かはこんな事を思い出したり考えたりしながらも、今では良い経験だったと思います。

楽しくうれしい思い出もたくさんあり、合宿で盛り上がったり、酒を飲んだり、マージャンをしたり、きびしい練習も楽しかったと今は思います。現役時代の経験は社会に出てからのとても大きな財産になっていますし、同期のみんなも同じだと思います。

もし現役の諸君が目を通すような事があれば、何事も一生懸命ひたむきに学生時代を過してほしいと思います。

の、不倫騒動などで英マスコミをにぎわしたあと'96年に離婚。

1987年

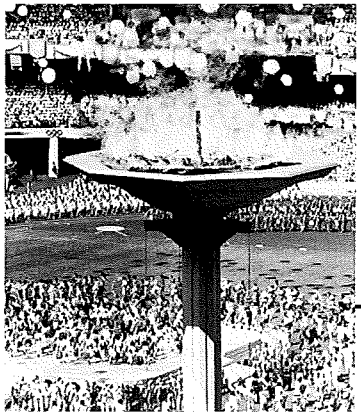
●ニューヨークで株価暴落、「ブラックマンデー」の戦慄が世界中を走る。

●映画「太陽の季節」でデビューした映画・歌謡界のスター石原裕次郎が、肝細胞ガンのため52歳で死去する。告別式にはファン1万人が詰めかけた。

1988年

●横須賀港沖の海上で、海上自衛隊潜水艦「なだしお」と大型遊漁船「第一富士丸」が衝突、富士丸は沈没、乗客30人が犠牲となる。

●第24回ソウルオリンピック開催。韓国の威信をかけた国家事業は世界最大のショーとも呼ばれた。



1985〜1996（昭和60年度〜平成7年度）2

●小川敦行（平成1年度・主将）
目指せサクセス・ストーリー

私には現役の頃の話ができない。いま思い返してみても赤面するばかりである。なにせ、技術がない、体力がない、根性がない。ないないづくしが三拍子揃っていて、吉野屋のツメの垢でも煎じて飲みたいくらいである。おまけにチーム力すら満足に高めることができなかった。

試しに当時のことを書こうと決意してみても、結局は失意のどん底に突き落とされるだけである。

三年の春に一部に落とした、世界ジュニアの最終選考会では4位に終わった、四年のリーグ戦では日体大に3種目で惨敗した…。

結局、「俺の青春って何だったんだろう」ということに落ち着いてしまうのである。もっと突き詰めれば「僕って何？」ということにもなりかねない。

それではいけない。部の50周年を飾る崇高な超豪華判の特別記念誌にそんな不始末を残してよいわけがない。

前置きがあまりにも長くなってしまったが、そういった理由で今回は、月曜会に出席しはじめた若手OBの一人として意見を申し上げたい（若手という言葉は何歳まで使えるのでしょうか？）。

まず最も喜ばしいことは、女子部員がメチャクチャ強くて、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだということである。本史の編集に携わる機会を得て、過去の稲光会報を丹念に読み直しもしたが、ここ4年あまりに女子部員が辿った軌跡は、スポーツ界でも特異な「平成のサクセス・ストーリー」とでも呼ぶに値するものである。平成の年号はそんなに続かないだろうから、これは実に貴重である。

そして平成不況の脱出と時を同じくして、エペは一部優勝、フルーレは一部昇格、王座決定戦には優勝するという快挙を成し遂げた。運命の女神は、さすがに女性だけあって、まず女子に微笑みかけたのである。

男子部員に関しても、強さ具合は相当なものである。月曜会のファイティングでも、思わず引いてしまう。私にも少しはプライドがあるのだ。「負けたら悔しいな」と、一瞬考えてしまう。それほど強いのである（説明になっていませんが…）。

今後は男女とも、ますます精進して良い戦績を残してほしい。それが自己のためであり、とりもなおさず、稲光会の未来永劫の発展につながるわけであるから。

ただし、老婆心ながら付け加えたいこともある（さっき若手と言ったばかりなのに、もう老婆に変身してます）。

現役の頃に一度ならず頭をよぎった考えがあった。それは「額に汗して練習してるのは俺たち現役じゃないか。なぜOBの方は理不尽なことを言うのだろう」ということである。そういった葛藤からか、正直いって、現役時代には諸先輩方のアドバイスを素直に受け入れることができなかった感は否めない。

しかし、いま自分がOBの一人としてここにあり、主に月曜会の先輩方と接していく過程で振り返ってみれば、過去にそのように考えていた自分を、ただ、ただ、恥じ入るばかりである。

先輩方がどれほど現役のことを考えていたか、どれほど部を強くしたいと思っていたか。当時、私がOBの方から言われたことはほとんど覚えている。それらをいま一々検討してみれば、解答はいつも一つだけである。結局、志は現役と何も変わりはしなかったのである。

●北原　整（2年度・主将）
メンタルトレーニング

現在、私は職業柄（と言ってもしがない広告代理店の現場社員だが）Jリーグ・プロテニス・プロゴルフ・アメリカズカップ（世界最大のヨットレース）などでスポーツ界の方々と接する機会が多くある。

そんな中、私が驚かされるのは、メンタルトレーニングに対する貪欲なまでの取り組み方である。

成功例としては、今回のサッカーオリンピック代表の活躍があげられよう。選手達は、Jリーグでブラジル代表のドゥンガからパスをもらい、レオナルドのシュートを阻む。この体験は、何よりのメンタルトレーニングであり、世界舞台への大きな自信をつけたと言う。

こういった自信・実力は、何時間・何年間練習をしても身につくものではないとも言われている。打倒韓国を目指して、その攻略に全てを注ぎこんでいた低迷時代が、皮肉にもメンタルトレーニングの重要性をさらに裏付ける結果となっていよう。

今、私の現役時代を振り返ると、随分一生懸命頑張っていたと思う。怠けず練習に励み〝一部昇格〟に向かって邁進していた。

しかし結果から言えば、あと一歩及ばず〝一部残留〟である。あの頃は、実力の差だと納得していたことだが、今冷静に分析してみると、半年前の全日本学生選手権では、フルーレで団体4位に入った。3種目ともコンスタントに勝ち続ける出野晴信を擁していた……。つまり、結果は〝実力〟と言うよりは〝メンタル面〟の差だったのかもしれない。

具体的には何が欠落していたのか。第一にケーススタディの不足が挙げられる。仮に〝一部昇格〟を目標の全てとするならば、入替戦出場にピンポイントを置きつつも、まず、入替戦で当たりそうな大学と一回でも多く練習及

●戦後の歌謡界の女王として君臨した美空ひばりが心不全で死去。52歳。43年間の芸能生活だった。

●税制抜本改革の柱でもある消費税が実施される。7月の参院選では消費税廃止を掲げる野党に自民党が大敗する。

●中国で天安門事件起こる。中国人民解放軍が、民主化を要求する学生が占拠していた天安門広場を制圧、民主化運動が武力鎮圧される。各国はこれに反発し、制裁措置を取る。

1990年

●南アフリカ政府が28年ぶりにマンデラ氏を釈放。終身刑で服役していた黒人解放運動の指導者ネルソン・マンデラ氏が釈放され、人種問題が対話により進展する。

1989年

●1月7日、波乱の昭和を歩んだ天皇が崩御。皇太子明仁親王が直ちに皇位を継承し、125代天皇に即位する。これにともない、政府は昭和に代わる年号を「平成」と決め、翌8日から施行された。

●東欧に吹き荒れる改革の波が東ドイツに及び、ついにベルリンの壁が崩壊する。これにより翌年の東西ドイツ統一へと進展。

び試合をするべきだった。フェンサー一人の攻守の技の組み合わせは、それ程多くないので、体験とVTRを基に分析するのは困難なことではなかったはずだ。

次に、団体戦の中で個々人の役割をハッキリさせるべきだった。全員が全試合に勝つ必要はなく、ある試合は引き分けでもよく、ある試合は3ポイント取れれば負けてもよいとなれば、もっとリラックスして臨むことができたと思う。

さらには、試合の中で自分よりも相手の心理を基に戦う余裕を養うべきだった。4対2で負けている時、相手が守りを固めて待つタイプであれば、フェイントを多用する。一気に攻めてくるタイプであれば、しっかりと間合いを切って対処する。

自分が現役だった頃、こういったメンタルトレーニングを取り入れていたならば、きっと結果は違っていたと思う。良くも悪くも一生懸命過ぎたのかもしれない。

最近の現役部員の活躍ぶりを聞く限り、川名監督や指導に当たっているOBの方々には釈迦に説法で恐縮至極ですが、少しでも役に立てればと思い、当時を振り返ってみた。

話は変わるが、フェンシングを個人スポーツとして捉えた時、そのメンタル面・戦略性において、非常に参考になるのがゴルフと思われる。今の私の目標は、仕事をうまく活用し、プロゴルファーのメンタル・戦略トレーニングを受け持つ、あるトレーナー集団に入り込み、さらなる有効なトレーニング法のヒントを見つけ出し、伝えることと思っている。

毎月100時間を超えるかという残業から解放され、OBとして道場に立つ日を夢見て……。

●出野晴信（3年度・主将）
ソウルでの最高の試合

寝苦しい毎日が続いていた。まぶたを閉じると不安がつのり、眠りにつくと嫌な夢を見た。そんな日々からついに解放される日が来た。オリンピック試合当日である。弱冠18歳でオリンピック代表となり、マスコミや周りの知人からもてはやされ、有頂天になっていた自分であるが、試合となれば、必死になって精神集中し、いつもの自分に戻っていく。

私が出場するのは、男子フルーレ団体である。初戦の相手国はイタリアに決定した。当時イタリアのメンバーの5人の内、3人が世界チャンピオン、もしくはオリンピックチャンピオンであり、他の2人も世界選手権で3位以内に入った経験のある史上最強のチームである。

そんなチームと対戦するにもかかわらず、普段通り、試合前に自己暗示をかける。「オレはだれにも負けない！オレは、フェンシングをするために生まれてきた男だ！」——しかし、自分で言いながらもなんとなく説得力のない言葉に聞こえてくる。

試合が始まり、ついに自分の出番がきた。いきなり、とんでもない選手と対戦する。アンドリュース・ボレラ、1986年の世界チャンピオンである。試合をしながら時々体がぶつかりあう。まるでコンクリートの壁にぶつかっている錯覚をおこす。普段の10試合分の体力を使い夢中になって試合をした。

気が付くと審判から勝ち名のりを受け、応援にきてくれた両親に向っていつもより大きなガッツポーズをとっていた。ボレラにとってみれば、この試合は決勝までの長い道のりの中の一試合であるが、私にとってみれば一試合一試合すべてが、次の試合など考えない真剣勝負である。当然ボレラは、油断していたであろうし、本気の試合ではなかったと思う。しかし、絶対的な体力差があったとしても、試合に対しての前向きさがあれば勝敗などどうにかなってしまうものである。

現在思うと、この試合が私にとって、技術的、もしくは、体力的観念をはぶいた上では、生涯最高の試合であったと思う。絶対勝てないと思われる相手に対し、全力を出しきり勝利する。これこそ、今の私の反骨精神の裏付けとなっているものである。

●山岸大輔（4年度・主将）

私は友人の紹介によって、高校からフェンシングを始めたわけだが、フェンシングは、私が想像していた以上に過酷で頭も体力も精神力も必要なスポーツであり、運動神経が良いだけでは勝てない、という奥の深さに徐々にのめり込んでいった。

特別選抜で早稲田に入学した私は、他の誰よりも早稲田に、チームに貢献できるよう一生懸命に練習に励んだことを思い出します。その中でも、大学から始めたサーブルで監督のご指導により、インカレに3年連続で出場できたことが、一番印象に残っている。

早稲田は設備面、環境面にも恵まれており、また、先輩、後輩、同輩にも恵まれ、OBの方との交流も深いものがあって、私にとっては、とても居心地のよい所でありました。そのおかげで、とても充実した学生時代を過ごすことができたと、とても感謝しています。

これからもフェンシング部で培った忍耐力や精神力、集中力を生かすとともに、〝素直さ〟を大切にして、いろいろな人との交流を深め、良い所を吸収して〝ワセダニアン〟として恥ずかしくないよう胸を張って生きていこうと思います。

●保谷公司（6年度・主将）

今思い返してみると、私の学生生活4年間はとても有意義なものだったように思われる。友人たちがサークル、コンパ、アルバイトと大学生活をエンジョイしている一方で、毎日地下の教場に潜って汗を流していた。その当時は友人たちをうらやましく思うことも正直あったが、社会人となった今、本当にフェンシングをやっていてよかったと実感している。

忘れられないのは、三年生の時、上

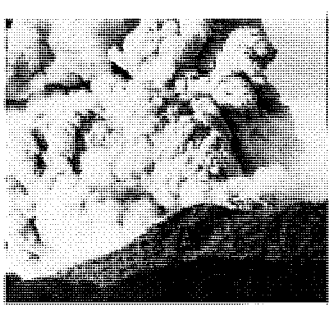
●ソ連が大統領制を導入、初代大統領にゴルバチョフが就任。

●ペルー大統領にフジモリ氏。日系二世のアルベルト・フジモリ氏が大統領決選投票により当選し、世界で初めての日系人大統領誕生。

1991年

●前年イラクのクウェート侵攻に端を発した湾岸危機が、アメリカ軍を主力とする多国籍軍の軍事介入により、湾岸戦争へと発展。この戦闘の模様はテレビを通じて世界中に中継された。

●長崎県雲仙の普賢岳で火砕流が発生、40人が死亡する。その後も普賢岳では火砕流や土石流が頻発し、2000世帯が避難する。



1985〜1996（昭和60年度〜平成7年度）3

級生が先輩一人と私の二人しかいなくて、周囲から二部へ転落するのではないかといわれており、川名監督と部屋で頭を抱えていたころのことだ。今の現役の人数と層の厚さからすると考えられないことだが、ほんの2、3年前のことだ。先輩方からは〝過渡期〟であると再三いわれ、まったく大変な時期に入部してしまったものだと思っていた。しかし、大変な時期であったからこそ自分のためになったように思われるし、何とかしなければという気持ちから部への愛着心は人一倍強くなったような気がする。この辛い時期を乗り越えたことが、私にとってとても自信となり、社会人である今、仕事に於ける自信の根本となっていることがわかる。

しかし何といっても、たくさんの仲間に出会えたこと、一つの目標に向って共に精一杯努力をしたことが最高の思い出であり、最大の糧となった。夢を追いかけることの尊さを教わった。

負けてしまいました。1回戦でロシアの選手とあたって、スコアは……ああ、言いたくない。15対5です。でも、これからの練習のためにも、オリンピックはとてもいい経験になったと思います。

日本は女子エペの世界選手権で、団体の7位以内に入れなかったので、アジア・オセアニア地区予選に優勝することが、オリンピック出場の条件でした。中国に勝って優勝を決められたのはとても嬉しかった。私自身が代表メンバーに決まったのは3月末でした。

私はリーグ戦の主将コメント欄に次のようなコメントを書いた。

『夢の終わる瞬間は二つあるという。一つは自分からあきらめギブアップした時。もう一つはその夢を達成し得た時。だから我々は決してあきらめない』

今でも私は自分からギブアップするようなことはしない。必ず結果となって現れると信じている。そのことをフェンシングに教えてもらったのだ。後輩たちにも決してあきらめることなく、夢を追い続けてほしいと思っている。

●斉藤朋之（7年度・主将）

TVの世界にとびこんで5カ月たった今、フェンシング部での4年間が、いったいどれだけ今の自分を強くしたのか、疑問に思うことがよくある。そこで、中村立雄先輩に教えられた「鍛練千日、勝負一瞬」という言葉を思い出してみる。とはいっても、ゆっくりと考える時間などないので、「夢枕に中村先輩が立ち、自分に諭す、というイメージが、一瞬のうちに疲れきった脳を走り去る」といった感じだ。

「本当の勝負の時」はいつなのか、すでに過ぎてしまったのか、未だ来ていないのか、それとも、永久にそれは来ないのか、その答えはどこにも見当たらない。

しかし、夢に向かって走る今、毎日が勝負の連続であることは確かだ。一瞬ごとの勝負に、千日前からの自分の姿が反映される、とでもいうべきか。

もちろん、千と一日前からの自分も、昨日の自分を創り、昨日の自分が、今日の自分、そして千日後の自分を創ることはいうまでもない。そうやって、人も、時代も、フェンシング部も変わり続けるのだろう。

失敗が失敗を呼び、時間の流れが、過去を振り返る時間を奪い去っていく。今の自分の意識の中には、千日前の自分の姿は見えない。しかし、今より千日分未熟な自分が、千日前には、確かにフェンシング部にいたはずだ。そう思うと、千日後の自分にも、ほんのちょっとだけ期待できる気がする。

マスコットと記念写真。試合の写真は、「撮ってもらえる日本人がいなくて、残念ながらありません」

試合会場で武器チェック

1992年
●米大統領選挙で、民主党のクリントンが、現職のブッシュ、実業家ペローを破り当選する。

●金丸信元自民党副総裁が東京佐川急便からの献金を認め、副総裁を辞任、続けて衆議院も辞職。
●第25回バルセロナオリンピック開催。女子200メートル平泳ぎで14歳の岩崎恭子が金メダル。
●毛利衛さんらが乗り組んだスペースシャトル・エンデバーが打ち上げられ、数々の実験をこなして無事帰還する。

1993年
●日本新党の細川護熙代表が第79代の首相に指名される。これにより38年に及んだ自民党政権が崩壊。
●日本プロ・サッカーリーグが開幕。前期は鹿島アントラーズ、後期はヴェルディ川崎が制する。Jリーグブームが全国に及ぶ。

●創部50年目の初の女性五輪選手・田中奈々絵

アトランタ五輪に出場して——

イティングをすることになるんです。頼むときですか？　別に何となく「つぎお願いします」って言えば大丈夫なんです（笑）。

審判器があるだけで審判はいませんから、大学でやるときと同じです。15本勝負で、お互いに点数を数えながらやるんです。そのへんはオリンピックといってもごく原始的でフツーです。

2時間ぐらいの練習ですけれど、色々な国の選手の練習を見ているだけでも勉強になります。強い選手を見ていて日本と違うなあ、と思ったのはやはり、練習量の多さ、というよりもファイティングの量でしょうか。試合直前の練習でも、普段の私たちと同じぐらいの練習をみっちりやってましたから、きっと普段はもっと量が多いんじゃないでしょうか。

内容はレッスンとファイティングで、私たちと特に大差はありませんけれど、やはりファイティングにかける比重がとても大きいと思いました。

どちらかというと日本は、フットワークとレッスンの時間が長いですよね。形をきちんとおぼえるのは怪我を防ぐためにもとても大事だとは思いますが、さらに強くなるためには、私ももっとファイティングを多くした方がいいかな、と思いました。

あまり強くない選手でも、日本の選手と決定的に違うのは、「突くこと」への執念みたいなものかな。それはもう、すごいです。形がどうだとか、きれいだとかいう問題以前で、とにかく「突こう」という。こういう選手とあたると、やりにくいです。むしろ強い選手のほうが何をしようとしているのか、負けても何をされたのかが、よくわかりますから、対策の立てようもあるんですけど。

フェンシングの試合は20日と21日。19日の開会式がまた長くて、夜中までかかり、宿舎に帰ったらなんと午前3時。出番は21日でしたから、まだよかったんですが武器検査が20日の朝8時だったから、眠かったです。

試合のほうは、なにせいきなり負けてしまったので、偉そうなことはいえないんですけれど、「まったく歯がたたない」という印象ではありませんでした。私があたったロシアの選手は、左で、間合の入り方がとても上手でした。うまくブリーズドフェールされちゃったみたいです。でも「絶対勝てない」「レベルがまったく違う」という感じではなかったと思っています。団体がまた、いきなりロシアとあたってしまいまして、これは45対30で負けてしまいました。そう一方的に負けちゃったわけでもないんですけど……くやしかったです。

あ、それから、日本のテレビにぜ～んぜん映らなかったんですよね、ひどいなあ（笑）。その上私、試合中の写真もないんです。試合場にカメラ持って行ったんですけど日本人がほとんど見に来てなくて、「撮ってくださ～い」って頼める人がいなかった！　先輩に「田中、お前ホントに試合やってきたの？　遊びに行って来ただけじゃないのかあ？」って言われたんですけど、ちゃんと試合もしてきたんですよ！

フェンシングのメンバーは女3人男1人。水泳や柔道みたいに期待されてたわけではありませんが、とにかく「元気に明るく」がモットーでした。試合で結果を残すことはできませんでしたが、「元気」のほうは最後まで、忘れなかったな、と。

フェンシングはマイナーで、見ていてもわかりにくいから、などの理由で、オリンピックの種目からも消えてしまう可能性があるとも聞きました。新聞記者の方にも「メダルの可能性も少ないし、公式種目からはずされると言う話もありますが、どうですか」なんて、ずいぶん聞かれましたけど、「少なくとも出場しなくちゃメダルもないじゃありませんか」って答えたんですけど……強気すぎましたか？（笑）

難しいとは思いますが、フェンシングがもっとメジャーになってほしいし、私自身もできる限りは選手生活を続けたい。そのためにも、今度のオリンピックは本当にいい経験になりました。支えて、応援してくださった監督、OB、現役、みなさんにお礼を言いたいと思います。

1994年

●九州場所で全勝優勝した大関・貴乃花が第65代横綱に昇進。大相撲に曙・貴時代到来する。

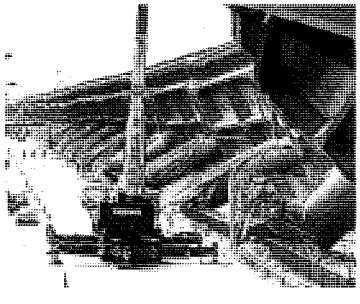
●オリックスのイチローが、9月20日対ロッテ戦で200本安打を達成する。この年の最終成績は打率3割8分5厘、安打210本。

1995年

●大リーグ、ロサンゼルス・ドジャースの野茂英雄が大活躍。オールスター出場のほか、奪三振王、新人王も手にする。

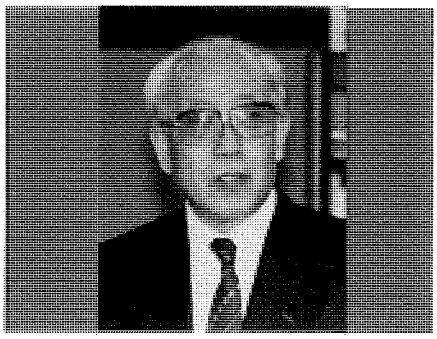
●東京都知事に青島幸夫、大阪府知事に横山ノックが当選する。無党派層の急増が大きな原因。

●兵庫県淡路島近くを震源とするマグニチュード7・2の激震が発生。神戸を中心に6000人を超える死亡者が出る。



創部50周年に寄せて

部長　戸谷高明



早稲田大学フェンシング部は創部50周年を迎えました。この記念すべき年にめぐり合うことができたことは大きな喜びです。

50年の歴史は決して平坦な道のりではなかったと思いますが、この道一筋に尽力してこられた諸先輩に敬意を表するとともに、部の活動をご支援くださいました学内外の方々に心から感謝を申し上げたいと思います。

早稲田のフェンシング部が誕生しました昭和21年は、終戦の翌年でわが国未曾有の時代でした。GHQの占領政策により剣道部の活動が禁じられたことが、フェンシング部創立の契機であったと聞いています。古来の剣道と西洋のフェンシングとは「剣」による競技として相通じますが、競技種目や方法において一致しません。後に剣道部が復活するにおよんで、フェンシングの競技を本道とするフェンシング部として活動してきました。

星霜50年、この間の部の歴史については別記されるものと思われますが、輝かしい実績の一端を示しますと、昭和28年のリーグ戦でのエペ優勝を初めとして、30年のフルーレ優勝、31年の二種目優勝・総合優勝と大学日本一、32年リーグ戦連続優勝と大学日本一、このほか全日本選手権個人優勝など。

また、世界ジュニア代表・世界選手権代表・カデ世界選手権代表にも選ばれて多くの部員が活躍しました。ソウル五輪に代表を送りましたことは記憶に新しいところですが、アトランタ五輪にも女子の日本代表として現役の部員が選ばれるという朗報に接しています。

顧みて、初代部長・滝口宏先生の長い間のご尽力を忘れることはできません。とくに大学の体育厚生施設の完成にともない待望の専用練習場ができたことは画期的なことでした。

部員の構成は、附属校・系属校や各学部の推薦入学者、一般入学者など多彩ですが、いずれも高校時代の経験者で、監督・助監督・コーチの真摯な指導によって心技ともに充実し、中でも女子部の躍進が期待されています。

リーグ戦に加えて、48回を数える早慶定期戦は貴重な部の歴史です。学生スポーツの真髄を自覚し、文武両道に優れた人間として成長して欲しいものです。

稲光会（OB団体）の支援や指導は部活動の原動力になっています。本会は毎年10月10日を「稲光会の日」と定め、会長杯争奪戦のあと、OB・家族・部員が交流して一体感を深めています。

フェンシングは機敏な決断、激烈な闘志、軽快な動作が求められる高度なスポーツであると思われます。

50周年の節目にあたり、今後のフェンシング界のますますの隆盛と早稲田大学フェンシング部の充実を期待いたします。

深みにはまって25年

監督　川名宏美

「ダメだよ。国士舘に負けちゃったんだ」

電話口から佐藤武前監督の弱々しい声。仕事を早めに切り上げて新宿区若松町のフェンシング部寮へ車を飛ばした私。連れ立って近所の「弁天」という一杯飲み屋へ行った。昭和45年4月。その年のリーグ戦初日の夜の事だった。

その時、佐藤武前監督は盃を手にしながらポツリともらした。「俺はもう疲れた。川名、監督を代わってくれ」。私は軽い気持で答えたのだった。「ええ、いいですよ」――。

それはいわば酒の席でのやりとり。翌日には、私はその事をケロリと忘れてしまっていた。しかし、将にその一言が、その後の25年間という長きにわたって、私をフェンシングの世界に深々とはまる羽目に陥れようとは思ってもみなかった。

その年、早稲田はリーグ戦二部優勝。入替戦で立教を破り一部復帰と状況は急旋回する。そして、その年の稲光会総会で「来年（46年）のリーグ戦後に監督は佐藤から川名に交替する」と決議されたのだった。リーグ戦後に、という条件は佐藤武前監督の私への思いやりである。つまり再び二部に落ちたら、監督になったばかりの川名が可哀想だ。リーグ戦の結果までは俺が責任を持つと総会で前監督が発言されたのだ。出席者一同「それもそうだ」とうなづく。つまりはそれほど弱い部だったのである。

こうして私は監督の座に就いた。フタを開けてみてビックリした。選手がいない。部員数10人。うち四年生4人は翌年のメンバーにはなり得ない。とすると残りは6人。一応経験者は4人いる。としても、とても一部で戦えるレベルではない。まして4人で3種目をこなすわけにもいかない。未経験者に種目を振り分けて、あとはレッスン、レッスン……。

昼休みに一時間、2人ほどレッスンを取り、いったん出社し、夕方の練習に再び駆けつけてまたレッスン。それでも手が回らないので、2人ほどを選んで自由ケ丘の東京フェンシングスクール（TFS）に通わせた。費用は稲光会持ちである。TFS組も昼の練習を終ると、夕方には早稲田へ帰って来て合流する。

練習だけはひたむきにやった。が、翌年のリーグ戦は最下位。二部との入替戦に辛勝して一部残留。毎年々々同じような繰り返しだった。

勝利の喜びといえば入替戦に勝った時だけ。二部落ちした時は地獄の底へまっしぐらの心境。一部優勝など夢のまた夢。監督就任時のバラ色の夢がだいに色あせてくるにつれ、あ～あ、もうイヤだイヤだ。オレにだって仕事がある。家庭もある。なんだって自分一人、こんな辛い思いをしなけりゃならないんだ。いっその事、思い切って辞めちゃおうか。そんな思いがチラチラと去来する。

しかし辞めようにも後任者がいない。さらに、弱体なりに一生懸命頑張

一枚岩の堅牢さ

稲光会会長　金子　誠

っている部員たちの姿を見ると、情が移ってしまい、引っ込み加減の腰もシャンと伸びてくるのだった。こうして10年、15年――。

考えてみると、こうした体験が私の監督としての原点をかたち造ったといえる。何よりも部員たちとの一体感をしっかり持てたことが心強かった。泣くも笑うも一緒にやろう。20歳、30歳と年齢の離れた若者たちと共通の目的を持ってひたすら邁（まい）進する。実に素晴らしい事ではないか。

そうこうするうちに私は定年間近となった。ここが一つの岐路だった。再就職すれば監督業を全うする事ができない。体育実技の非常勤講師だけの収入では生活がおぼつかない。二者択一を迫られる毎日が続き、落ち着かなかった。

ちょうどそんな時、タイミングよく中大が、それまでの週1クラスから3クラスに増やしてくれ、早稲田も女子のクラスを2つ追加してくれたのである。よし、これでいける！　家族の了解も得た。そして55歳の定年。私は迷わずフェンシングのみの生活に踏み切ったのだった。

部の流れも変わった。女子の台頭と部員数の激増。ここ2年間は推薦入学で男女とも複数の選手を獲得できるようになった。質量ともにレベルアップし、厚味を増してきたのである。今や男子も一部復帰を射程距離にする位置にある。50年の歴史を積み重ねワセダは再び息を吹き返さんとしているのだ。

OBの方々から寄せられた声援、御好意には、ただただ感謝するばかりである。その期待に応えるためにも、もうひと踏ん張りの心境だ。

早稲田大学フェンシング部は昭和21年、剣道部諸先輩の御尽力により、体育会の承認を得て創部されました。戦地より復員された先輩部員たちが竹刀（しない）を剣（フルーレ）に持ち替えて練習に励む一方で、時を同じくして部活動を始めた中大、立大、拓大、日大そして戦前から活動を続けていた慶大、明大、法大等と協力し合い、関東学連の創設に奔走したのでした。そして23年にリーグ戦開始。これが現在に至るまで連綿と続いているわけです。

この50年史を見てお分かりのように、早稲田は昭和30年前後に各種目において好成績を挙げ、大学日本一の座にもついております。

しかし30年代半ば頃から、いわゆる受験戦争のあおりで優秀な高校選手の入学が困難となりました。経験者の供給源は主として早稲田高等学院に頼り、他は大学に入ってから入部して来る部員を鍛えながらメンバーを揃えるという苦しいやり繰りの連続。インターハイで活躍した選手を中心にメンバーを組んでくる他校との実力差は大きく、一部～二部を往復する苦難の時代を迎えます。

初代部長であった故・滝口宏先生はフェンシングにことさら情熱を燃やされ、一早稲田の部長にとどまらず日本フェンシング協会副会長、関東学連会長、日本学生連合会長等、要職を兼任され、常に部員たちの活躍に温い眼差しを注いで下さいました。先生の夢は早稲田が再び強さを取り戻し、わが部からオリンピック選手を出すという事でした。残念なことに先生はこの夢を果たす事なく他界されてしまいました。

しかしその後、'88年ソウルに出野晴信君、'96年アトランタに田中奈々絵君と2人の現役部員がオリンピック代表になっています。泉下の先生もさぞお慶びの事と思います。

創部以来の50年間に、稲光会は一百名近い大世帯にふくれ上がりました。その会員諸氏全ての願いは、滝口先生同様、現役が強くなる事にあるでしょう。

リーグ戦優勝はもちろんのこと、全日本制覇そして国際レベルへの飛躍を願っている事でしょう。その一端は実現してはいますが、部全体の働きからすれば、まだまだこれからというのが実情です。

当会はバックアップ団体として、部員たちの活動には出来る限りの協力をしてきました。それはもちろん、これからも続けていく所存であります。現役たちにとって稲光会は物心両面を支える心強い存在であるに違いないと、私は秘かに自負しているのです。

私は長年にわたって会長を務めさせて頂いております。しかしこれは、優秀な幹部会員諸氏に支えられての事なのです。

幹事長の北原君、彼を補佐する重鎮の成瀬君、監督の川名君、幹事役の成田君、吉田君、橋本君、中村君。そして若い幹事役諸君……。大勢の人たちが私の足元をガッチリ固めてくれています。特に幹事の中心をなす吉田君、橋本君、中村君たちは毎週月曜日夜に母校へ足を運び、部員たちに混って練習をしています。この「月曜会」の存在が稲光会の核になっているといえましょう。

なにしろ幹事が毎週集っているのです。そこへ監督も加わる。最近では田中君、内田（敏）君といった若手も参加していると聞いております。用事があれば私なり北原君、成瀬君なりがそこへ顔を出せばいい。たちまち即席の幹事会というわけです。

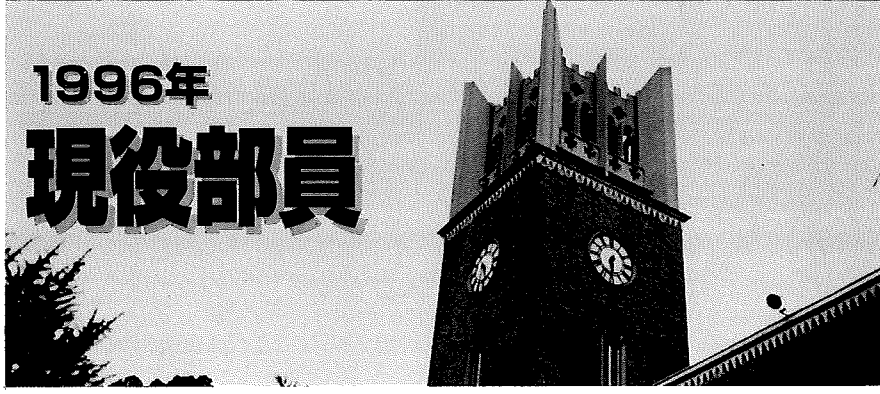
意志の疎通があります。この核を中心に上下を問わず当会は実によくまとまっています。いわゆる一枚岩、それもとび切り堅牢な一枚岩であるというのが当会の強味です。

50年も経過すると、とかく古手と若手の確執、対立といったものが出て来がちなものです。しかし当会に限ってはそんな事はあり得ません。毎年の10日10日の集い、そして今回の50周年式典にしても、ひと声掛かると10人を超す幹事諸君が集まり、酒を汲み交わしながら和気合々のうちに事が運んで行くのです。

私はただ、そうしたグループの上にチョンと坐っていればよいのですから、大いに助かっています。

ともあれこの50年の間に部長先生は滝口先生から平先生、そして現在の戸谷先生へと受け継いで頂いております。監督は初代中村栄太郎君（故人）から佐藤武君、そして川名君へ。途中成瀬君、荻野君がショートリリーフで務めましたが、再び川名君へと戻り現在に至っております。

当会の揺ぎない体質は誠に慶賀に耐えません。これも全国の会員の皆様の御支援あっての事と深く感謝しております。これからもどうぞよろしくお願い致します。



1996年 現役部員

上杉芳彦
（理工学部四年・主将）

早大フェンシング部が創立して50年という記念の年に、自分がこの部に在籍しているということを喜びつつ、こうして早大でフェンシングができるのも諸先輩方のおかげだと感謝しております。自分は今年で現役を引退しますが、これからも部の発展に微力ではございますが努力していきたいと思います。また、100周年に向けて、今後の後輩たちの活躍を期待しています。

片島章徳
（社会科学部四年）

創部50周年の記念すべき年に現役でいられる事を誇りに思うとともに、素晴らしい諸先輩方や現役諸君に出会えた事を幸せに思っています。今年、我々は二部優勝、一部昇格の夢を達成することはできませんでしたが、私達の果たせなかったその夢は、後輩達が近い将来必ず果たしてくれるものと信じています。我が部のよりいっそうの発展とともに…。

桑波田 卓
（教育学部三年）

50年といいますと私の人生の二倍以上になります。フェンシング部の歴史の中で、私が選手として関わっていられる時間というのは、ほんの一瞬にしか過ぎません。しかし、その一瞬がフェンシング部の歴史をつくりあげるとも言えます。これからも一回一回の練習を大切にし、伝統あるフェンシング部の歴史に恥じない一ページをつくりあげていきたいです。

黒田 尚
（社会科学部三年）

フェンシング部創部50周年という記念すべき年に、この部に在籍していることを誠にうれしく思います。この部の歴史にくらべれば、私がフェンシング部に関わっている期間は、はるかに短いのですが、これからも50年という伝統を汚さないよう、残りの在籍期間をフェンシングに全力でうちこみ、良い結果を残せるように頑張りたいと思います。

田中秀行
（商学部四年・副将）

創部50周年おめでとうございます。私のこの部とのつきあいはまだ7年目ですので、その七倍もの歴史を創った先輩方には頭の下がる思いです。今後はその歴史を創るという大役を私ども現役が担っていくこととなる訳ですが、部員一人一人が卒業しても部を忘れず力を尽くせば、これからも今までに負けない歴史を創ってゆけると信じております。

永野高輔
（社会科学部四年）

創部50周年誠におめでとうございます。このすばらしい記念の年を最上級生として迎えられたことを光栄に思うとともに、責任の重大さを感じています。早大フェンシング部がこのように長い間立派に歩み続けてこれたのは、ひとえに、戸谷部長、川名監督、中村助監督、春日・出野両コーチをはじめたくさんのOB・OGの方々の御尽力があったからに他ありません。

佐藤嘉秀
（政治経済学部三年）

人間は関係性の中で生きており、相対的な面を持つ存在だ。社会に出れば自分がどういう人なのか、社会から教わるというか、見せつけられることも多くなるだろう。今まで社会的に恵まれた境遇にいたために、自分で自分を造ってゆくことしか考えずにすまされた。社会に出たらそれこそ自分の立場を造ることで大変だろうから、学生のうちにそのことを考えておきたい。

本間 真
（社会科学部四年・副将）

創部50周年おめでとうございます。この記念すべき節目の年に現役部員として在籍することができ、また4年生として50代目の卒業となることができ、たいへん嬉しく、光栄なことであると思います。近年、女子が強くなり、男子は今一歩というところですが、今後は男子も強くなり、さらに良い成績が残せるようになっていくと思いますので、よろしくお願いいたします。

田中奈々絵
（教育学部四年）

フェンシング部創部50周年おめでとうございます。記念すべき年に皆様のおかげでアトランタオリンピックに出場することができ、とても光栄に思っています。ありがとうございました。小学校の1年から、フェンシングを始め、大学で早稲田のフェンシング部に入れたことは、とても幸運だったと思います。卒業後もフェンシングは続けていきたいと考えています。

林 隆平
（人間科学部三年）

この記念すべき年に現役でいられることを、心より光栄に感じます。我々現役が先輩方にできる恩返しといえば、一部復帰ただ一つです。来年のリーグ戦は早大フェンシング部創部と同じく、第50回を迎えます。私は学連役員としてこの記念大会を成功させると同時に、創部50周年を飾るためにも、不撓不屈の精神で一部復帰を狙いたいと思います。

中村匡徳
（理工学部四年・主務）

50周年おめでとうございます。私は今年の6月からシドニーに留学しておりますため、式典の方に直接参加できない事を大変残念に思います。思えば私は、一年の後期に入部し、四年の頭にはもうこちらに来てしまったので、実質活動をしていたのは2年半しかありません。しかし、その中で得たものは非常に大きく、異国の地での独り暮らし生活の大きな支えとなっています。

戸ヶ崎郁江
（人間科学部四年）

我が部も創部50周年という大きな節目をむかえることになりましたが、それも諸先輩方が心血注いで部をもり立ててこられたその御尽力の賜物だと思います。50年というと私の生まれるずっと前から部が存続していたわけで、その歴史の長さと深さは想像を超えるものがありますが、今後もますます部に栄えあらんことを祈念し、頑張りたいと思います。

松田義弘
（人間科学部三年）

私がフェンシングと出会ったのは、大学一年の春でした。私の住んでいる市の、文化セミナーに参加したことがきっかけだったのです。初めは、剣を片手で持つという西洋の伝統的格闘技のメカニズムに対して不慣れでした。しかし、フェンシングという格闘技のメカニズムを考えていくと、先生に教えられた伝統的な基本こそが一番合理的であることに気づくのでした。

松原直樹
（法学部三年）

50年という一つの通過点を越え、フェンシング部は、今後さらに大きく成長することと思います。これからの部を担う部員へ。自分自身を信じて稽古に励んで下さい。努力は報われるとは限りませんし、つらい時期もあることでしょう。けれども、利益を追求せず一つの事にかける熱意は、必ず自分自身にとってプラスになります。頑張って下さい。

岡村悦男
（教育学部二年）

早稲田大学フェンシング部創部50周年は偶然ながら私の20周年とも重なり、大変記念すべき年となりました。しかし、女子部は一部優勝まで昇りつめたものの、男子部は一部の洗礼を浴びている状態です。来年こそは51周年で語呂は合いませんが、イチローの背番号にちなみ、〝イチロー効果〟というわけで是非一部へ昇格したいと思います。

本間邦彦
（人間科学部一年）

早稲田大学フェンシング部創部50周年という記念すべき年に入部できた事を僕はとてもうれしく思っています。そして、先輩の方々が残された数々のすばらしい成績を越えることを目標に文武両道を目指し頑張りたいと思います。また、部の最大の目標でもある一部リーグ昇格に少しでも貢献できるように努力したいと思います。よろしくお願いします。

渡辺高志
（理工学部三年）

理工学部の情報学科というところでコンピュータサイエンスを学んでいる関係で、コンピュータの話を少し。世界で初めて電子計算機が動いたのが50年前。回路に使っていた真空管がすぐ切れるので、動作中はずっと見張っていなければならなかった。50年という歳月は馬鹿にならない。とにかくフェンシング部も50周年、記念すべき年である。

新村竜二
（人間科学部二年）

私にとっての1996年は、文武両道をモットーとして精進する年にしようと思っております。今年の春のリーグ戦には、授業のため出場できず部員の皆には迷惑をかけてしまいましたが、その分、秋のカンカレ、インカレでは良い成績を残すことができるよう練習に取り組むつもりです。稲光会50周年というこの記念すべき年に少しでも花がそえられるよう頑張ります。

大西由子
（第一文学部一年）

早稲田大学のフェンシング部で練習していて、私がいちばん楽しいと思うところは部の雰囲気が良いところと、自分自身で考える練習ができるところです。これも創部50周年という長い歴史の中から生まれたものなのでしょう。今まで先輩方が築いてこられた良き伝統を引き続き守るとともに、これからも部員全員で頑張っていきたいと思います。

岡田千恵子
（教育学部三年）

現在私は、良き先輩や後輩、そしていつも陰ながら支援して下さっているOBの諸先輩方に囲まれて、伸び伸びと練習することができています。それも創部50年という伝統の中でつちかわれた努力の結晶がこの良き環境を生み出したのだと思います。あと残り少ない学生生活で努力をおしむことなく、伝統のひとつを築き、納得のゆく形で卒業したいと思っています。

堀井清毅
（教育学部二年）

僕は誰にも負けたくないと思っている。みんなもそう思っているだろうとは思うけど、僕は自分が一番そうであるのだと思っている。絶対に負けたくないと思うから、必ず勝ちたいと思うから、練習をするのです。でも、たまに負けます。勝ちたいという気持ちは十分なのに、練習が不十分なのです。これから、勝つために、十分に練習します。僕は誰にも負けたくありません。

佐藤美子
（社会科学部一年）

創部50周年おめでとうございます。無事50周年を迎えられたのは、数多くの諸先輩の方々の努力や実績があったからこそと思います。私も先輩方に劣ることのないよう、これからも自分を磨いていこうと思います。また、今年は田中奈々絵先輩がオリンピックに出場が決まり、後輩として大変うれしいです。よい監督と先輩方に恵まれて、本当によかったと思っています。

山田順子
（人間科学部三年）

50周年を迎えるにあたって、今一番感じているのは、最高の環境の中でフェンシングができることに対する感謝の気持ちです。この恵まれた、最高の環境で日々の活動ができるのは、50年間にもわたる諸先輩方の努力の積み重ねがあったからです。今の状況をあたりまえのものと考えずに、常に感謝の気持ちを持ちながら、一日一日を精一杯努力していきたいと思います。

川津陽介
（教育学部一年）

私は早稲田大学の学生として50周年を祝うことができることを誇りに思います。50年といえば人間の歴史において、また早稲田の歴史においてもひと言では語り尽くせないものがあります。もうすぐ21世紀になり、若い人々が先頭に立って新しい世界をつくっていかねばなりません。私もその中の一人として、よりよい未来をつくるために勉学に励んでいきたいと思います。

原田あゆみ
（教育学部一年）

初めて道場を訪れた時、広いな、と感じたのと同様に、何年後かの自分がイメージできたのを今でも覚えています。初心を忘れず、自分に妥協せず、何事にも前向きに取り組んでいきます。監督や先輩方、仲間に恵まれた環境の中でフェンシングができることは光栄ですし、とても嬉しく思います。あとは自分次第だと思うので、精一杯頑張ります。

出水宏和
（第一文学部二年）

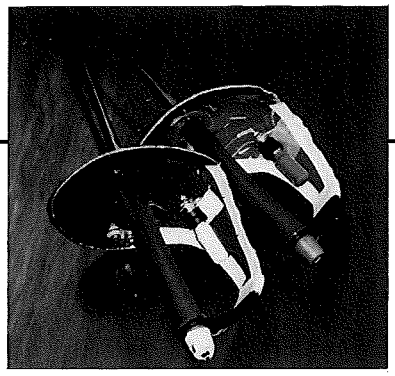
記念すべき稲光会50周年のこの年に伝統ある早稲田大学フェンシング部に在籍していることを喜ばしく思い、また誇りに思います。今年は私にとって大学2年目にあたり、様々なことに挑戦しようと考えています。OBの方々は、フェンシング部をふるさとのように思われていることと存じますが、私も愛校心を持って、たゆまぬ努力を続けていこうと思います。

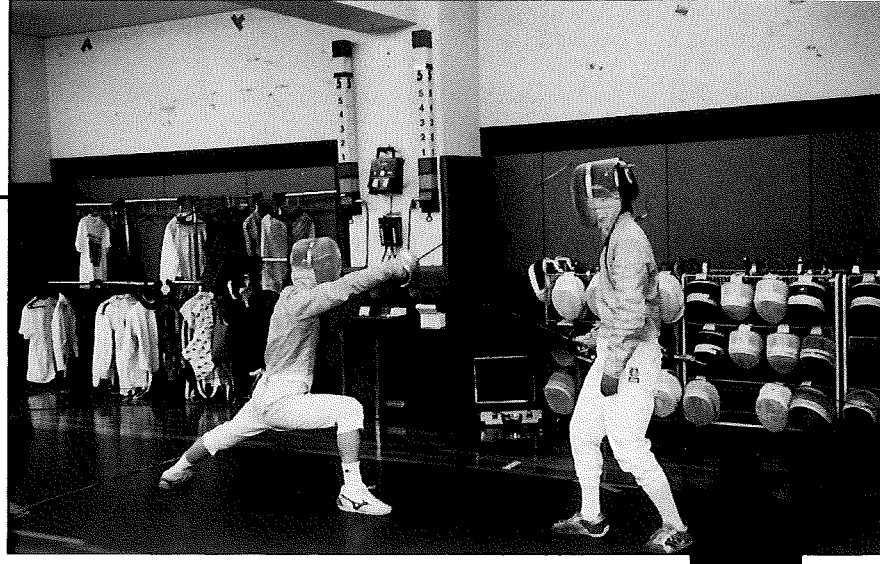
高原庸介
（政治経済学部一年）

早稲田大学フェンシング部は、今年で創部50周年を迎えました。この50周年という記念すべき年に早稲田大学フェンシング部に入部できたことを、僕はとても誇りに思っています。50年という長い時間から見れば、僕が部で活動するであろう4年間はとても短い時間です。しかし、その与えられた時間の中で最大限の努力をしていきたいと思います。

水上真帆
（人間科学部一年）

いろいろな想いを抱いて早稲田大学フェンシング部に今年入部しましたが、創部50周年という節目の年ということで、とても光栄に思っています。リーグ戦や王座では優勝したり、オリンピックに出場される先輩が出たりと、よき先輩方をお手本として、私自身もこれからのフェンシング部の歴史を築いていく一人として頑張っていきたいと思います。





ルール改正の中で最も変化が大きいのがサーブルだ。電気サーブルになってからは、動きや戦法もだいぶ変わってきた。写真上は、サーブルのガード内にあるセンサー

最新ルール解説

ここ数年、FIE（国際フェンシング連盟）によるルール改正は目まぐるしいものがあります。20代の若手OBでさえ「今の試合にはついて行けない」と嘆くほど。ましてや30年、40年以前の文字通りオールドボーイにとっては「今、フェンシングはどうなっているのか？」というのが正直な心境でしょう。そこでこの際、まとめてみました。これさえ知っておけば万全、という最新試合ルールです。早慶戦その他観戦の折にとまどわずに済むように、ぜひ御一読を―。

※

「サーブル」 ◆電気サーブル　最も変化の激しかったサーブルから始めましょう。フルーレ、エペ同様に電気審判器による判定が全面的に導入され、関東学連では平成5年のリーグ戦から実施しています。ガードに取り付けるセンサーがブレードの衝撃を感知してランプを点灯する仕組になっており、ユニフォームからマスク、グローブまですべてメタル製。下半身の無効面を叩いても、フルーレと違って白ランプは点灯しません。したがって同時攻撃で一方が無効面をトゥシュした場合ランプは灯らず、有効面を叩いた者のポイントになります。アタック無効面、コントルアタック有効面のケースでも判定は同様です。双方のランプが同時に点灯した場合は、従来通り攻撃権を優先させての判定となります。この時だけはこれまで同様に「強者有利」の判定に偏る事はいなめません。しかし白ランプは無点灯のため、旧ルール時代の棄権（アブスタシオン）が無くなり、試合時間は大幅に短縮され、判定もかなりスッキリしてきました。

◆フレッシュは禁止　前進に際して足を交差させる事は違反行為として禁止されています。パサバンで追ってフレッシュで仕止めるという従来のサーブル独特の戦法は全面的に否定されてしまったわけです。これは危険防止と試合展開の単調さを防ぐための措置。その代わりアタック・シムルタネー（同時攻撃）の回数制限は無くなりました。これにより最近のサーブルではシムルタネーをくり返しながら様子を見るというかけ引きが多くなっています。また、スピーディーに前進、後退をくり返しながら自分のフレーズに持ち込むチャンスをうかがう等、フットワークの重要性が非常に増してきました。

※

「試合形式」 ◆警告線は廃止　従来の警告線（フルーレは1m、エペ、サーブルは2m）は無くなりました。代わって3種目共通のシグナルゾーンが設けられています。これはエンドラインから2mの所にラインを引き内側をテープで斜めに×印をつけます（写真参照）。警告がなくなったため、ピスト上の選手は後退を続けて両足共にエンドラインから飛び出すとトゥシュの宣告を受けてしまいます。そのためシグナルゾーンを作るわけです。後退を続ける選手がシグナルゾーンに入ると、×印のテープが視野に入ります。その時点で選手はもう後がないと知り、足を止めて戦わなければなりません。公式戦では、シグナルゾーンのテープはイエローまたはオレンジなど目立つ色合いのものを使用する事になっています。

◆試合は4分間　5本勝負の試合時間は4分間（実動＝アレからアルトの間までの積算）。1分前の警告はありません。4分経過した時点で試合は終了し、リードしている選手の勝ちとなります。同点の場合は1分間の延長戦が行われます。

◆延長戦　延長戦に入る前に主審は抽選（コインのトス等）で選手のいずれかにアドバンテージ（優位権）を与えます。1分間経過して得点がない場合、アドバンテージを得た選手の勝ちとなるわけです。延長戦は1本勝負で、どちらかが先にトゥシュを挙げたら、その時点で試合終了となります。

◆団体戦　団体戦は3人　国際試合での団体戦は3人制となり、これを受けて平成7年のリーグ戦から日本でも3人制を導入しています。3人ずつの総当たりのため、合計9試合。5勝したチームの勝利となります。従来の4人制6試合に比べると非常にテンポが早く、平均30～40分程度で1試合が終了します。

◆リレー戦　団体戦の最も新しい試合方法。9試合の得点合計45点を先取したチームの勝ちとする新方式です。各試合毎に得点上限が定められており、これは5本勝負を基盤にしています。つまり第1試合は5点まで、第2試合は10点まで。以下5点ずつ加算してい

ルールは急速に変わっています！

き、最終9試合目のトータルが45点となります。仮りに第1試合でAチームの選手が5―3とした場合、第2試合に移ります。ここではAチームの選手は、上限が10点だからあと5点。しかし3点で交替したチームの選手は7点まで取れます。以下、最終試合まで、各試合の上限得点まで選手たちは戦うわけで、チーム得点を次々にリレーしていくところから「リレー戦」と呼ばれています。国際試合では'95年から導入されてましたが、日本では平成9年のリーグ戦から実施される事になるでしょう。

◆入替戦は種目別　平成5年のリーグ戦から、入替戦は種目別に行われています。従来の総合制度は日本独特のもので、国際試合では存在していません。これはリーグ戦発足当時の名残りの制度で、国際化を計る日本としては、種目別の勝負を競う方式に転換すべきだとの議論が何年も前から出ており、それがやっと実現したものです。総合制度は3種目の戦力均一化という点で、それなりの効果を果たして来ました。その反面、総花的に戦力が散るというマイナス面も目立ち、特にエペ、サーブルの国際的な立ち遅れにつながっているとの指摘があったのです。日本では今もってフルーレ優先主義がまかり通り、エペ、サーブルは2の次とされています。しかし海外では3種目がそれぞれ独立した種目で、専門の選手を養成しているのです。フルーレで勝てなかった選手がエペあるいはサーブルの予選に出場し代表になる―こんなレベルでは国際舞台で通用するはずがありません。その弊害を少しでも排除するため、取りあえず入替戦から種目別に切り替えようとしたわけです。

効果はすぐに現われました。平成8年のリーグ戦で東京農大がエペに優勝、入替戦で日体大を破り一部入り。その直後の王座決定戦では決勝戦で一部優勝校の専大に勝ち、エペの大学日本一の座に就いたのでした。総合制度時代には考えられなかった快挙といえましょう。このため関東学連の一部校では「打倒農大」を合言葉に必死でエペに取り組んでいます。この事が近い将来、日本のエペのレベルアップ、国際化につながることと期待されております。早稲田も、女子がエペで頭一つ抜きん出ているわけですが、これは彼女たちが他校選手たちより多くの時間を費してエペと取り組んで来た成果なのです。

◆個人戦　個人戦のトーナメントは15本勝負（実動）。3分間経過した後1分間の休憩、また3分間戦って1分の休憩。最後に3分間戦うという形式で、試合時間は9分。勝負がつかないままのタイムアップ後の方式は団体戦の場合と同じです。

選手権試合のようにチャンピオンを決める大会では、原則として予選はプール戦（5本勝負）。一回戦からトーナメントに移ります。選考会では最後まで5本勝負のプール戦を繰り返し、試合数を多くして公平を期すようにしています。

◆違反と罰則　ルール違反を犯した選手にはまず警告、次いで罰則が科されるのは従来通り。ただし最近は観客にもそれが分かるように、サッカーの試合と同様、警告にはイエローカード、罰則にはレッドカードを明示するようになっています。国際試合では実に厳しく違反をチェックし罰則を与えていますが、日本では審判と選手が仲間同士のため、レッドカードの明示はほとんど見られません。こうして甘やかされた日本選手が国際試合でいきなりイエローカードに続きレッドカードを提示され、そのプレッシャーで萎縮してしまうという例が少なくありません。

※

「終りに」　ここ数年、どうしてルールが次々に改正されるのか。こんな質問を方々で耳にします。その答えの前提としてルール改正の底流に「素人でも分かるように」という考え方があるという事を頭に入れておいて下さい。この場合の素人というのはテレビの前の観客の事です。

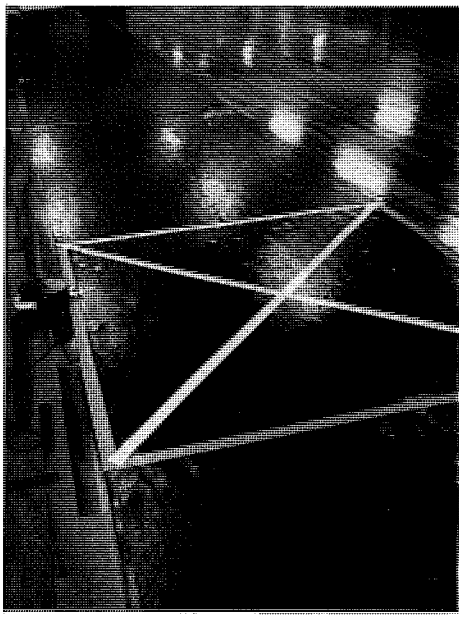
すなわち、オリンピックのテレビ放映を前提とし、各競技とも規則が洗い直されているわけです。特にフェンシングは分かり難い競技の代表とされており、IOCからFIEに様々の注文がつけられ、FIE側も出来る限りそれを受け入れるよう努力しているわけなのです。

テレビ放映権料がオリンピック開催の最大の財源である以上、IOCもテレビ局側の希望を無視するわけにはいかないのです。極端な話、フェンシングの難解さの代表はフルーレ、サーブルにおける攻撃権の問題。これを廃止してエペ並みにランプの点灯だけで勝負を分かりやすくしてはどうか、という提案までIOCから出されています。

FIE総会でこの案が提示された時、さすがに「フェンシングの最も大切な部分が損われる」として反対する委員が多く、ペンディングになったままという一幕も実際にあったそうです。業を煮やしたIOC側は「オリンピックではエペだけを実施種目としたい。その他の分かり難い種目は世界選手権等、自分たちだけの大会で好きにやったらどうか」と、非公式ながら意見を洩らしたとも伝えられています。

ともあれ、こうした背景によるルール改正ですから、これからもどんな案が出されるか分かりません。その場合は、その都度「稲光会報」に掲載します。お見逃しのないように。

（川名宏美）



ピストエンドから2mのところに×印が描かれ、シグナルゾーンが設けられている。両足がエンドラインから出たらトゥシュとなる

●早稲田大学フェンシング部50年のデータ

年度	部長	監督	主将	リーグ戦	早慶	立命	その他、備考
1946 S21							稲門剣友会総会でフェンシング部設立を認められ、部作りが始まる
1947 22	滝口宏		小藤清己				
1948 23	〃		原猛	3位	早		関東学連設立、リーグ戦始まる
1949 24	〃		〃	3位	早		
1950 25	〃	中村栄太郎	森騰史	5位	慶		一、二部制新設により二部へ移行
1951 26	〃	〃	佐藤武	2位	慶		
1952 27	〃	〃	潮田英彦	3位	慶	立	
1953 28	〃	〃	島田友右	2位	早	早	一、二部制廃止。リーグ戦エペ優勝
1954 29	〃	〃	青山甲子郎	3位	慶	早	竹村、全日本選手権エペ個人優勝
1955 30	〃	〃	本道博	2位	早	早	リーグ戦フルーレ優勝 本道ユニバーシアード出場
1956 31	〃	〃	竹村晃	優勝	早	早	リーグ戦フルーレ、サーブル優勝
1957 32	〃	〃	川名宏美	優勝	早	早	リーグ戦フルーレ、サーブル優勝 川名、成瀬、ユニバーシアード出場
1958 33	〃	〃	高松清浩	6位	慶	早	二部へ転落する

1959	34	〃	〃	捧　暢夫	優勝（二部）	慶	早	一部へ復帰する（拓大二部へ）
1960	35	〃	〃	北原輝久	5位	慶	早	リーグ戦で電気エペ使用
1961	36	〃	〃	近藤征一郎	6位	慶	早	リーグ戦で電気フルーレ使用
1962	37	〃	〃	慶田浩一	4位	早	早	慶田、関東エペ個人で優勝
1963	38	〃	〃	植竹　清	2位	慶	早	
1964	39	〃	〃	丸山公一	6位	早	早	関東大学対抗戦エペ優勝
1965	40	〃	〃	西沢民夫	6位	早	早	二部へ転落する（日大一部へ） 成田、インカレ・フルーレ個人3位
1966	41	〃	〃	成田龍士	4位（二部）	慶	早	成田、インカレ・フルーレ個人3位
1967	42	〃	佐藤　武	中村立雄	6位（〃）	慶	早	三部との入替戦 リーグ戦終了後、監督交替
1968	43	〃	〃	小代和三	3位（〃）	慶	立	
1969	44	〃	〃	窪田知行	優勝（〃）	慶	早	丹羽、インカレ・エペ個人3位
1970	45	〃	〃	北島　栄	優勝（〃）	早	早	一部へ復帰する（立大二部へ）
1971	46	平　俊文	川名宏美	森居　章	6位	早	早	関東大学対抗戦サーブル3位 森居、インカレ・サーブル個人6位
1972	47	〃	〃	佐藤　勧	6位	早	早	リーグ戦サーブル3位

年度	部長	監督	主将	リーグ戦	早慶	立命	その他、備考
1973 48	平 俊文	川名宏美	佐藤光良	5位	早	立	宮原、インカレ・サーブル個人優勝
1974 49	〃	〃	大川秋彦	6位	慶	早	
1975 50	〃	〃	赤井平二	6位	早	早	関東大学対抗戦エペ3位
1976 51	〃	〃	平野健一	5位	早	早	創部30周年記念パーティー開催 月曜会発足する
1977 52	〃	〃	張 守栄	5位	早	早	張、関東エペ個人優勝、インカレ・エペ個人優勝 慶大二部へ転落
1978 53	〃	〃	篠原英彦	6位	慶	早	
1979 54	〃	〃	森 隆	6位	慶	早	二部へ転落する（国士館大一部へ）
1980 55	〃	〃	武市 聖	2位（二部）	早	早	
1981 56	戸谷高明	〃	内田敏朗	2位（〃）	早	早	遠藤、インカレ・エペ個人優勝 新道場完成
1982 57	〃	成瀬正澄	春日龍二	2位（〃）	早	早	
1983 58	〃	〃	白井 誠	5位（〃）	慶	立	寺田、インカレ・エペ個人3位
1984 59	〃	荻野元平	寺田 洋	優勝（〃）	早	立	一部復帰（国士館大二部へ） 鈴村、エペ・ジュニア世界選手権出場
1985 60	〃	〃	福田雅仁	6位	早	早	鈴村、佐々木、フルーレ・ジュニア世界選手権出場

稲光会からのお願い

50年史をお読みいただいた会員の皆さんには、あらためて稲光会の活動をご理解いただけたかと思います。特に今年は50年という節目の年であり、幹事を総動員して様々なイベントを企画してきました。

近年の現役の活躍には目を見張るものがあります。50年目にして、二人目のオリンピック選手が出たことは、ご承知のとおりですが、これからも世界へ向けて羽ばたいていく現役も数多く育ってきています。

そこで、会員の皆さんには、稲光会費の納入をお願い致します。とにかく会の活動を支えるものには、お金が大切になります。幹事たちの積極的な熱意だけではどうにもならないことも数多くあります。年々、会員数も多くなっており、稲光会報の通信費用だけみても、増えることはあっても減ることはありません。

毎年、会費を納入いただいている会員の方々には、これまで通りに、そうでない方は、ぜひ50年の今年から、せめて会費だけでも納入いただき、稲光会の活動に参加いただきたいと思います。よろしくお願い致します。

〈稲光会費の納入先〉
第一勧業銀行四谷支店
(普)1007895早稲田大学稲光会

編集後記

稲光会幹事の新井先輩から、フェンシング部50周年の話を聞いたのは、昨年の秋だった。

「あ〜、もう50年ですか…」「で、50年史なんだが……」「え、50年史?」「そう。10月10日までに作ることになる」「まさか、今年じゃないですよねえ」「ああ、来年、来年」「じゃあ、何とかなるでしょう」

これまでの稲光会報のノリで、簡単に引き受けてしまったのだが、時間のたつのは早いもので、気がつくと春がすぎて初夏に入っていた。まだ何も手をつけていない状況で、すでに7月に入ろうとしているときには、内心ヤバイなと思いつつも、まあ、何とかなるハズとタカをくくっていた。

それが7月末になって、トタンにあわて出してしまった。土・日をフルに使い、さらに平日の深夜に作業をしても、なかなか進まない。

30年史の編集後記を読んで、ますます不安がつのる。川名監督が「胃が痛くなる毎日、もう二度とやりたくない」と書いているのを読むにつけ、こちらの胃も少々うずき出す。とにかく、原稿が来なければ手も足も出ない。写真の方は、30年史があり、ある程度は使えるが、それでも30年以降の20年間分は、なかなかそろわない。

8月のお盆をすぎても、まだ原稿がそろわないのには、本当にまいりました。10月の式典までには必ず、できていなければならない。そのためには8月末がデッドラインなのでした。

しかし、何とか皆さんのご協力もあって、完成することができました。川名監督、小川会員、そして小幡会員には、快く協力を引き受けていただいて、心より感謝しています。

30年史とダブる所がありますが、すでに30年以降の会員も数多く、もう一度、創部時のことを知るのは価値があるとの判断からです。50年史の編集に携われたことは、私にとって幸運なことだと思っています。

(平野健一)

早稲田大学校歌

都の西北早稲田の森に
そびゆる甍はわれらが母校
われらが日ごろの抱負を知るや
進取の精神学の独立
現世を忘れぬ久遠の理想
かがやくわれらが行手を見よや
わせだ　わせだ　わせだ
わせだ　わせだ　わせだ

東西古今の文化のうしほ
ひとつに渦巻く大島国の
大なる使命を担ひて立てる
われらが行手は窮り知らず
やがても久遠の理想の影は
あまねく天下に輝き布かん
わせだ　わせだ　わせだ
わせだ　わせだ　わせだ

あれ見よかしこの常盤の森は
心のふるさとわれらが母校
集り散じて人は変れど
仰ぐは同じき理想の光
いざ声そろへて空もとどろに
われらが母校の名をばたたへん
わせだ　わせだ　わせだ
わせだ　わせだ　わせだ

校閲・坪内逍遙　作詞・相馬御風　作曲・東儀鉄笛

早稲田大学フェンシング部50年史
平成8年10月10日発行
編集　早稲田大学稲光会
発行　金子　誠